

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」 ——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方（2）

夏 剛

「三農」難題・「1号文件」・「一年／一日之計」

洋の東西を問わず女性より男性の自殺率が高いと『日本大百科事典』の解説は断言するが、異質・異形の「発展途上超大国」（造語）中国の「男低女高」は世界の唯一の例外と為る。2011年の世界自殺予防日（9月10日、世界保健機関 [1948年設立] 03年制定）の前日、中国疾病予防控制（制御）中心（02年発足）が中国の自殺率を公表し、自殺者は毎年30万人に上り、内の3/4が農村の住民で、更に農村女性の自殺が男性より25%も高い、という実態を明らかにした。他の国々の自殺率の「都市部>農村部、男性>女性」の法則と正反対の様相²⁹⁾は、数多い「中国の常識は世界の非常識」の現象の1つに過ぎない。恰度35年前に死去した毛沢東の「負の遺産」とも関連するが、その特殊要因は人口比率の非常に高い農村で貧困や虐待に苦しむ女性が多い事に在る。『現代漢語詞典』で2005年の第5版から立項した【三農】（語釈＝「**指**農業、農村、農民」）の用例は、今もそれ以降の「解決好～問題、仍然是全部工作的重中之重」（「三農」問題を善処する事は、依然として全ての仕事の重点中の重点である）を踏襲している。中国独特の「紅頭文件」（「**紅い頭**」の重要文書。同項目＝「**指**党政領導機關 [多指中央一級] 下發的文件，因版頭文件名称多印成紅色，所以叫紅頭文件。」[**指**党・政府の指導機構〈多く中央級を指す〉が下部組織に配布する文書。紙面上部の文書名が多く紅色で印刷されている事から、紅〈い〉頭〈の〉文書と呼ぶ〕の中で、権威度・知名度が最も高いのは毛沢東時代以来の年頭の「中共中央1号文件」である。熟語に「一年之計在於春，一日之計在於晨」（1年の計は春に在り，1日の計は晨に在る）と有るが、1年の方向性や重点を示す1号文件の好例として「文革」末期の3点が思い泛ぶ。1974年1月18日の方は北京大学・清華大学大批判組編「林彪与孔孟之道」（林彪と孔孟の道）を転送し、江青主導の文書は総理「**敲打**」が狙いの「批林批孔」（林彪・孔子批判）運動の火を付けた。翌年の1号文件（1.5）は鄧小平を軍委副主席（序列不明）兼総参謀長に、張春橋を総政治部主任に命ずる旨で、8～

10日後の10期2中全会で中央副主席・政治局常委（李徳生に代る末席）に当選した鄧は、「先軍」伝統に沿って一早く軍委の準最高位と4総部の最高位が与えられた。毛の存命中の最後の全会を司会した周恩来が初日の1年後に逝った事で政治の空白が現れ、異例の遅さで2月2日に出された1号文件は華国鋒を総理代行に当て、葉剣英の病氣中に陳錫聯が軍委の日常業務を仕切る人事の決定である。鄧は領袖に次ぐ実力者と総参謀長の「高危」で「魔呪」（縁起の悪い法則）通りに失脚し、葉も「被生病」（病氣とさせられる）の体裁で干され主流派に取って代えられたが、意識形態・権力両面の政争の右往左往の迷走は毛の死（同年9月9日）で一応終結した。闘争を封印し建設に没頭する胡耀邦総書記時代の1982～86年の1号文件は全て「三農」関係で、日付も1年の計の重要性を強調する様に83年の1月2日を除いて全て元日と為った。

『漢語大辞典』の【一年之計在於春】は「古諺。1年の計劃要在春季考慮安排。意謂凡事要抓紧時間，早作打算。」（古諺。1年の計画は春に思案・着手しなければならない。凡そ事は時間を無駄にせず，早めに計画する必要が有る，という意），『明無名氏《白兔記・牧牛》：“一年之計在於春，一生之計在於勤，一日之計在於寅。春若不耕，秋無所望；寅若不起，日無所辦；少若不勤，老無所歸。”等3点の出典が有る。『日本国語大辞典』の【一年】の成句項【いちねんの計（けい）は春（はる）にあり】は、「いちねん（一年）の計（けい）は元日（がんじつ）にあり」に同じ。*農業全書（1697）一・一“古語にもいへるごとく，一年の計は春の耕にあり，一日の計は鶏鳴にあることなれば”である。春に耕さなければ秋に所望の収穫が無く，寅（昔の時刻名，『現代漢語詞典』の【寅時】では夜3～5時，『広辞苑』では午前4時頃，又その前後約2時間）に起きなければ1日に事が運べない，という氏名不詳の作者が『白兔記』で説いた春耕重視・早起き励行の理屈と一致する。一方，【いちねんの＝計（けい）はかりごと】 [= 事（こと）] は = 元日（がんじつ） [= 元旦（がんとん）・正月（しょうがつ）] にありの語釈は，「（一年の計画は，年の始めの元日に立てるべきである意から）物事は最初がたいせつで，まず計画をたててから事に当たるべきである」，用例に「*譬喩尽（1786）一“一年の謀（ハカリコト）は正月（ショウガツ）にあり。一月の謀は朔日にあり一日の謀は朝にあり” *落語・曆の隠居（1897）〈四代目橋家円喬〉“一年の事は正月に有り其月の事は一日に有り，と言ふから，マア，何うか松の内丈（だけ）は笑って暮したいな”が示される。初出は春を正月に換え2点目は200年前の由来と更に乖離して「一日」を元日に絞ったが，『広辞苑』では【一年の計は元旦にあり】（＝「一年間の計画はその年の初めに決めておくのがよい」）しか無い。李御寧（1934～，韓国の文芸評論家・初代文化長官 [90～91]）は，『「縮み」志向の日本人』（学生社，82）第2章「「縮み志向”六型」の「1 入れ子型——込める」で，石川啄木（名は一，1886～1912，歌人）の「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」を取り上げ，海を蟹と涙1滴に収縮して行く意識は他国では見出し難い日本的な詩作の特性としたが，1年2（208）

の計の春→正月→元日の凝縮・前のめりは日本の近代化の疾走の姿勢を思わせる。鄧小平は近代化の開眼と為る訪日で新幹線に乗った際 (1978.10.26), その驚異的な速度は「有催人跑的意思」(人に走れと催促する感じが有る) と感慨を催した。直後に始動した改革・開放の初期の5年連続の元日辺りの「三農」関連の「1号文件」は、「一年之計在於春」の農本思想と和製熟語「一年の計は元旦に在り」の緊張感を持ち合せた。

『現代漢語詞典』に無い「鶏鳴」は『広辞苑』で、「①鶏の鳴くこと。鶏の鳴き声。“一曉を催す”②(一番どりの鳴く頃であるからいう)丑の時,すなわち今の午前二時頃。③明けがた。夜明け」と説明・例示されている。『日本国語大辞典』の【鶏鳴・雞鳴】の類似の3語義中,和製の②の初出が一番早く(3点中の「延喜式 [927] 六・神祇・齋院司」),漢籍典拠が「春秋左伝-宣公一二年」「史記-留侯世家」と2点も付く③は,5点中の初出「後二条師通記-寛治六年 (1092) 八月十一日」が2番目に古く,「詩経-鄭風・風雨」に由来した①の初出「明月記-文治四年 [1188] 九月二九日」は更に時代が下がったが,最後(3点目)の「太平記 (14C 後) 二・俊基朝臣再関東下行向事“旅館の燈幽かにして,雞鳴(ケイメイ)曉を催せば”」は,中国語の「報曉」(夜明けを告げる)と違う和製表現「一曉を催す」の出処と思われる。日本語に入っていないこの言葉の『現代漢語詞典』の項は,「(動)用声音使人知道天已經亮了:晨鷄~|遠遠伝来~的鐘声。」((動)夜が已に明けた事を音声で人に知らせる。「晨鷄が夜明けを告げる」「夜明けを告げる鐘の音が遠くから伝わって来る)である。『広辞苑』の語釈が「夜明けを告げる鶏」と為る「晨鷄」は『日本国語大辞典』で,「〔名〕 (“晨”は夜明けの意)夜明けを告げるにわとり」と説明され,「田氏家集 (892 頃) 下・七月七代牛女惜曉更各分一字応製一首」等3点の用例が有るが,「陶潜-飲酒詩」の漢籍典拠から来たこの単語は『現代漢語詞典』には無い。丑は文字通り未明の2時頃(『現代漢語詞典』の【丑時】では1~3時)だから,「鶏鳴曉を催す」は夜明けや早起きを促す様な語感も帯びる。『日本国語大辞典』の【未明】は「〔名〕夜がまだすっかり明けきらない時。明け方。夜明け前。びあい」の意で,「文明本節用集 (室町中) “未明 ミメイ 早朝義也”」等3点の用例と,漢籍典拠「後漢書-董卓伝 “引兵急進,未明到城西-”」が付いているが,中国で死語化したこの言葉は『広辞苑』で,「夜がまだすっかり明けきらない時。“一に出立する”▷天気予報では午前〇時から午前三時頃までをいう」と規定されている。「一日之計在於晨」の「晨」は『現代漢語詞典』の①「早晨,有時也泛指半夜以後到中午以前的一段時間」(早朝,時に夜半から正午までの時間を広く指す)なので,「一日の計は鶏鳴にある」の未明~夜明けは大幅に早い,和製成句「朝起きは三文の得/徳」は日・中共通の行動原理・価値観と言える。『広辞苑』の【早起きは三文の徳】の「(“徳”は“得”とも書く)早起きをすると良いことがあるということ。“朝起きは三文の徳”とも」に対して,『日本国語大辞典』の【早起】の内の【はやおきは三文(さんもん)の=得(とく) [=徳(とく)]]は,「早起きは健康によく,また,早起きすると何かとよいことがおこるもの

であるというたとえ」で、「落語・春日の鹿（1891-92）〈禽語楼小さん〉」が用例である。

中国語でも同音（dé）の「得・徳」の混用は此処で早起きの有益性に対する評価を表し、中国語の「益・義」（俱に yì）は朱用純（1617～98、学者）の早起きの勧めに現れる。別称『朱子家訓』の『朱子治家格言』は修身・齊家を宗旨とし、516字の金言は300年余りに亘って知識人に親しまれて来た。毛沢東は『抗日戦争勝利後の時局和我們的方針』（抗日戦争勝利後の時局と我々の方針、1945.8.13）の中で、中国の「掃除」（改造）という任務の完遂に必要な早い着手の「益処」（利点）を説く為に、冒頭の「黎明即起，洒掃庭除。」（黎明即起し，庭除を洒掃す）を引き合いに出した。題・句読点を含まぬ本文の字数は巡り巡って「文革」勃発の日付「5.16」と重なるが、儒教を排除する毛沢東時代で毛の言説に対する「義務学習」（造語）の御蔭で、この2句は流布を止められないばかりか更に普及度が高まった。『現代漢語詞典』の【黎明】（語釈＝「☞時間詞。天快要亮或剛亮的時候」〔☞時間詞。夜が明けようとする時、或いは明けたばかりの時〕）の用例は、「～即起」と「◇被压迫人民盼來了～」（抑圧された人民は待ち望んでいた黎明を迎えた）である。【洒掃】の語釈「〈書〉灑洒水掃地」（〈書〉灑水を撒いて床等を掃く）の用例は「～庭除」で、「〈書〉☞庭院（除：台階）」（〈書〉☞庭 [除＝階段]）の意の【庭除】も、「黎明即起，洒掃～」を用例に挙げている。『広辞苑』の【黎明】は「①あけがた。よあけ。②比喩的に、新しい時代・文化・芸術など、物事の始まり。“近代日本の一を告げる”」の両義で、『日本国語大辞典』の「〔名〕㊦（“黎”は頃おい、明ける頃の意。一説に、黒で、天のまだくらいこと）あけがた。よあけ。りめい。㊧新しい時代や新しい文学・芸術の運動が始まることをいう。また、その時。りめい」も、新しい文芸の運動を主な内容とする点で『現代漢語詞典』の用例の政治色と対照を為す。㊦㊧は其々「伊京集（室町）」等3点、「無名作家の日記（1918）〈菊池寛〉」等3点の用例が有るが、漢籍典拠「史記-高祖本紀“更-旗幟-，黎明-宛城-三匝”」は何故か㊧の方に付く。㊦の最後の用例「作戦用務令（1939）二・一二六“払暁より攻撃を実行するに方り〈略〉黎明を利用し」と同じ戦争関連の内容なので、和製語義の㊧ではなく和製でないはずの㊦の由来と断じ得る。【庭除】の「〔名〕（“庭”“除”ともに“にわ”の意）にわ。庭園」は「除」の解釈が上記と異なるが、「性靈集-八（1079）大夫笠左衛佐為亡室造大日禎像願文」等4点の用例に、「岑参-觀楚國寺璋上人写一切經詩」の漢籍典拠が付してある。同じく『広辞苑』に無い【洒掃・灑掃】は、「〔名〕水をそそぎ塵をはらうこと。掃除のつとめをすること。また、その人。さいそう。せいそう」の語釈に、「太平記（14C後）四・備後三郎高德の事」等4点の用例のみ付けているが、和製漢語の扱いは『朱子治家格言』の日本に於ける馴染度の低さを窺わせる。

日本語に入っていない「治家」は『現代漢語詞典』で見当たらないが、同辞書で不採録と為る「齊家」の『広辞苑』の語釈「家庭をととのえ治めること」、及び用例「修身一」はその意味・性質と重要度を示している。『日本国語大辞典』の項（語釈＝「〔名〕家庭をおさめ整えること」）

の用例は、「集義和書 (1676 頃) 九 “和書たりといふとも、人生日用の受用に益あり、齊家・治国の情に便あらば、あなどるべからず」が 2 点中の初出で、「補注『大学』に “欲_レ治_二其_一国_一者、先齊_二其_一家_一、欲_レ齊_二其_一家_一者、先修_二其_一身_一” とある」は漢籍の影響の証に為るが、『漢語大詞典』で挙げられた「清李漁《風箏誤・閨閣》の「齊家」の用例は和文初出より早い (初名 [当初の名] 仙侶の李 [1611~80] は明末・清初の文学者・戯曲作者)。**【治国】**は「**【名】** 国をおさめること。また、おさまっている国」の意で、「続日本紀-養老六年 (722) 閏四月乙丑 “随_レ時設_レ策、治国要政”」等 4 点の用例と、漢籍典拠「史記-貨殖 “閔市不_レ乏、治国之道也”」が有る。関連の**【治国平天下】**は「**【名】** 国をおさめ天下を平らかにすること」を意味し、用例 3 点の初出「談義本・当世穴穿 (1769-71) 四・乗合ぶねの日記」は「治国」の 1 世紀後に当り、漢籍典拠「大学章句-十章 “右伝之十章、積_二治国平天下_一”」は「齊家」と同源である。『広辞苑』にも両項が有る (= 「国を治めること」, 「[大学] 一国を治めてさらに天下を安んずること」) が、『現代漢語詞典』には「治国」の項は無く第 7 版で**【治国理政】**が追加された。「管理国家和政務：把法治作為~的基本方式。」(国家と政務を管理する。「法治を国政運営の基本方式と為す」) と説明・例示されたこの新語は、「**【核心】** 誕生の同年の後半に急浮上した「**【習近平総書記治国理政新理念新思想新戦略】**」の鍵詞に他ならない。未だに立項されていない「理政」は『広辞苑』で、「政_ミを治める。治世。源平盛衰記二七 “百官を百王の一に任せざるの間”」と為り、『日本国語大辞典』の語釈は「**【名】** 政 (まつりごと) を行なって世を治めること。治政」で、「延慶本平家 (1309-10) 三本・行家大神宮進願書事」等 2 点の用例に、漢籍典拠「史記-天官書 “外則理_レ兵、内則理_レ政”」が付いているが、『漢語大詞典』にも無い「治国理政」は「**【新理念・新思想・新戦略】**と同じ寄せ集めの俄作り^{にわかづく}に過ぎない。『広辞苑』には**【修身齊家_ハ治国_ニ平天下_ニ_ハカ**」が有り (= 「[大学] 天下を治めるには、まず自分の身を修め、次に家庭を和にし、次に国を治め、次に天下を治める順序に従わなければならない」), 『日本国語大辞典』でも**【修身齊家】**(語釈 = 「**【名】** わが身を修め、家庭をととのえること」, 用例 = 「太閤記 [1623] 二〇・八物語巻上・為学」等 4 点)の成句項として、**【しゅうしんせいか 治国平天下 (ちこくへいてんか)】**を設けている (同 = 「『礼記-大学』の “古之欲_レ明_二明德於天下_一者、先治_二其_一国_一、欲_レ治_二其_一国_一者、先齊_二其_一家_一。欲_レ齊_二其_一家_一者、先修_二其_一身_一” による] 自分の行ないを正しくし、家庭をととのえ、国家を治め、天下を平らかにする。儒教において、もっとも基本的な実践論理で、男子一生の目的とされたもの」, 「青年 [1910-11] 〈森鷗外〉 二〇」)。中国は 2004 年から世界中に当地の教育機関と提携する形の孔子学院を大量に開設して来たが、儒教の聖人の名を冠し言語教育・文化普及を通じて海外への影響力の拡大を図る有り形は、『現代漢語詞典』に於ける「齊家」の欠落と「治国理政」の増補の政治的背景と通じる。

『現代漢語詞典』の**【修身】**の語釈は「**【動】**指努力提高自己的品德修養」(働_レ努めて自己的人徳・

修養を高めることを指す)、用例の「～養性」で四字熟語を構成する中国語独特の2字単語は当該項目で、「**圃**陶冶本性；修養心性」(**圃**本性を陶冶する。心性を修養する)と説明され用例は「修身～」である。『**広辞苑**』の【修身】は「①自分の行いを正し、身をおさめととのえること。②旧制の学校の教科の一つ。天皇への忠誠心の涵養を軸に、孝行・柔順・勤勉などの徳目を教育。一八八〇年(明治一三)の『改正教育令』公布後重視され、第二次大戦後廃止」の両義で、『**日本国語大辞典**』の【名】①「自分の行ないを正し身を修めること。身を修めて、善を行なうよう努めること」は、「百丈清規抄(1462)二」等5点の用例と漢籍典拠「礼記-大学“自天子以至庶人，壹是皆以修身為本”」があり、②は語釈「旧学制下の小学校・国民学校などで、道德教育を行なうために設けられていた教科の名。教科は昭和二〇年(一九四五)連合軍総司令部の指令によって廃止」、用例2点の初出「太政官第二一四号-明治五年(1872)八月二日・第二七章(法令全書)」が示す様に、現代の黎明期の所産で敗戦後に占領軍から75年の歴史に終止符を付けられた。21年後に起った「**文革**」でも反「四旧」(旧い思想・文化・風俗・習慣)の名の下に、修身・齊家を基礎とする儒教の道德教育は建国後の衰微に輪を掛けて完全に廃止されたが、『**朱子治家格言**』でも説かれた勤儉等の美德は儒教文化の不滅に由って否定されていない。『**白兔記**』の「一生の計は勤に在り」の理由として、若い時に勤勉でなければ老後に帰着する処が無いと言う。「一日の計は晨に在り」はその実現に繋がる努力の積み重ねに他ならず、『**現代漢語詞典**』の【早出晚帰】(=「出去得很早、回来得很晚、形容辛勤劳作。」「大変早く出掛け、大変遅く帰って来る。勤勉に働くことの形容」)等に、早く出掛け夜遅く帰る昭和日本の企業戦士に勝つとも劣らぬ勤勉根性が窺える。

語釈中の「辛勤」(=「**圃**辛苦勤勞：～耕耘」**圃**苦勞して勤しむ。「苦勞して耕作に勤しむ」)は、『**日本国語大辞典**』(語釈=「【名】苦勞して勤めること。また、つらい勤勞。勞苦」)で示す様に、「南史-劉懷珍伝」の漢籍典拠も用例5点の初出「和漢朗詠(1018頃)下・王昭君」も古いが、日本上陸の千年後の『**広辞苑**』には採録される気配も依然として無い。【**労作**】は「【名】①(一する)骨を折って働くこと。労働。ろうさ。②苦勞して作りあげること。また、その作ったもの。苦心した作品」の両義で、其々「西国立志編(1870-71)〈中村正直訳〉一・二五」等2点、「家(1910-11)〈島崎藤村〉下・一」等3点の用例が付く和製漢語である。『**広辞苑**』の「①骨をおって働くこと。ほねおりわざ。ちからわざ。労働。②骨をおって作ったもの。力作。“長年月を要した”」は、力業・力作を表すこの単語の常用度を示している。『**現代漢語詞典**』の①「**旧**時小学課程之一、教学生作手工或進行其他体力労働」(昔の小学校の教科の1つ。生徒に手工を教え、又その他の肉体労働を行う)は、日本語の「手工」の「小学校・中等学校の旧教科の一つ。現在の小学校の図画工作、中学校の技術・家庭科の前身」(『**広辞苑**』②)と異なる。②「**圃**労働、多指体力労働」(**圃**労働する。多く肉体労働を指す)はその教学内容と通じ、「農民在田間～」(農民が田畑で**労作**する)は①の名・実に於ける「農」の

投影を窺わせる。【労力】の「①[㊦] ㊦ 体力労働時所用的気力。②[㊦] ㊦ 有労働能力の人：壮～ | 農村剰余～。③〈書〉働従事体力労働。」(①[㊦] ㊦ 肉体労働の時に使う気力。②[㊦] ㊦ 労働能力を持つ人。「強壯な労働力」「農村の剰余労働力」③〈書〉働 働 肉体労働に従事する)は、『広辞苑』の「①はたらくこと。ほねおり。“大変な一がにかかる”②生産に必要な人手。労働力。“一が足りない”」(①の用例は第7版の追加)と比べるまでもなく、肉体労働に帰属する性質や「三農」との密接な関連を現している。両言語の共通点として「労」は手を使い体を動かし汗を垂らす作業の形象が強く、「辛苦」「骨折り」と言う様に苦勞・勞苦が付き物である。俱に「力」を字形に含む「勤勞」は中国の「体力・脳力労働」(肉体・頭脳労働)の両方に適用するが、【勤勞】の「[㊦] ㊦ 努力労働、不怕辛苦」([㊦] ㊦ 努めて働き、苦勞を恐れない)は、『広辞苑』の「①心身を勞して勤めにはげむこと」と照らせば、苦を意識する故に苦しめないよう頑張る意志が強調されている。『日本国語大辞典』の【名】[㊦] ㊦ (一する)の語釈にも「勞苦」が出ており(「心身を勞して仕事に勤めること。勤めにはげむこと。また、勤務の勞苦」)、用例6点の初出「続日本紀-天平一三年(741)二月戊午“詔曰、馬牛代^レ人、勤勞養^レ人”」は、漢籍出典「春秋左伝-襄公三年“君之恵也、敢憚^レ勤勞-”」と一脈相通ずる様に勤勞を美德とする。『現代漢語詞典』の用例「～致富 | ～勇敢的人民」(「勤勉で豊かになる」「勤勉で勇敢な人民」)の後半は、「勤勞、勇敢、智慧」(勤勉・勇敢・智慧に富む)という中華民族への自賛に由来する。「勤・智・勇」(中共礼賛の「偉 [大]・光 [榮]・正 [確]」に擬えた造語)は確かに国民性に有るが、勤勉を信条・身上とする中国人は毛沢東時代に何故苦勞が報われず終い^{じま}であったらう。

「光陰似箭」と毛沢東の「只争朝夕」「枕戈待旦」

ニクソン米大統領 (1913~94, 第37代 [69.1.20~74.8.9])は毛沢東との会見 (72.2.21)で、その名言の「一万年太久, 只争朝夕。」(一万年太に久しければ, 只朝夕を争はん)を引いた。彼は毛の詞 (長短不揃いの古典定型詩)「滿江紅 和郭沫若同志」(滿江紅 [詞牌の名]・郭沫若同志に和す。1965.1.9)の中のこの2句を、前の「多少事, 從來急; 天地轉, 光陰迫。」(多少の事は、從來急にして、天地轉り、光陰迫り)³⁰⁾と共に、当日の周恩来主催の「国宴」(国賓を歓待する宴会)で挨拶する時にも引用した。「光陰迫」の主語は『現代漢語詞典』の「[㊦] ㊦ 時間」の意で、用例「～似箭 | 青年時代的～是最寶貴的」(「光陰箭の如し」「青年時代の光陰は最も貴重なものだ」)に有る成句は日本語にも入っている。『広辞苑』の同項目は「(“光”は日, “陰”は月)①月日。歲月。移り行く時。太平記二三“一人を待たず”②月の光。謡曲、融^お “この一に誘はれて月の都に入り給ふ”(「謡」=謡曲)の両義で、【光陰矢の如し】は「月日の早く過ぎゆくたとえ」である。『日本国語大辞典』の【光陰】の「【名】(“光”は日, “陰”は月)①月日。年月。歲月。とき。②光と影。日光と月光」は、①に「続日本紀-養老六年(722)

一一月丙戌」等6点の用例と、漢籍典拠「李白－春夜宴從弟桃花園序“夫天地者万物之逆旅，光陰者百代之過客”」が有り、㉔は用例「本朝無題詩（1162-64頃）五・歳暮言志〈藤原茂明〉」等2点が付く（『漢語大詞典』の【光陰】③「光亮、光芒。」[光。光芒]は、5世紀前の「唐王度《古鏡記》の出典が示される）。【こういん 矢（や）の如（ごと）し】の語釈は「月日の過ぎるのは、飛ぶ矢のように早い。月日のたつのが早いことのたとえ」で、「曾我物語（南北朝頃）七・李將軍の事」等4点の用例は和製熟語の様な印象を与えるが、『漢語大詞典』の【光陰似箭】では3世紀前の「宋蘇軾《行香子・秋興》詞」を「光陰如箭」の出典とする。「佛聖松尾芭蕉（名は宗房、1644～94）は俳諧紀行『奥の細道』（95年刊）の序文で、「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」と漂泊の思いを詠んだ。9世紀前の中国の「詩仙」の名文に擬えた格調高い書き出しの中の「百代」は、100世代（2～3千年）と解せば毛沢東が大変長い歳月の形容に用いた1万年と通じる。「舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老いをむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす」という芭蕉の次の文の中の「日々」は「万年」と対極に在る「朝夕」と接点がある。『現代漢語詞典』の【朝夕】の①「[副] 天天；時時：～相處。」（[副] 日々。時々。「朝な夕な接し合っている」）は、『広辞苑』の「② 明けても暮れても。いつも。毎日」、『日本国語大辞典』の「〔名〕 ① 朝と夕方。あさゆう。転じて、あけくれ。毎日。ふだん。副詞的にも用いる」（用例＝「万葉 [8C 後] 五・沈痾自哀文」等6点、漢籍典拠＝「詩經－小雅・何艸不黄“哀我征夫，朝夕不暇”」）、③「（一する） 常々いっしょにいること。いつも接していること」（用例＝「蘭東事始 [1815] 上」）と通じる。

「あさとゆうべ。あさばん」が①と為る『広辞苑』には時間の短さを表す意は無いが、『日本国語大辞典』の「④ 時間的に、すぐ近くであるさま。間近。旦夕」（用例＝「徒然草 [1331 頃] 四九」）は中国語に近い。『現代漢語詞典』の②は「[指] 非常短的時間」（[指] 非常に短い時間を指す）の意で、用例の「～不保」（朝に夕方の事を保証できない [時間が切迫していること] の形容）の次が「只争～」である。辞書編纂の母体を為す中国社会科学院（1977.5.7 設立）は國務院直属の国家学士院・「^{アカデミー} 智庫」なので、^{シンク・タンク} 準官製の国語辞書に「中共語」（造語）や「国父」語録を入れる必然性が有るが、用例の随所に有る毛沢東の言葉は天安門楼上の肖像画とも似て後世の継承を強要する。海外の学習者を含む国民的辞書の利用者は知らぬ内に中共・毛の言説・思想を刷り込まれ、脳裏に埋められ意識下に浸透された親近感や依存性は呪縛や遺伝子の様な魔力を持つ。尤も「只争朝夕」は国交未樹立時代の「美帝頭子」（米帝国主義の頭）も感心した表現だから、^{イデオロギー} 意識形態の要素が薄く「一日之計在於晨」と同じく内外の普遍的な行動原理に合致する。中国流の「一年之計在於春」よりも進んだ日本流の「一年の計は元旦に在り」と繋がるが、『現代漢語詞典』の【正】zhēng（「正確」等の「正」と声調が異なる）の2つの小見出し（【正旦】「〔書〕 [指] 農曆正月初一日。」〔書〕 [指] 旧曆正月の1日目」、【正月】「[指] 農曆一年の第一個月。」〔指] 旧曆の1年の1番目の月」）の次は【争】¹で、動①「力求得到或達到；争奪」

(獲得或いは達成を極力追求する。争奪する)の用例として、「～冠軍 | カ～上遊」(「優勝を争う」「競って高い目標を目指す」と「大家～着発言」(皆が争って発言する)の間に、「分秒必～」(1分1秒も必ず争う)と有る。【分秒】の語釈は「**分一分一秒**、指極短的時間」(分1分1秒、極短い時間を指す)、用例「～必争(一点見時間也不放松) | 時間不饒人、～賽黄金」(「1分1秒も必ず争う [僅かな時間でも疎かにしない]「時間は容赦せず、分秒は黄金に勝る」)に、【争】¹で例示された四字熟語は解説付きで出ている。『日本国語大辞典』の「**分と秒**。一分と一秒。わすかの間」に、「花柳春話(1878-79)〈織田純一郎訳〉四七」等2点の用例のみが付してある。『漢語大詞典』の**①**「**兩種計時單位**」(2種類の計時単位)には、1053年の「《新五代史・司天考一》」の典故が付されるが、極短い時間を譬える**②**と【分秒必争】は其々建国後と改革・開放初期の用例を使い、**時間に対する緊張感が日本ほど強くない時代が長かった事**を思わせる。

『広辞苑』の「一分と一秒。極めてわずかの時間。“一を争う”」の用例は、「分秒必争」や「争分奪秒」(『現代漢語詞典』の項＝「不放過一分一秒、形容対時間抓得很緊。」「1分1秒も逃さない。時間を有効に使うことの形容)と比べて、「**必**」の決意や「**奪**」の貪欲に及ばない感じもするが、【争う】の「**⑤**(時を表す語を受け)ぐずぐずできず、急を要する意を示す」の用例「入院は一刻を一」と共に、**寸暇を惜しむ両国共通の価値観**と言いつきを見せている。『広辞苑』の【一刻】は「**①**ひととき。**㊦**わずかの時間。“一を争う” **④**昔の一時^{きせき}の四分の一。約三〇分。**②**(“一国”とも書く)頑固なこと。人の言を聞かず、腹立ちやすいこと。傾城買四十八手“手めへのやうな一を云ふものはねへ”“一な老人”の多義であるが、『日本国語大辞典』の「**名**」**①**昔の一時(ひととき)の四分の一。現在の約四〇分。また、中国で一昼夜を昼五十刻、夜五十刻に分けたその一つ、すなわち約一五分間をいう。*宋書-礼志“上レ水一刻”は和文用例が無く、「**②**わずかな時間。ひととき。**瞬時**」は「漢書-武五子伝」の漢籍典故に由来し、「虎明本狂言・入間川(室町末-近世初)」等4点の用例が有る。【一刻・一国】の「**名**」(形動)**①**性急で腹立ちやすいこと。**②**がんでわがままなこと」は、其々「**雜俳・柳多留**一一四(1779)」と同時期の「**洒落本・三都仮名話**(1781)」等6点の用例が付き、又「**補注**」語源は、“一刻”が短い時間を意味し、また急ぐ意を表わすところから生じたとも、一国だけを知って他国を知らない意からともいう」と有る。この擬似和製漢語は中国では「刻」「国」の発音の違い(kèとguó)に由って有り得ないが、**他国を知らぬ狭隘さ→性急・腹立ち易さ**や**頑固・我が儘とは晩年の毛沢東を連想させる**。『現代漢語詞典』の【一刻】は「数量詞。指短暫時間；一会見」(数量詞。短い時間を指す。^{ちよっと}一寸の間)の意で、用例「～千金 | 他～也 没忘記全廠職工的囑託」(「一刻千金」「彼は工場の従業員一同の期待を一刻も忘れていない」)の内の四字熟語は、次の項で「形容時光非常貴重。」(光陰が非常に貴重であることの形容)と解説されている。『広辞苑』の【一刻千金】は出典明記の「**蘇軾**、春夜詩“春宵一刻直千金”」

春の宵の一ときは千金にも値することから、大切な時や楽しい時の過ぎやすいのを惜しんでいう、『日本国語大辞典』の語釈は「値千金」に作り「春の宵の」が無い以外に大体同じで、「中華若木詩抄（1520 頃）上」等 3 点の用例が有る。『現代漢語詞典』の【分秒】で初版から有る「賽黄金」の比喻は、中国語由来の「一刻千金」や日本語の「一寸の光陰は沙裏の金」と通じ合う。

『日本国語大辞典』の【一寸】の成句項【いっすんの光陰（こういん）は沙裏（しゃり）の金（きん）】は、「わずかの時間も、砂の中に見出した金のように、たいせつになくしてはならない。時は金」の意で、用例 2 点の初出「世阿彌筆本謡曲・盛久（1423 頃）“百年の富貴は塵中夢、一寸の光陰は沙裏の金”」は漢文風の対句である。前の【いっすんの光陰（こういん）】は語釈の「わずかな時間」の後に、「補注朱熹の偶成詩“少年易_レ学老難_レ成，一寸光陰不_レ可_レ輕，未_レ覺池塘春草夢，階前梧葉既秋声”からとされているが、朱熹の詩文集にこの詩は見られず疑問。近世初期に五山詩を集成した『翰林五鳳集-三七』には、『進学軒』の題で、室町前期の五山僧惟肖得巖の作としてこの詩が収録されている」と有る。『広辞苑』の【一寸の光陰軽んずべからず】は、「（“光陰”は時間）すこしの時間もむだに費やしてはならない」で、参照を指示する【少年老い易く学成り難し】は、「（近世初期の『滑稽詩文』寄小人詩に見える。一説に、朱子の作とされる偶成詩の句）月日がたつのは早く、自分はまだ若いと思ってもすぐに老人になってしまう。それに反し学問の研究はなかなか成しとげ難い。だから、寸刻を惜しんで勉強しなければならない。▷しばしば、このあとに続く“一寸の光陰軽んずべからず”の意味を含めて使われる」と、日本発・中国由来の両説併記の先哲の垂訓を解説している。『現代漢語詞典』では「一寸」の項も「少年易学老難成」の採録も無いが、【寸陰】（語釈＝「〈書〉図日影移動一寸的時間，指極短的時間」〔書〕図日影が1寸移る時間，極短い時間を指す）の用例に、「～寸金 | ～尺璧（形容時間極其宝貴）」（「1寸の光陰は1寸の金に値する」「1寸の光陰は1尺の璧きよくに値する〔時間が極めて貴重なことの形容〕」）が有る。「寸陰寸金」の語源と為る「一寸光陰一寸金，寸金難買寸光陰」（1寸の光陰は1寸の金に値し，1寸の金を以てでも1寸の光陰は買い難い）は、明に現れ清に修訂された蒙学（児童啓蒙教育）教材『増広賢文』（作者不詳）に見える。俗諺・格言・警句等を集めたこの金言集の多くの断片は、「一年之計在於春，一日之計在於晨。一家之計在於和，一生之計在於勤。」も含めて、**実用的な知恵に基づく人生訓として体制の理念や社会の建前を超える影響力が有る**。『広辞苑』の【寸陰】の「一寸の光陰。ほんのわずかの時間。徒然草“一惜しむ人なし”」、『日本国語大辞典』の「〔名〕ほんのわずかの時間。一寸の光陰」の「懐風藻（751）望雪〈紀古麻呂〉」等 5 点の用例（漢籍典拠＝「向秀－思旧賦」）と比べて、「～寸金」は如何にも**中国的な即物性や利得重視の発想らしい**。

15 分又は 30 分に当る「一刻」を争うよりも「分秒必争」は緊迫感が格段に高いが、両方の「争」と比べて「争分奪秒」は「奪」も併用するから迫力が倍増する。【争奪】の「闘争着奪取：

～市場 | ～陣地 | ～出線権。」(鬪争って奪取する。「市場を争奪する」「陣地を争奪する」「[試合に]勝ち進むよう争う)は、『広辞苑』の「争って物を奪いあうこと。“一戦”と違って物には限定せず、他者と競合しない自分との闘いの「争分奪秒」にも用い得る。『日本国語大辞典』の「〔名〕争って奪い合うこと」は「早霖集(1422)墳塔之戒」等用例4点があり、漢籍典拠「礼記-礼運“尚_二辞讓_一、去_二争奪_一”」は争奪を辞讓の対義語として戒める。【辞讓】は「孟子-公孫丑・上“無_二辞讓之心_一、非_レ人也”」に由来し、用例5点の初出「聖徳太子伝暦(917頃)上・欽明天皇三二年」の様に早く日本語に入ったが、語釈「〔名〕謙遜して讓ること。へりくだって他に讓ること。謙讓」と『広辞苑』の「謙遜して他に讓ること。謙讓」に対して、『現代漢語詞典』の「(鬪)客気地推讓(遠慮して辞退する)は、道徳的な謙讓よりも儀礼上の姿勢の性質を前面に出している。用例の「他～が一番、才坐在前排」(彼は少し辞讓してから、やっと前列に坐った)は、会合等で席を譲り合う両国共通の有り触れた光景として微笑ましい。【推讓】の「(鬪)由於謙虚、客気而不肯接受(利益、職位等)」「(鬪)謙虚・遠慮に由って[利益・職位等を]受けることを拒む」と照らせば、「謙虚」が無く「客気」のみ有る処に虚礼の要素が顕著に現れる。【客気】の「①(鬪)対人謙讓、有礼貌: 説話挺～ | 不～地回絶了他。②(鬪)説客気的話: 做客气的動作: 您坐, 別～ | 他～了一番, 把礼物收下了。」(①(鬪)対人に対して謙讓し礼儀正しい。「話し方は大変遠慮深い」「無遠慮に彼に拒絶の返事をした」②動遠慮深いことを言う。遠慮の動作をする。「どうぞお掛け下さい。御遠慮無く」「彼は一応遠慮してから、贈り物を受け取った)の様に、この言葉は道徳律と処世術、本心・儀礼と上辺・儀式の二面性を持つ。『日本国語大辞典』の【推讓】の語釈は『広辞苑』と略同じの「〔名〕他人を推薦して、みずからは讓ること」で、「万葉(8C後)一六・三七九一・題辞」等5点の用例の後に、漢籍典拠「莊子-刻意“語仁義忠信、恭俛推讓、為_レ修而已矣”」が引かれるが、徳より得を重んじる世の中では「争奪権利」(『現代漢語詞典』の項=「争奪権柄和利益。」「権柄と利益を争奪する)が盛んである。『礼記』の「去争奪」は「尚_二辞讓_一」(辞讓を尚_二び_一)と対に為る「争奪を去る」の意であるが、争奪しに行く事をも表すこの3文字は血気を意味する和製漢風語「客気」に近い。

中国で旧暦の元日を指す「正旦」は『広辞苑』の「①正月元日の朝。元旦」に当り、「②(“旦”は女形の意)中国の演劇で、たておやま」は、『現代漢語詞典』では第4声の親見出し【正】の内に入る。『日本国語大辞典』の「〔名〕①正月元日の朝。元旦。元朝。正朝」は、「俳諧・誹謗通俗志(1716)時令・正月」等2点の用例と「後漢書-陳翔伝」の漢籍典拠が有る。「②(“旦”は女形の意)中国の演劇で、賢母・節婦などに扮(ふん)して、立女形をつとめる役者」は、「桃花扇-選優」の漢籍典拠に由来し「落梅集(1901)〈島崎藤村〉七曜のすさび・土曜日の音楽」の用例は歴史が浅い。『現代漢語詞典』の【正旦】zhèngdànは「(鬪)戲曲角色行当, 青衣的旧称, 有些地方劇裡還用這個名称。」(鬪)演劇の役柄の類型、「青衣」の旧称、一部の地方演劇ではまだこの名称を用いる)、【青衣】(鬪)「戲曲中旦角的一種, 扮演中年或青年婦女, 因

穿青衫而得名。」(演劇の旦の一種、中年或いは青年の女性に扮する。名称は青い服を着ることに因む)と為る。「①指黒色の衣服：～小帽。②古代指婢女。」(①黒い服を指す。「黒い服に小さい帽子」②古代に婢^ひを指した)は、後者が『日本国語大辞典』の「③昔、中国で身分の低い者の着る青色の衣服。また、それを着る人。召使い。しもべ。賤奴」に当り、「①昔、中国で天子や后妃が春着として着用した青い色の衣服」も漢籍典拠が付く、「②“うねめ”(采女)と同じ」は和製語義で、「正旦」の現代の名称は入っていないが、『広辞苑』では単語自体は選外に在る。【正旦】の説明中の「賢母」は文字通りの「〔名〕賢明な母。かしこい母」で、「戦国策-趙策・孝成王」の漢籍典拠と比べて、用例2点の初出「思出の記(1900-01)〈徳富盧花〉巻外・一」は相当遅い。『広辞苑』の「かしこい母。賢明の母。“良妻一”」の様に日本語では四字熟語を構成するが、「良妻賢母」(=「良妻であり賢母である」)、『日本国語大辞典』の語釈=「〔名〕夫に対してはよい妻であり、子に対しては賢い母であること。また、そのような人」、用例=「思出の記[1900-01]〈徳富盧花〉九・六」等2点を為す2単語は『現代漢語詞典』には無く、代りに「賢妻良母」(=「既是丈夫的好妻子,又是子女的好母親。用來稱贊婦女賢惠。[夫のよい妻であり、子女のよい母親である。女性の賢明で気立てが良いことを稱賛するのに用いる])が有る。一方の「節婦」は「〔名〕節操をかたく守る婦人。貞節な女性」の意で、「令義解(718)賦役・孝子順孫条」等6点の用例と「傅玄-和秋胡行」の漢籍典拠が有る。『広辞苑』の「節操の堅固な婦人。みさおのかたい女性」の出典は、別の「福沢諭吉,日本婦人論“古言に一両夫に見^まへずとは如何なる意味なる歟”」である。『現代漢語詞典』の「〔旧時指堅守貞節, 丈夫死後不改嫁の婦女。〕〔旧い時代に、貞節を堅く守り、夫が死んだ後に再婚しない女性を指した)は、日本の辞書と違って貞婦を封建思想の遺物と決め付ける中共の認識を反映しているが、『日本国語大辞典』の【正旦】②の「賢母・節婦」は「正」の品行方正の姿思わせる。

『広辞苑』の【旦】は専ら「中国の演劇で女性に扮する役者。女形。浮, 諸道聴耳世間猿“天地人は一大の劇場, 堯舜は一, 湯武は末”」(「浮」=『浮世草子』)で、『日本国語大辞典』は「〔名〕①夜明け。明け方。朝。早朝。②中国の演劇で女の役。また、それに扮する人。女形(おんながた)」の両義と為る。①に「名語記(1275)四」の用例と「春秋公羊伝-哀公一三年」の漢籍典拠が付く、②の「浮世草子・諸道聴耳世間猿(1766)四・二」の用例の後の漢籍典拠は、「堯舜は旦, 湯武は末」の理解に役立つ「詞余叢話-原律“自^レ北劇興^レ, 名^レ男曰^レ末, 女曰^レ旦”」である。『現代漢語詞典』の「①天亮的時候; 早晨。②(某)天」(①夜が明ける時。早朝。②[ある]日)は、②の用例「一~|元~」が示す様に夜明け・朝に限らず終日を含む意も持つ。①の用例「通宵達~|枕戈待~」(「一晩中。徹夜する」「戈を枕に旦^{はこ}を待つ」)は、地平線に日が昇る様な「旦」の字形と合う様に明け方の事柄を表す。【通宵】(語釈=「〔整夜〕〔一晩中〕」)の用例「~不眠」(一晩中寝ない)の後に、「~達旦(従天黒到天亮)」(括弧中の

説明「夜から明け方まで」の意)が出ている。『広辞苑』にも同項目が有り(=「夜どおし。一晚中。徹宵」),『日本国語大辞典』の「〔名〕(副詞的にも用いる)夜どおし。一晚中。よもすがら」に、「経国集(827)三・奉和搗衣引〈巨勢識人〉」等3点の用例と、「駱賓王-同張二詠雁詩」の漢籍典拠が有るが、「達旦」(『現代漢語詞典』の語釈=「〈書〉 動直到天亮」[〈書〉 動夜明けに至る],用例=「通宵~|~不寐」[不寐=不眠])との組み合わせは遂に生れない。「達旦」と同じく日本語に無い「枕戈待旦」は、「枕着兵器等待天亮,形容時刻警惕敵人,準備作戰。」(兵器を枕に夜明けを待つ。常に敵を警戒し作戰を用意することの形容)である。『中国故事成語辞典』(和泉新・佐藤保編,東京堂出版,1992)の【戈を枕にして旦を待つ 枕戈待旦】は、「意味」戈を枕がわりに用いて夜を明かす。晋の劉琨が、敵を破ることを心にきめ安眠しなかつた故事。意気軒昂なさまをいう。/【出典】“與范陽祖逖為友,聞逖被用,與親故書曰,吾枕戈待旦,志梟逆虜,常恐祖生先吾著鞭=范陽の祖逖と友為り,逖が用いらるるを聞いて,親故に書を与えて曰わく,吾戈を旦を待ち,逆虜を梟せんことを志す,常に恐るらくは祖生吾に先だちて鞭を著けんことをと。”(『晋書』劉琨伝)」と紹介しているが,意気軒昂な敵愾心よりも一刻も戦備意識を緩め得ない戦時状態の緊張感が元の意味である。「通宵達旦」の徹夜ならともかく「枕戈待旦」の戦備は現代日本では考えられないが,建国後の毛沢東の異類の病的な生活習慣と独特の過剰な防衛意識を語れる。

「夙夜在公」の理想と「病夫治国」の史実

毛沢東は1965年6月15日に米・ソの軍事的な脅威に対抗する戦略的防御の方針として、「備戦、備荒、為人民」(戦争に備え、天災に備え、人民の為に)と唱えた。建国時~1960年代前半の台湾国民党政権の「大陸反攻」行動への対応や、朝鮮戦争参戦や越南戦争(64.8.5~75.4.30)への支援部隊派遣(非公表),「9大」開催年の中ソ国境武力衝突(69.3.2・15.7.8,8.13),準戦時体制化の「文革」中の各地の造反派組織の内戦並みの武闘(67~75)等によって、恒常的な「高枕無憂」(枕を高くし憂い無し)は彼にとって無理な事である。この四字熟語は『現代漢語詞典』で「墊高了枕頭睡覺,無所憂慮,指平安無事,不用擔憂。」(枕を高くして寝、憂いが無い。平安・無事で、心配が無用のことを指す)と説明され、前の【高枕而臥】は「墊高了枕頭睡覺,形容不加警惕。」(枕を高くして寝る。警戒しないことの形容)である。『広辞苑』の【枕を高くする】は「[史記張儀伝]高枕で眠る。安心して眠る。転じて,安心する」で、『日本国語大辞典』の同項(語釈=「安心して寝る。安眠する。転じて,安心する」)は、漢籍典拠「史記-張儀伝“無楚韓之患-,則大王高枕而臥,国必無憂矣”」を示している。「文華秀麗集(818)下・山寺鐘〈嵯峨天皇〉“晚到江村-高枕臥 夢中遙聽半夜鐘”」を初めとする3点の用例の最後は、「高枕無憂」に近い「江戸から東京へ(1921)〈矢田挿雲〉七・五八“心

中私(ひそ)かに此兇賊を逮捕して東京市民の枕(マクラ)を高(タカ)うせしめやうと矢(ちか)った”であるが、戦後の日本は枕を高くして臥す様に安泰を享受し「平和惚け」と揶揄されるに至った。「惚け」から1987年の柳谷謙介外務次官(1924~2017)の「舌禍」事件が想起されるが、鄧小平は雲の上の人になり下からの意見が届かない様だという6月4日の内密発言は、中国側の猛反発を招いて渋々ながら失礼を認め引責の形で18日に辞職を余儀無くされた。『広辞苑』の【雲の上】は「①雲のある高い所。天上。②禁中。雲居いも。古今雑“一まで聞え継がなむ”(「古今」=『古今和歌集』)の両義で、「奥の院」(=「主に寺院の本堂より奥の方、最高所などにあつて、霊仏または開山・祖師などの霊を安置する所。〈下略〉」)に鎮座する最高実力者は実情を把握し切れていないという旨の評は、日本の「情報、官邸せず」(麻生幾[本名非公開, 1960~, 報道人・作家]の実録文学[新潮社, 96]の題)と通じる「巨大組織病」(造語)への苦言でもあった。『現代漢語詞典』の【高高在上】(=「形容領導不深入實際, 脫離群眾。」[指導者が実際に深く入らず, 大衆から遊離することの形容])の意なのに、認知症を扱う小説家有吉佐和子(1931~84)の長篇『恍惚の人』(72, 新潮社)の影響の所為か、「老糊塗」(老い惚け)の非難と取り間違えられ日本の高官の失脚を導く「口撃」が惹起された。2年後の「6.4」武力鎮圧と同工異曲の異論弾圧は「硬骨の人」(諧謔語)らしいが、毛の最晩年には紛れもなく「高高在上」と「老・糊塗」(老い・惚け)の様相を呈した。

「通宵達旦」の徹夜は和製熟語「不眠不休」(『広辞苑』の項=「眠ったり休憩したりしないこと。物事を一所懸命にするさまをいう。“一の努力”)や、中国語の「廢寢忘食」(『現代漢語詞典』の項=「顧不得睡覺和吃飯, 形容非常專心努力。也說廢寢忘餐。」[睡眠と食事を顧みない。非常に専心で努力することの形容。「廢食忘餐」とも言う])を連想させる。関連の「昼夜兼行」は「昼も夜も休みなく道を急ぎ, または仕事をする事」(『広辞苑』), 「吳志-呂蒙伝」に由来し「管家文章(900頃)一二・為藤大夫先妣周忌追福願文」が和文の初出と為る(『日本国語大辞典』)。『現代漢語詞典』の「昼夜兼程」は【昼夜】(語釈=「晝白天和黑夜。」[晝白天と夜])の用例の「一個~」(一昼夜)の後に在り, 次の「機器轟鳴, ~不停|不分~地苦干」(「機械が高く唸うなり, 昼夜停まらない」「昼と夜の区別無く一生懸命に働く」)は、『広辞苑』の【昼夜】の「①ひるとよる。②昼と夜の区別なく物事をつづけること。ひるもよるも。日夜。“一仕事に励む”」や, 【日夜】の「①ひるとよる。昼夜。よるひる。②昼も夜も。しじゅう。たえず。“一努力する”」の②と通じる。『現代漢語詞典』の【日夜】の語釈は「晝白天黑夜」(晝白天と夜)であるが, 用例の「~兼程」と「~三班輪流生産」(日夜3交代で生産する)は副詞的な使い方である。次の【日以繼夜】(日を以て夜に繼ぐ)の語釈がその参照の指示と為る主項目【夜以繼日】は, 【昼夜】の「~不停」と同義の「日夜不停」である。「日夜・昼夜」と類義の【夙夜】は「晝早晨和晚上, 泛指時時刻刻」(晝朝と夜, 広く毎日毎時を指す)の意で, 用例の「~憂国」(絶えず国を憂う)は多難の為に憂国者(造語)が多い国柄らしい。『広辞苑』

の同項目は「①朝早くから夜おそくまで。一日中。連理秘抄“一に好みて、当世の上手の風体を” ②転じて、つねに。たえず。“一宸襟を悩ます” ③朝早く出仕し、夜おそくまで仕えること。宴曲集五“一の功をや重ぬらん”で、『日本国語大辞典』の「『名』(“夙”は朝が早い意) ①朝早くから夜遅くまで。あけくれ。一日中。昼夜。②(一する)朝早くから夜遅くまで仕事に励むこと。精勤すること。特に朝廷に仕えることなどにいう。③(一する)朝から晩まで同じようにすごすこと。④朝早くと夜遅く」は、①と④に「書経-舜典」と「詩経-召南・行露」の漢籍典拠が有る。②は「明衡往来(11C中か)中末」等5点の用例が付き和製語義の扱いてあるが、『漢語大詞典』の①は「朝夕、日夜」の他「亦謂日夜從事(亦、日夜従事することを言う)と有り、出典「《詩・小雅・雨無正》：“三事大夫，莫肯夙夜。邦君諸侯，莫肯朝夕。”孔穎達疏：“三事大夫無肯早起夜臥以勤國事者。”」は正に②の意である。『現代漢語詞典』には日本語に無い【夙夜在公】も有り、「一天從早到晚都勤於公務：恪盡職守，～。」(一日中朝から晩まで公務に勤める。「慎重に真剣に職分を全うし、夙夜奉公に在る」と為る。類義語の「夙興」は『広辞苑』では「朝早く起き出ること。朝早くからつとめること」、『日本国語大辞典』では単に「『名』朝早く起きること」と為るが、用例2点の初出「清原宣賢式目抄(1534)二二条“勤厚とは、夙興夜寝奉公するを云”」は「夙夜在公」と通じる。漢籍典拠「詩経-小雅・小宛“夙興夜寐，母_レ忝_二爾所生_一」に由来した四字熟語は、『現代漢語詞典』の【夙興夜寐】で「早起晚睡，形容勤勞。」(朝早く起き夜遅く寝る。勤勉さの形容)と説明される。

日本語に無い「夙夜在公」は公人の献身的な奉仕に対する朝野の強い要請を反映し、周恩来の「人民的好総理」(人民の好い総理)の美名も「廢寝忘食」の働きぶりに由る。『現代漢語詞典』の【操勞】「働辛辛苦苦地労働；費心料理(事務)」(働苦勞に苦勞を重ねて働く。気を遣って[事務を]切り盛りする)の用例「日夜～|～過度」(「日夜あくせくと働く」「過度に働く」)は、周の赤軍時代以来の一貫した生き様を表す形容に用い得る。字・義に「操勞過度」を含む「過勞」の語釈は「_レ過於勞累。」(働働き過ぎて疲れる)，用例「～症|經常熬夜容易導致～」(「過勞症」「何時も徹夜すると過勞を招き易い)は不眠不休の危険性を思わせる。同じ第6版で新設した次の【過勞死】は「_レ因過度勞累而致死。」(働過度な労働が原因の疲労で死に至る)と定義され、用例「工作和學習壓力大是導致～的主要原因」(仕事と勉強の圧力が大きいことは過勞死を招く主な原因だ)は、この和製漢語を取り入れた昨今の中国の社会問題の深刻化を物語っている。『日本国語大辞典』の【過勞】は「『名』体または精神を使いすぎること。また、その結果、疲労がたまること」の意で、「福翁百話(1897)〈福沢諭吉〉三一」等3点の用例が和製漢語の証と為るが、【過勞死】(=「『名』働きすぎなどによって疲労がたまって、それが原因となって起こる突然の死」)は使用履歴が不明である。『広辞苑』の両項目の「働きすぎてつかれること。“一で倒れる”」，「過度な仕事の原因の労働者の死亡。一九八〇年代後半から一般化した語」から、繁栄の代償が表面化した昭和末期以降の影や歪みが見て取れる。日本の泡

沫経済期の四半世紀後の中国の高度成長末期に「過労死」が一般化した事は、両国の社会発展の時間差と日本が手本と為る中国の近代化の行方を思わせる。現代日本の最大の過労死は小渕恵三首相（第84代、1998.7.30～2000.4.2）の急逝（00.5.14）に他ならず、読み方が「死」に聞える縁起の悪い日に脳梗塞で倒れ意識不明の儘に世を去ったのは、前日の自由党との連立の決裂で持病を抱える心臓が致命的な打撃を受けただけでなく、通常の激務を終えた後も公邸で夥しい量の活字・映像の情報を徹夜で収集し、政権や自国への支持を高める為に休日返上で様々な場所に顔を出し外遊も意欲的に^{こな}熟す、という強迫観念に駆られた様な猛烈ぶりに由る健康悪化が根本的な要因である。日中戦争勃発の直前に生れた彼の13歳の誕生日に朝鮮戦争が勃発したが、歴代の中共最高指導部成員の強い自己保護意識・健康管理に由る数少ない過労死の中で、膀胱癌に蝕まれた周恩来に次ぎ小渕と同じく突然倒れた任弼時（1904～50）は、「7大」後の中央書記処書記（5人中末席）の重責で疲労が蓄積した末、中国人民志願軍が朝鮮で韓国軍と初交戦した直後の10月27日に、戦局に思索を巡らしている内に脳出血で倒れ間も無く不帰の人と為った。毛沢東が建国後3回しか無い追悼会への出席の1回目が任の場合であるが、『毛沢東伝（1949～1976）』第4章「抗美援朝（上）」（米国に対抗し朝鮮を支援する〔上〕）ではその殺人的な状況に就いて、毛は志願軍入朝初期の半月中ずっと寝台で執務・食事し睡眠時間が極めて短く、当時57歳の彼は「精力十分充沛」（気力充実）であったと記している。毛の神話として時に周以上の2～3日も不眠不休で仕事し続けた史実が有るが、鉄人的・超人的な精神力・体力に由る「精力絶倫」は吟味に値する。

「精力が群を抜いてすぐれている」と説明されたこの熟語は『日本国語大辞典』で、「〔名〕（形動）精力がなみはずれて強いこと。疲れを知らないほど精力の強いこと。また、そのさま」と説明され、「不思議な鏡（1912）〈森嶋外〉一」が用例2点の初出とされる。『広辞苑』の「絶倫」の語釈「（“倫”は“たぐい”の意）人並はずれてすぐれていること。抜群」に、定番の如く「精力一」が例示されているが、『日本国語大辞典』では「〔名〕（形動）①技術、力量などが人なみはずれて、すぐれていること。群を抜いていること。また、そのさま。抜群。絶類。②風景などがなみはずれて美しいこと。また、そのさま。絶麗」の両義と為り、①に「九曆－九条殿記・五月節・天慶七年（744）三月七日」等8点の用例と、漢籍典拠「漢書－匡衡伝“匡衡材智有余，經學絶倫”」が有り、②は「本朝文粹（1060頃）一一・菊是花聖賢詩序〈大江匡衡〉」が用例2点中の初出と為る和製語義である。「精力」は『広辞苑』で「①心身の活動。根気。元氣。性的な能力の意でも使う。“一を注ぐ”②まごころこもった力。謡、恋重荷“一を尽し候へども”」と説明・例示されており、『日本国語大辞典』の項（語釈＝「〔名〕心身の活動力。心身を働かせるもととなる力。根気。元氣。せいりき」）の「太平記（14C後）一八・金崎城落事」等4点の用例の後、漢籍典拠「漢書－匡衡伝“尤精力過絶人”」を示している。匡衡は『広辞苑』で「前漢の人。字は稚圭。官は太子太傅から丞相にいたり。楽安侯に封ぜられる。

儒教の政治理念に基づく礼制整備に活躍。若い時貧しくて灯油を得難く、壁に穴をうがち隣家の光で書を読み、大儒となったと伝える。(蒙求)」と紹介され、大江匡衡^{おおえのまさひら}の項は「平安中期の官人・文人。妻は赤染衛門。文章博士。一条天皇の侍読。侍従。著『江吏部集』。(一五三)」と為る。大江が12歳で元服した時「匡衡」に改名したのは約千年前の中国の先賢への敬意に由るが、匡衡伝に「精力」と大江の和製語義の創出に寄与した「絶倫」が有るのに結合に至らない。『現代漢語詞典』の「**図精神**和**体力**：～充沛|～旺盛|耗費～。」(図精神と体力。「気力充実」「精力旺盛」^{パワー}「精力を費やす」)の様に、中国語の「精力」は日本語からの逆輸入が盛んに関らず「絶倫」と組み合わせられる事が無い。【絶倫】の語釈は「〈書〉**獨一無二**；**沒有可以比較的**」(〈書〉**獨一無二**。比類が無い)で、用例「荒謬～|**聰穎**～」(「出鱈目も甚だしい」「比類の無い聡明さ」)は絶賛一辺倒でないことを示す。【荒謬】は「**極端錯誤**」(極端に間違っている)の意で、用例は「～絶倫」と「～的論調」(荒唐無稽な論調)である。「絶倫」が負の意味を持ち合せ用例で肯定的な語義の前に出るのは、善と悪が内包し合い両者の同居で悪が優位に在り得ると見る中国の陰陽思想に符合する。毛沢東は戦争中と建国後に「無比正確」(超絶無謬)と「荒謬絶倫」の両面を見せたが、彼の不眠不休の働きも裏事情として深刻な不眠症が有った。『現代漢語詞典』には不眠症が少ない国柄を映して【失眠】だけ有る(=「**動夜間睡不着或醒後不能再入睡**。」「**動夜間に眠れない**、或いは目が醒めた後に再び眠りに着けない」)が、60代以降の彼の就眠難(「就職難」を振った造語)は国難を招くほど重症であった。

『日本国語大辞典』の【不眠不休】(語釈=「**名** 物事を一所懸命にして眠りも休みもしないこと」, 用例=「断水の日 [1922] 〈寺田寅彦〉」等2点)の前に、和製漢語【不眠症】(同=「**名** 眠れない状態が慢性的に続く睡眠障害の一種」)が出ている。用例は「*湯島詣 (1899) 〈泉鏡花〉四四 “不眠性に罹って、三日も四日も、〈略〉お寝みなさらない事がある” *開化の殺人 (1918) 〈芥川龍之介〉 “最近数カ月に互りて、不眠症の為に苦しみししありと雖も”」と為るが、「症」の表記を逸早く使った小説家 (1892~1927) の有様を見ても厄介さが分る。彼は長年の睡眠薬の呑み過ぎによって人前で半醒半睡の奇態を見せる事も有り、果てに致死量の催眠・鎮静薬 (ペロナル・ジャール等) を服用して自殺したが、7月24日未明の辞世によって6年前の「7.23」に成立した中共の党首と奇妙な接点を持つ。彼は1921年3月30日~7月中旬に大阪毎日新聞社の海外視察員として中国各地を回り、4月26日に上海で革命家李漢俊(原名書詩, 1890~1927) の自宅を訪れた³¹⁾ が、3ヵ月後に其処が李も参加する中共「1大」の会場と為る事は誰も予想し得なかった。芥川は煙草^{たばこ}を大量に吸う嗜好も睡眠薬無しでは生きられぬ病態も晩年の毛沢東と似通うが、『広辞苑』の【不眠症】の「安眠のできない夜が慢性的に続く状態。精神興奮や不安・神経症、脳・呼吸器・循環器などの疾患、薬物中毒、環境条件などの原因がある」に当て嵌らない毛の病根は、戦争中の敵の目を欺く為の夜に行軍し昼に休息する習性が直せなかった所為である。彼は8期11中全会開催中の1966年8月5日に「炮打司

司令部——我的一張大字報」(司令部を砲撃せよ——私の壁新聞)で劉少奇への「砲撃」(猛撃)を掛け、「顛倒是非, 混淆黑白」(是非を取り違え, 黑白を混同する)と断罪したが、「顛倒黑白」(『現代漢語詞典』の項=「把黑的說成白的, 把白的說成黑的, 比喻歪曲事實, 混淆是非。」[黒を白と言ひ, 白を黒と言う。事實を歪曲し, 是非を混同することの比喩])は、彼の「白天・黑夜顛倒」(昼夜逆転)をも形容できよう。彼は「1大」開幕38周年に当る1959年廬山会議での「7.23講話」の冒頭に、「你們講了那麼多, 允許我講個把鐘頭, 可不可以? 吃了三次安眠藥, 睡不着。」(君たちはあんなに沢山話したのだから, 私に1時間ぐらひは喋らせてくれてもいいだろう。睡眠薬を3回吞んだが, 眠着けない)と**不健全な状態を悪びれずに披露した**³²⁾。第31回世界卓球選手権(1971.3.28~4.7, 名古屋)の終盤の4月6日の夜11時過ぎに、早めの就寝の為に睡眠薬を大量に吞み朦朧状態に陥った彼は突如呉旭君婦長を呼び、已に見送りが決った米国選手団への訪中招待の緊急実施の指示を外交部に伝えろと言った。睡眠薬を吞んだ後の言葉は無効だという自ら定めた規則まで否定した挙動³³⁾は、**対米接近の「卓球外交」の妙手と為った半面「病夫治国」の事例でもある**。彼は1973年11月17日に4日前の周恩来-キッシンジャー会談に不満を表明したが、彼の就寝中は国運に関する危機でない限り誰も起す勇気が無いので、請訓も出来ない周は穩健な対応をしたが後に**理不尽な非難**を受けた。³⁴⁾

毛沢東の不眠症に由って最高指導部成員等も彼に合せて夜型に変わる向きが多く、外賓との会見も時差惚けへの配慮でなく彼の都合で夜に行われる事が有った。彼は最後の西暦の除夜と為った1975年12月31日の夜11時過ぎから1時間40分に亘って、ニクソン元大統領の次女ジュリー(1948~ , 作家)・夫デービット・アイゼンハワー(生年・職業は同じ, アイゼンハワー第34代大統領[1890~1969, 53.1.20より2期在任]の孫)と会見した。同年の10月1日に世話係に対してこれは自分が過す最後の国慶節だろうと零した³⁵⁾から、**旧・新年に跨る時間帯は辞世前の年頭所感の発信と考える節も有ったかも知れない**。「文革」中の中央「1号文件」よりも權威有る領袖の「天声」の伝達装置は、「兩報(『人民日報』『解放軍報』)一刊(『紅旗』月刊)の共同社説であった。党中央機関紙・総政治部機関紙・党中央理論誌の御三家は、「全党・全軍・全国各族人民」の順位や中共の「**理念政党**」の性質を体現している。1976年の「紅頭社論」(「紅頭文件」に因み、題が赤い字を用いた社説を表す造語)は、如何に「文革」を見るかは目下の2つの階級・2つの道・2つの路線の鬭争の集中的な反映だとし、「安定團結不是不要階級鬭争, 階級鬭争是綱, 其余都是目。」(安定・團結は階級鬭争の不要を意味せず, 階級鬭争は**要綱**で, 他は全て細目である)という「最新最高指示」を披露した。毛は2人の元米大統領の子孫を相手に「鬭争」を主題に革命談義を展開し、震える両手の指で突き合う仕草を以て鬭争の已む事が無いという持論を唱えた。彼は「**共產党的哲学就是鬭争哲学**」(共產党の哲学は鬭争の哲学だ)という国民党側の論調を認め³⁶⁾、中・ソ共産党論戦(1963.9.6~64.11.21)に就いて1万年続ける心構えを語った³⁷⁾。建党42周年の日(1963.7.23)に彼は会議を招集し

て対ソ意識形態闘争の展開を指示し、後にソ共中央の公開書簡(7.14)に対する『人民日報』『紅旗』誌編集部の批判論文を9回発表させた(9.6~翌年7.14)。³⁸⁾「闘争」は『現代漢語詞典』で「**闘**①矛盾的双方互相衝突, 一方力求戦勝另一方。②群衆用説理、揭発、控訴等方式打撃敵対分子或壞人。③努力奮闘」(動①対立する双方が衝突し, 一方がもう一方に打ち勝つよう全力を尽す。②大衆が論破・告発・糾弾等の方式で敵対分子や悪者に打撃を加える。③努力し奮闘する)と定義され、**中国的・中共的な戦勝願望・大衆運動・上昇志向を現す多義**は其々、用例の「階級~|思想~|跟歪風邪氣做堅決的~」(「階級闘争」「思想闘争」「不健康で邪な^{よこしま}氣風に対し断固たる闘争を行う」), 「開~会」(「批判」闘争会を開く), 「為祖國的繁榮昌盛而~」(祖國の繁榮・隆盛の為に闘う)が有る。『広辞苑』の【闘争】は「①たたかい争うこと。“一本能”②特に, 社会運動・労働運動などで要求を貫徹するために争うこと。“階級—”“—資金”」で、『日本国語大辞典』の「【名】①相手を倒そうとして争うこと。うちあい。争闘。②特に社会運動・労働運動などで, 階級や主義の異なる者同士が争うこと。多く, 被支配階級からの働きかけをいう」は、①に「権記-長保二年(1000)七月二五日“带弓箭者数多出来闘争, 即寧親郎等被疵”」等3点の用例と、漢籍典拠「韓非子-顕学“宋榮子之議, 設_レ不_レ闘争-, 取_レ不_レ随_レ仇, 不_レ羞_レ囹圄-, 見_レ侮不_レ辱」」が付き、②の用例「*模範新語通語大辞典(1919)〈上田景二〉“カイキュートソー階級闘争。征服者と被征服者〈略〉資本家と労働者などの間に存在する種々の闘争を云ふ” *城(1965)〈水上勉〉八“若狭一揆が, 言ってみればシーソーゲームに似て長期にわたる闘争へ根を張っていたのは”」は、其々「5.4運動」の年と毛の「文革」発動の決断の年と重なり現代中国への影響を思わせる。

空転・逆戻りと「三倍」稼業・「脱貧」急務

『日本国語大辞典』の【階級闘争】の用例3点の初出も【階級】と一緒にあるが、語釈の「【名】経済的、政治的な優劣な支配、被支配者をめぐり、異なった階級の間に行なわれる争い。中世の貴族階級と農奴、近代のブルジョア階級とプロレタリア階級の間抗争。階級戦」に対して、『広辞苑』の項は「(Klassenkampf^{ドイツ})政治上の権力をめぐって支配階級と被支配階級との間で行われる闘争。マルクス主義では歴史発展の原動力と見なす」と為る。11期3中全会の開催月に刊行した『現代漢語詞典』第1版の定義は、「被剝削階級和剝削階級、被統治階級之間的闘争, 是階級利益不可調和的表現, 是階級社会歴史發展的動力。」(被搾取階級と搾取階級, 被支配階級と支配階級の間闘争。階級間の利益が調和できないことの現れであり、階級社会の発展の原動力である)と、マルクス主義の正統を踏襲した毛沢東時代の名残が色濃く出たが、調和の可能性を否定し歴史発展の原動力とする第2・3の文は4年後の第2版で削除された。毛は中ソ論戦の余韻を帯びた「一万年太久」と詠む1965年1月に劉少奇打倒を決意し、

階級闘争・路線闘争・権力闘争への執着に由って「只争朝夕」は「只争」（只争う）と化した。執政の末年の正旦に発した階級闘争至上論（造語）は「百年大計」を授ける心算であろうが、死後僅か2年で党の仕事の重点が階級闘争から経済建設へと移った変遷は、頑迷な「唯闘争主義」（「唯物主義」を捩った造語）の破綻の結果である。「一日之計在於晨」「夙興夜寐」「光陰似箭」「寸陰寸金」の深層に有る孔子の時間観念は、『広辞苑』の【昼夜を舍_おまず】（＝「[論語子罕“逝く者は斯くの如きか、昼夜を舍_おかず”] [“舍”は止める意] 昼夜の別がなく、やむ時がない。絶えずおこなう」に見える。『日本国語大辞典』の【昼夜】の熟語項の最初の【ちゅうやを舍（お）かず】は、「昼夜の区別をしない。絶えず行なう。昼夜を捨てず。*論語-子罕“子在_レ川上_一曰、逝者如_レ斯夫、不_レ舍_二昼夜_一”」、同義の【ちゅうやを捨（す）てず】は「筑波問答（1357-72）」等2点の用例が有る。毛は1956年6月1・3・4日に武漢（湖北省都）で長江を泳いで横断した後、詞『水調歌頭 遊泳』で「不管風吹浪打、勝似閑庭信歩、今日得寛余。」（風が吹くとも浪打つとも不管、閑けき庭を信歩する似り勝りたり、今日は寛ぐ余を得ぬ）と詠み、続いて「子在川上曰：逝者如斯夫！」（子川の上_{ほとり}に在りて曰えり、「逝く者は斯くの如き夫」）と古賢の感嘆を引いた。彼が夢見た国家建設の「宏図」（宏いなる図）は9月の「8大」の路線で現実味を増したが、自らの「興風作浪」（風を起し浪を立てる。人々を煽動して騒ぎを起すこと。『現代漢語詞典』の項＝「比喻挑起事端或進行破壊活動。」[揉め_{こと}を引き起すこと、或いは破壊活動を行うことの比喩]）に由って、和製熟語「昼夜を捨てず」の初出の600年後の1957～72年には社会の空転・時間の空費が目_もに余った。

毛沢東は『湘江評論』創刊宣言（1919.7.14）で食事を世の中の最大の問題としたが、**国**政運営の**礎**と為る民生を疎かにし冒険や政争に明け暮れたのは初心を忘れた証である。『広辞苑』の【朝夕】には「③あさばんの食事」の意と、熟語項の【朝夕の煙】（＝「炊事の煙。その日の暮し」）も有る。『日本国語大辞典』の【朝夕】の「②（一する）朝と夕方の食事。朝食と夕食。転じて、食事をとること。また、食事」は、「発心集（1216頃か）二・仙上人事」等5点の用例が付く和製語義で、【ちょうせきの煙（けむり・けぶり）】「朝夕の炊事の煙。炊煙。また、日々の暮らし」は、「浮世草子・本朝二十不孝（1686）一・一」が用例2点の初出である。『漢語大辞典』の【朝夕】にも⑦「指度日之需」（暮すのに必要なものを指す）が有り、出典4点中最古の「《南史・袁湛伝》」が示す様に時間と生計の連動は昔から認識されて来た。改革・開放は「只争」の中止で「朝夕」の生計・時間を回復・奪還を図る復興であり、「朝夕の煙」の初出の300年後の5年連続の「三農」関連の「1号文件」はその象徴と言える。『現代漢語詞典』の演劇用語の【正旦】の下の【正当】zhèngdāngは、「**正**処在（某個時期或階段）」（**正**しく [ある時期或いは段階] に在る）の意で、用例「～春耕之時」（正に春耕の時に当る）は又「一年之計在於春」と繋がる。同音・異声調の【正当】zhèngdàngは「**正**①合理的・合法的：～的行為 | ～的要求。②（人品）端正。」（**正**①合理的・合法的。「正当な行為」「正当な要求」

② [品行] 方正) の両義で、日本語にも入った①は中共が自らの正当性・正統性を主張する「^{ただしい}正確」^もも通じる。11期6中全会に由る最高指導部の刷新と「^た關於建国以来党的若干歴史問題的決議」(建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議)の採択で、党は毛沢東・華国鋒の誤りを批判し正しい軌道に乗る姿勢を一層鮮明にしたが、「81年体制」(造語)は僅か5年半で一角が崩され改革・開放も不純な方向へ傾斜し始めた。胡耀邦辞任が内定された1987年1月6日の1号文件は小型「文革」の兆しの如く、鄧小平の「^た關於学生鬧事問題的講話要点」(学生騒動の問題に関する講話の要点)の伝達である。翌年の正常化の後2004年から15年連続で「三農問題」に特化し、18年1月2日の「^た關於實施農村振興戰略的意見」(農村振興戰略の實施に関する意見)の様に、「中国夢」を鼓吹し続ける習近平の2期目に為っても喫緊の3大難題は解決の見込みが無い。『現代漢語詞典』の【扶貧】(1996年第3版立項)は、語釈の「^た勸扶助貧困戸或貧困地区發展生産、^た改變窮困面貌」(勸貧困家庭或いは貧困地域を扶助し、生産を發展させて窮乏の様相を変えさせる)に、用例の「^た做好農村～工作」(農村の貧困扶助の仕事^をを立派に遂げる)が付く。「^た第一夫人」^{フェースト・レディー}彭麗媛が生れた荷沢市鄆城県は長らく国家級貧困県であり、^た其々数百に上る国家級・省級貧困県の「^た脱貧」(第3版以降の項=「^た勸擺脱貧困：～致富」(勸貧困から脱出する。「^た貧困から脱出し豊かに為る)は、一朝一夕どころか党首1代の通常任期(2期・10年)でも完全には達成し難い。

発音表記順で「【三農】 sānnóng」の次に出る「【三陪】 sānpéi」(3つの御供^{おとも})は、「^た勸指某些服務人員(多指女性)在酒吧、舞厅、卡拉OK等娛樂場所為異性客人提供陪酒、陪舞、陪唱等帶有某些色情成分的服務」(勸一部の接客係(多く女性を指す)が洋風酒場・舞踏場・空オケ等の娛樂施設で異性の客に対し、酒・踊り・歌の相手を務める等の一部性的な要素が有る^{サービス}奉仕を提供することを指す)の意で、用例に「～小姐 | 堅決查处～活動」(「^た風俗營業の女性接客係」^{ホステス}「^た三陪行為を断固取り調べて処理する」))と有る。半ば職名と化した「三陪小姐」の和訳に関連する言葉を『広辞苑』から抽出すると、【風俗營業】(=「^た客に遊興・飲食、又は射幸的遊技をさせ、一定の設備を伴う營業の総称。一九四八年設定の『風俗營業等の規制及び業務の適正化等に関する法律』により規制される。料理店・カフェ・待合・キャバレー・マージャン屋・パチンコ屋など。なお、性風俗特殊營業とは異なる」[第6版では「キャバレー」の次に【三陪】中の「舞厅」と同じ「・ダンスホール」が有った]),「^たキャバレー【cabaret^{カバレー}】」(=「^た舞台・ダンスホールなどのある酒場。日本では、特に第二次大戦後からホステスが客をもてなす形のをいう」),「^たホステス【hostess】」(=「① [客をもてなす] 女主人。② バー・ナイトクラブなどの接客係の女性」)の時代背景が目を引く。終戦後の日本で左様な營業形態が隆盛し法律に由る規制が進んだのに対して、中国では同時期以降の毛沢東・華国鋒の治下(1949～79)の禁欲的な抑制で消えていた。日本では1937年9月に政府が展開した「国民精神総動員」で「^た減私奉公」が要求され、後の対外戦争で「^た欲しがりません勝つまでは」「^た贅沢は

敵だ！」等と唱えられた。「文革」中に「鬪私批修」（私心と闘い修正主義を批判する）の号令を掛けた毛沢東は、失政の正当化に好都合な清貧を美化し低水準の消費の向上を奨励しなかった。日本は1941年12月8日の真珠湾攻撃で起した太平洋戦争の中に「鬼畜米英」を叫んだが、中国も冷戦時代に西側（自由主義体制の諸国）への敵視・警戒を隠さなかった。敗戦の廃墟から再起した日本は2度目の「脱亜入欧」で近代化が加速し、舞台・舞踏場付きの酒場で女性接客係が客を持って成す風俗も現れた。「文革」の破局から甦った中国は改革・開放の断行で発展・繁栄を追求し、その結果『現代漢語詞典』第6版の【三倍】立項の様相に世相の変貌が激しく、【過労死】等の増設にも窺える様に習近平政権が引き受けた負の遺産は多い。『広辞苑』の【雨後の筍】の「物事が次々に出てくることのたとえ」と違って、『現代漢語詞典』の【雨後春筍】は「春天下雨後竹筍長得很多很快，比喻新事物大量出現。」（春に雨が降った後、筍がととても多く速く生えることから、新しい物事が大量に出現することを喩える）と為る。「三倍」は国民党時代の風俗の復活だから新しい物事に為らぬ新語であるが、性的な風俗の擡頭を見て従来型の人間は大変な衝撃・傷心を覚え、「辛辛苦苦三十年，一夜回到解放前」（30年苦労を重ねて来たが、一夜で建国前に戻って了的）という嘆きも広がった。改革・開放は光と影の両面を持ちながら毛・華時代が比喩物に為らぬ進歩を遂げたが、40周年に当たる2018年の「新時代」転形期の憂国の声には、「辛辛苦苦四十年，一夜回到改革 / “文革”前」の不満が出て可笑しくない。

『日本国語大辞典』の【風俗営業】の範囲はナイトクラブ・喫茶店・バー・ゲームセンターも含み、【ホステス】の【2】バーやキャバレーなどの女給も『現代漢語詞典』の【三倍】と同様、中国語で意識+音訳の「酒吧」(jiǔbā)と為る洋風酒場が入っている。用例2点の初出「金錢を歌う(1957)〈火野葦平〉—「着飾ったホステスが声を張りあげて」は、前年7月17日に公表された経済企画庁『昭和31年 年次経済報告』（経済白書、副題＝「日本経済の成長と近代化」）に登場した「もはや“戦後”ではない」（由来は『文藝春秋』1956年2月号所載の中野好夫[1903~85、英文学者・評論家]の論説「もはや“戦後”ではない」）を思い起せば、戦後復興終了後の日本の特色有る高度成長への道が開かれた新時代の高揚に相応しい。中国の1957年は充実した前年と引續り返る様に朝野の大粛清で自滅的な暴走を始め、その「反右派闘争」は『広辞苑』で「中国で、一九五七年、民主諸党派や文化・教育界などを中心起こった体制批判を、多くの知識人たちの追放した政治運動。七八年“右派分子”とされた人の大部分について認定の誤りが認められた」と説明してある。『日本国語大辞典』の【ホステス】の2例目の「父の詫び状(1978)〈向田邦子〉車中の皆様」は、数十万人の「右派分子」に名誉回復通知の「詫び状」を送る同年の中国との懸隔を思わせる。『広辞苑』採録の単語が同辞書で欠落した僅少の例には「反右派闘争」が有るが、現代中国の政治への関心の低下と対照的に【キャバレー】には紙幅を多く割き、語釈の「〔名〕(cabaret) (キャバレ・カバレ) ダンス

のためのホールや舞台のある酒場。客は女給（ホステス）のサービスで飲食やダンスをし、バンド演奏やショーを楽しむに、「友田と松永の話（1926）〈谷崎潤一郎〉」等5点の用例が付く。女給ホステスの持て成してバンドで舞踏をし楽隊演奏を楽しむのは**声色の享受**に他ならず、この「声色」は『広辞苑』の「②音楽と女色。徒然草“宴飲一を事とせず”」、『日本国語大辞典』の「③歌舞音楽と女色」、『現代漢語詞典』の④「〈書〉歌舞和女色」（「和」＝と）であるが、亜細亜最大の歓楽街を為す東京新宿区歌舞伎町の名に「歌舞」が有るのは興味深い。『日本国語大辞典』の用例（『日本外史 [1827] 七・足利氏正記」等2点）に次ぐ漢籍典拠は、「書経－仲虺之誥“惟王不レ邇＝声色－，不レ殖＝貨利－”」である。『現代漢語詞典』の用例「不近～」（声色に近寄らない）はその禁欲的な姿勢と通じるが、2点目の「～犬馬（指縦情淫楽の生活）」（声色犬馬 [淫楽に溺れる生活を指す]）は、「縦情」（＝「鬪尽情：～歓楽 | ～歌唱」 [鬪心ハ行くまで。「思い切り楽しむ」 [思う存分に歌う]）も、「禁欲」の対義語「縦欲」（＝「鬪放縦肉欲，不加節制。」 [鬪肉欲を放縦し，節制を加えない]）も日本語に無い事に気付かせる。『漢語大詞典』の語釈は広義の「謂放縦私欲，不加克制」（私欲を放縦し，抑制を加えないことを謂う），出典4点の初出「《左伝・昭公十年》：“《書》曰“欲敗度，縦敗礼”，我（子皮）之謂矣。夫子（子産）知度與礼，我実縦欲而不能自克也。”」は、**私欲の放縦が肉欲の放縦に集中的に体现されて来た墮落を浮彫**にしている。

『広辞苑』の【風俗営業】の語釈中の「性風俗特殊営業」は立項しておらず、『日本国語大辞典』の【腥風】【整風】【整風運動】と同じ行に有る【性風俗】（＝「〔名〕性に関する風俗。男女の性的な事柄についての、いろいろんならわし」）も、「～特殊営業」の項が無く『広辞苑』にも入らないが、『現代漢語詞典』の【三陪】もまま有る「陪睡」（情交の相手をする）に触れていない。「色情成分」を最も体现するこの奉仕は任意なので「3.5陪」（又は「三陪半」）の命名も思い付く（中国語の「半」は「伴」と同音の bàn で、造語の「陪半」は「陪伴」 [御伴する。付き添う] に引っ掛ける）が、『広辞苑』の【寝る・寐る】の「③同衾トする。記中“しけしき小屋に萱いやさや敷きて我が二人ぬし”」（「記」＝『古事記』）と違って、『現代漢語詞典』の【睡】は「鬪睡覺：早～早起 | ～着了」（鬪寝る。「早寝早起き（する）」 [眠りに着いた]）で、【睡覺】は「鬪進入睡眠状態：該～了 | 睡了一覺。」（鬪睡眠の状態に入る。「もう寝る時間だ」 [一眠りした]）と為る。中国人の国民性の特徴と弱点を活写した魯迅の中篇小説『阿 Q 正伝』（1921）の主人公は、末莊の郷紳（村の実力者）趙老爺（旦那）の家の女中呉媽ウーマーと雑談中に突然性的な衝動に駆られ、いきなり走り寄って彼女の前に跪き、「我和你困覚，我和你困覚！」（俺お前と寝る，俺お前と寝るだ！）と言い出す。【困覚】（＝「〈方〉鬪睡覺」）の性的な意味はこの謹厳な辞書では辿り着けないが、**不純な性的関係に対する敏感で且つ不寛容の姿勢は中国語の端々に見られる**。『広辞苑』の【ホステス】の語釈中の「接客」は「客に接すること。客を接待すること」の意で、「接待する」が「もてなす」に作る『日本国語大辞典』の同項目では、

『通学物語（1941）〈洪沢秀雄〉父栄一の諾否・二』等2点の用例が付く和製漢語と為るが、『漢語大詞典』の「**①**接待賓客。**②**旧時謂妓女接待嫖客。」（**①**賓客を接待する。**②**古い時代に、妓女が買春客を接待することを謂った）に、其々「《世説新語・政事》劉孝標注引南朝宋檀道鸞《続晋陽秋》」等3点、「《金瓶梅詩話》第五二回」等3点の出典が有る。『現代漢語詞典』第3版新設の「**動****①**接待客人。**②**指妓女接待嫖客。」は、**②**に「旧時」の限定が無い事から**昨今の大陸**の「**性工作者**」の「**性交易**」（性的交易と**安易な性交渉の両義**）の常態化を示唆する。

『現代漢語詞典』の【売笑】は「**動**娼妓或歌手為生活所迫，用声色供人取樂」（**動**娼婦或いは歌手は生活に迫られて，声色を用いて人に楽しませる）と，声色に対応する2つの職業を挙げ「～生涯」（売笑生活）の例も付けている。『広辞苑』の「売春に同じ。“一婦”」と同義の『日本国語大辞典』の項は、「**墨東綺談**（1937）〈永井荷風〉七」等2点の用例を示しているが，未記載の漢籍典拠は『漢語大詞典』には「**宋周密**《**武林旧事**・歌館》」等3点が有る。「笑・娼」を含む中国の熟語の「笑貧不笑娼」（貧乏〔人〕を笑うが娼婦を笑わない）は，**貧困から脱出できぬ者より体を張って生きて行く娼婦の方が偉いとする逆説**であるが，『漢語大詞典』の語釈「指娼妓或歌手以声色媚人，以換取錢財。」（娼婦或いは歌手が声色で人に媚び，以て金銭・財物と引き換える）から感じ取れる様に，「**献媚**」（媚びを売る）に対する**中国人の輕蔑は「売身」（体を売る）の場合に近い**。【**献媚**】は「**動**為了討好別人而做出某種姿態或舉動」（**動**他人の機嫌を取る為にある種の姿態や挙動をする）の意で，用例の「～取寵」（媚びを売って取り入る）は**世間で可く見られる下劣な行為**である。【**売身**】は「**動****①**把自己或妻子儿女等売給別人（多為生活所迫）。**②**指売淫。」（**動****①**自分或いは妻・子女等を人に売る〔多く生活に迫られる為〕。**②**売春を指す）の両義で，**①**は用例の「～契」（身売りの契約書）が有るほど古い時代に使用頻度が高かった。『日本国語大辞典』の説明は「『**名**』身を売ること。人身を金銭で他に売りわたすこと」で，用例の「**明六雑誌**—一五号（1874）**妻妾論**・三〈森有礼〉“其の妻たる者は恰も売身の奴隷に異ならず”」は**比喩的な表現**である。『漢語大詞典』では『現代漢語詞典』の両義と対応する**①③**は其々，『**敦煌變文集**・秋胡變文』等4点と「**清吳熾昌**《**客窓閑話**統集・難女》」等2点の用例が付き，更に**②**「**比喻喪失人格，投靠有權勢的人**」（人格を失い，権勢の有る人に身を寄せることの譬え），**④**「**喪生，献身**」（命を落す。身を捧げる）の意も持つ（其々「**孫中山**《**国民會議為解決中国内乱之法**》」等2点，「**唐李白**《**笑歌行**》」の用例が有る）が，日本では**人格や生命に及ぶ広義が生れないばかりか単語字体は消滅した**。『広辞苑』に有る近義語の【**人身売買**】（＝「人格を認めず，人身を商品と同一視して売買すること」）は，『日本国語大辞典』では「『**名**』人間を物品と同様に扱って，売買すること。奴隷の売買が典型的だが，謝金をうけとって女子を接客業者などにあっせんする行為をさす場合もある。人倫売買」と解釈されている。語源の【**人倫売買**】は「“**じんしんばいばい**”（人身売買）に同じ」で，「**近衛家本追加**—仁治元年（1241）—二月一六日（中世法制史料集一・追加法一五六）」等2点の古

い漢文体用例が有るが、【人身売買】の「*万朝報-明治三八年(1905)八月九日“人身売買は日本法令の禁ずる処であるのに、桂太郎は黄金で醜業婦を買ったのだ” *ユリアと呼ぶ女(1968)〈遠藤周作〉“宣教師のきびしい禁止令で人身売買こそしなかったが”」は、明治時代の表で禁止し裏で取引する両面や戦後の大幅な健全化を思わせ、人身売買に見る昨今の中国と明治～戦前の日本の有り形との類似に目を向けさせる。

和製漢語【醜業】は「【名】いやしい職業。けがらわしい職業。売春の類をいう」、用例3点の初出「東京日日新聞-明治二〇年(1887)一〇月二九日“日本女子の海外出稼ぎは追々取締りの厳になりたるより、清国朝鮮杯には醜業を為す者、漸々に減じたれど”」は海外が舞台と為る。【醜業婦】は「【名】いやしい職業の女性。特に、売春によって生活している女。淫売婦。売笑婦」で、「郵便報知新聞-明治二六年(1895)五月一六日」に次ぐ「あめりか物語(1908)〈永井荷風〉牧場の道」の用例「醜業婦(シウゲウフ)密輸入者なぞ云ふ、何れも人並よりは鋭い眼を持って居る輩(てあひ)が」は、「人身売買」の新語誕生の年代の海外に絡む不法行為と業者の姿を描いている。『広辞苑』の【醜業婦】は「淫売婦と同じ」で、【醜業】は「みにくく、いやしい生業。主に売淫をいう」である。江戸中期(1716~1853)の思想家石田梅岩(通称勘平, 1685~1744)は「職業に貴賤無し」と唱え、商人の役割を肯定し士農工商の4階層の平等を求めるその主張は、社会制度の相違を超えた現代の日・中共通の建前と為っている。「醜業(婦)」が差別語と為らず『広辞苑』に生きているのは、^{まとも}真面目な職業ならぬ生業と捉える見方と淫売等の賤しさを説く意図にも基づくであろうが、^{やか}自分の体^{たち}を売る娼婦よりも人^をを売る輩は遥かに質の悪い醜業者である。その仕業・人物は日本語で「人売り」(『広辞苑』の項=「人を売買する。また、それを業とする者。人商人^{ひとあ}ひとあ。狂、磁石“のう、恐しや恐しや、一に出会うた”[狂=狂言]、人買い(=「人身売買。また、それを業とする者。人うり。ひとあきない)」と言うが、該当の中国語は「販売人口(人を売買する)と「人販子」(『現代漢語詞典』の項=「^囫販売人口的人」[^囫人身売買をする者])である。【販売】の「^鬻(商人)買進貨物再売出以獲取利潤：~干鮮果品。」(鬻[商人が]利潤を獲る為に品物を仕入れて又売り出す。「青果・乾^{ドライ・フルーツ}果を販売する)は、『広辞苑』の「売りさばくこと。あきなうこと。“自動一機”“一手一”」と比べ、商売の動機と「買・売」の対に為る手法の提示が中国の辞書らしい。『日本国語大辞典』の「【名】品物を売ること。売りさばくこと」(用例=「令集解(701)田・公伝条」等3点、漢籍典拠=「漢書-貢禹伝)と照合すれば、人間の尊厳を無視し物品として扱う卑俗・悪徳の感じが際立つ。元より中国人の思考様式・中国語の表現様式には唯物論的・即物的な要素が強く、例えば「売笑生涯」(「生涯」の項は「^囫指従事某種活動或職業的生活：教書~|舞台~。」[^囫ある活動或いは職業に従事する生活を指す。「教師人生」「舞台人生」])の類義語は、身も蓋も無い「皮肉生涯」(『現代漢語詞典』の【皮肉】[語釈=「^囫皮和肉、指肉体」[^囫皮と肉、肉体を指す]の用例3点の最後が、「~生涯[指女子売淫的生活]」[体を売

る境涯（女性が売春する生活を指す）]]と言う。

「55年自由・民主体制」対「57年専制・冒進体制」

「賤業」以下の「罪業」(「罪業」[『広辞苑』の項 = 「〔仏〕悪い結果を生む行い。身・口・意の三業で作る罪。“一が深い”]]を振った造語)の分野で、「肉=体・人」の意の単語として身代金誘拐の人質を表す「肉票」が有る。『現代漢語詞典』の語釈「[囹指被劫匪擄去当人質の人、劫匪借以向他的家属勒索钱财。]」(「[強奪犯に攫われて人質にされた人を指す。強奪犯はこれを以てその家族に金銭を強請る])は、「他的家属」(直訳 = 「彼の家族」)に2重の不備が感じられる。【他】の①「[他人称代詞。称自己和对方以外的某个人。]」(「[他人称代名詞。自分と相手以外のある人を称す]」)に続いて、「[注意]▶“五四”以前“他”兼称男性、女性以及一切事物。現代書面語里，“他”一般只用来称男性。但是在性别不明或没有区分的必要時，“他”只是泛指，不分男性和女性，如：從筆跡上看不出他是男的還是女的 | 一個人要是離開了集体，他就將一事無成。」(「[注意]▶「5.4」以前は、「他」は男性・女性及び全ての物事を兼ねて称した。現代の文章語に於いて、「他」は一般的に男性のみを称する。但し性別が不明で或いは区別の必要が無い場合、「他」は不特定の指示と為り、男性と女性の使い分けをしない。例えば、「筆跡から見た処、彼が男か女かは判らない」「1人の人間は若し集団を離れると、[彼は]何事も出来ないのだ)と有る。『広辞苑』の「かれ【彼】」の《代》①「あれ。あのもの。古くは人をも人以外のものをさした。人の場合、男女ともにさした」も、②「(“かのじょ”に対し特に)あの男。その男」(其々「万[葉集]一一ノ八」と「泉鏡花、妙の宮」の用例が付く)も中国語と通じる。『日本国語大辞典』の■《代名》□他称の「③男性をさす。“彼女”とともに、西欧語の三人称男性代名詞の訳語として一般化したもの」は、「和英語林集成(初版)(1867)」が用例3点の初出と為り、「[語註](4)は「明治以降、西欧語の三人称男性代名詞の訳語として口頭語に用いられるようになった。明治以前は、人を指示する場合、男女を問わなかったが、明治以降に同じく訳語として定着していった“彼女”との間で、次第に男女の使い分けをするようになったと考えられる」と詳説する。同じ三人称代名詞の「他」は日本語と違って性別不明や区分不要の場合は両性を指せるが、辞書の語釈は文章語である以上【肉票】中の「他」は男性の人質の様な印象を与える。莫言の長篇小説『紅高粱家族』(赤い高粱一族。解放军文芸出版社、1987)を改編した映画「紅高粱」(脚本 = 陳劍雨・朱偉・莫言、監督 = 張芸謀、西安映画製作所、同年)の中で、匪賊集団が酒造小屋の女將を誘拐し身代金の支払いと引き換えに返すという話がある。女性が誘拐される事も多いから「其家属」(其の家族)とした方が無難であろうが、実家を離れ夫が失踪中の女將は小屋の金で自由を取り戻したので、「其家属」に「等」を付ければ殆ど全ての事案に当て嵌る様に為る。

【肉票】の語釈中の「劫匪」は「**囹**進行搶劫或劫持的匪徒。」(囹強奪或いは拉致をする匪賊)、関連の【綁匪】は「**囹**指従事綁票的匪徒。」(囹身代金誘拐に従事する匪賊を指す)である。【綁票】は「**勳**匪徒把人劫走，強迫被綁者的家属等出錢去贖。」(勳匪賊が人を攫って行き、拉致された人の家族等に身代金の支払いを強要する)と「家属等」を使っているが、日本語に無い「綁」(=「**勳**用繩、帶等纏繞或捆扎：～担架 | 把行李～在車架子上」[勳繩・紐等で巻き付ける、或いは確り括る。「担架を編み出す」「荷物を自転車の荷台リア・キャリアに縛り付ける」])は、政治や国際関係でも特定の人や陣営と運命共同体を結ぶ事の形容に用いられる。6つの子見出しの半分を占める犯罪関連の単語には【綁架】も有り、「**勳**用強力把人劫走。」(勳強い力で人を攫って行く)は和製漢語「拉致」に対応する。「綁票」(身代金誘拐)は「肉票」(その人質)に対する「綁票」(拉致)に他ならないが、「票」の①「**囹**作為凭証的紙片」(囹証拠としての紙片)、②「**囹**鈔票」(囹紙幣)、③「**囹**指綁架者用來勒索錢財的人質」(囹拉致する人が金銭を強請るのに用いる人質を指す)は、人質は紙幣と対価に為る引き換え券でしかない現実で妙に繋がっている。【票】③の用例中の「贖票」(身代金を払って人質を取り還す)は立項されていないが、【擄票】の立項(=「**勳**綁票的匪徒把擄去的人殺死，叫作擄票。」[勳身代金誘拐の匪賊が攫って行った人を殺すことを、「[肉]票を引き裂く」と言う])は、人命を紙切れの様に容易く破棄する犯罪の非道さと実際に間々有る状況を物語っている。日本語では一連の漢単語は全て無く「身代金誘拐」等の漢風和語・和製漢語を用いるので、この種の犯罪の有り形や表現から両国・両言語の相異を発見できる。『広辞苑』の【身の代金】の「身売りの代金。また、人身と引きかえに渡す金」に対して、『日本国語大辞典』の「〔名〕①人身売買の代金。みのしろ。②人質にとった人を引き渡す代わりに要求する金。人と引きかえに渡す金」は犯罪絡みの要素を明記する。其々の用例は「伊能文書－元禄一五年(1702)極月二七日・新福寺村惣右衛門子息年季証文(古事類苑・政治六二)“当午の御年貢に詰り、我等子供文四郎と申者、身代金四両請取預り申”と、[*ストマイつんぼ(1956)〈大原富枝〉“幹部の一人が、〈略〉新宿の何とか組の与太者に、どこかへ監禁されて、身の代金が要求されている事件が” *雲のゆき来(1965)〈中村真一郎〉六“誘拐犯人が身代金を持った人間の現われるのを待っている場面を”]であるが、経済企画庁が戦後復興の実現を宣言した年の②の初出は暴力団の暗躍を映し出し、東京五輪の翌年の2点目は男児誘拐殺人事件(63.3.31, 65.7.4 犯人逮捕)が背景に有ろう。中国語で「贖票」等に用いる「贖金」(質草を請け出す金。身請けする金)の『現代漢語詞典』の説明は、「**囹**贖回抵押品或贖身所用的錢。」(囹質草を買い戻す、或いは奴婢・娼婦等が人身自由を取り戻すのに用いる金)で、『広辞苑』の「しょっ-きん【贖金】」の「罪をあがなうための金。損害の賠償として支払う金銭。賠償金」と異なる。『日本国語大辞典』の同項目(『広辞苑』に無い「しょく-きん【贖金】」の主項目)も、「〔名〕罪を償うための金銭。損害の賠償として支払う金銭。賠償金。つぐない金」である。「日本外史(1827)一四・徳川氏前記」が用例3点中の初出と為

るこの語義は、『漢語大詞典』の語釈「贖罪、贖身或贖回抵押品所用的錢。」(贖罪・身請け・質草の請け出しに使う金)と接点がある。「宋李覲《安民策第八》」等2点の典拠があるこの語は道徳的な負債の清算の意を失い、罪を贖^{あがな}い償う賠償金の側面は現代中国語の利益交換の対価の発想から離れたが、「贖」の「貝(貨幣の祖形)・賣」は「身の代」より現金交易を連想させる点が興味深い。

『日本国語大辞典』の【誘拐】の語釈は「〔名〕巧みに人を誘い出し、連れ去ること。かどわかすこと」で、用例の「*刑法(明治一三年)(1880)三四一条“十二歳に満ざる幼者を略取し又は誘拐して” *苦の世界(1918-21)(宇野浩二)一・一“私が彼女を芸者屋から誘拐(イウカイ)したのだ” *竹沢先生と云ふ人(1924-25)〈長与善郎〉竹沢先生の人生観・五“いけないよ。そんなに誘拐しちゃ” *夢の中での日常(1948)〈島尾敏雄〉“どうしてもその誘惑に打勝つことが出来ないような時に酒精は私を誘拐しようと近寄って来た”は、明治の刑法の罪・罰の規定と大正・終戦後の小説の諧謔^{ユウモク}とは面白い対照を為す。『広辞苑』の「人をだまして誘い出し連れ去ること。かどわかすこと。“子供を一する”“一事件”」は、『現代漢語詞典』の「(動)用誘騙の方法把人弄走: ~婦女 | ~児童。」(動)欺瞞の方法で人を連れ去る。「女性を誘拐する」「子供を誘拐する」と通じる。「誘騙」(=「(動)誘惑欺騙」[動]誘惑して騙す)と共に、【誘】の17の子見出し中の関連・類義の単語には日本語に無いのが多い。【誘】の①「誘導: 循循善~。」(誘導する。「順次に善く導く」)は中性的な語義で、②「使用手段引人随從自己的意願: 引~ | ~使 | ~敵深入。」(手段を使って人を自分の意思に従わせる様にする。「仕向ける」[~する様に]誘い掛ける)「敵を深く誘い込む」)も目的に由っては善の性質を持つ。最後の4字は毛沢東が抗日戦争初期の『論持久戦』(持久戦を論ず。1938.5)で唱えた戦術で、『孫子兵法』(孫武[生歿年不詳, 春秋末の呉の兵法家]著, 現存する世界最古の軍事理論書)の第1篇「始計」中の「兵者, 詭道也。」(兵[戦]なる者は, 詭道也)を体現している。『日本国語大辞典』の【詭道】の「〔名〕①人をいつわりあざむく方法。正しくない手段」は、「孫子-始計“兵者詭道也, 故能者示之不能-”」を漢籍典拠とし、「仮名草子・智恵鑑(1660)八・兵智部」等3点の用例中の2点目「東京新繁昌記(1874-76)〈服部誠一〉三・新橋鉄道“商法は詭道, 始めは処女の如く終は脱兎の如に在り”」は、同じ中国古代の最も名高い兵法書が説く「脱兎の勢い」(『広辞苑』の項=「[孫子九地“始めは処女の如く, 敵人戸を開くや, 後は脱兎の如くせば, 敵は拒^きぐにおよばず”]素早く敏捷な動作の形容」)に由来した。「②ぬけ道。近道」は「晉書-石勒載記上」の漢籍典籍のみで用例が無いが、『広辞苑』の【詭道】は「人を欺くようなやりかた。正しくない手段」の1義と為る。規模と古語保存の度合が『広辞苑』に及ばぬ『現代漢語詞典』では収録していないが、【詭】①の「欺詐: 奸猾: ~詐 | ~計。」(詭詐。狡賢い。「詭詐」「詭計」)は否定的な意味である。ところが成語項の【兵不厭詐】(兵は詐偽を厭わず)は仁義無き戦法を肯定し、「用兵打仗可以使用欺詐的辦法迷惑敵人(語本《韓非子・

難一》：“戦陣之間，不厭詐偽。”不厭，不排斥，不以為非。)(兵を用いて戦をするには欺瞞の行り方で敵を惑わして可い。[由来は『韓非子』「難一」の「戦陣の間，詐偽を厭わず。』不厭とは，排除しない，非としない意)と書いている。

【誘】②の用例「引～」は「勸①誘導，今多指引人做壞事。②誘惑」(勸①誘導する。今は多く人を誘導して悪い事をさせることを指す。②誘惑する)の両義で，其々「受壞人～走上邪道」(悪い人に誘われて邪道に入った)，「經不住金錢的～」(金錢の誘惑に勝てなかった)という用例が有る。『日本国語大辞典』の語釈は「『名』勸め誘うこと。誘って引き寄せること」で，用例の「*江吏部集(1010-11)上・仲春庚申夜陪員外藤納言文亭同賦夜坐聽松風“詩册引誘接佳遊-，松下聽風夜自留” *一種の攘夷思想(1892)〈北村透谷〉“実在の莊嚴なる円満境に引誘するの望みなし”」は，漢籍典拠の「宋書-武三王伝・盧陵王義真“引誘情性-，導達聰明-”」と同じ肯定的な意味である。『漢語大詞典』の①「誘導，勸導」(誘導する。忠告する)の用例4点中，「《宋書・盧陵王劉義真伝》」の前に「晋葛洪《抱朴子・詰鮑》」も有る。良からぬ事を多く指す今日の使い方は社会の邪惡の増長の結果とも受け止められるが，共通の古い文例に含まれた「引導」(引率する。案内する。誘導する)に因んで言えば，国の指導者の「指引」(先導)が悪い方向へ傾く事態に対する警戒も連想される。『広辞苑』で不採録と為るこの単語は『現代漢語詞典』の複数の項の語釈に有り，例えば【誘捕】の「勸引誘捕捉：用灯光～害虫。」(勸誘い込んで捕える。「灯火で害虫を誘い寄せて捕える」)，【誘餌】の「囿捕捉動物時用来引誘它的食物◇用金錢做～拖人下水。」(囿動物を捕捉する時それを誘い寄せるのに使う餌。「[比喩的] 金錢を餌に人を墮落させる」[◇は比喩的な意の用例を表す記号])，【誘殺】の「勸引誘出来殺死：用灯光～棉鈴虫。」(勸誘い出して殺す。「灯火で綿虫を誘殺する」)，【誘降】の「勸引誘敵人投降。」(勸敵に投降を勧め誘う)である。『日本国語大辞典』に有るのは【誘殺】【誘捕】の2項で，前者は語釈の「『名』おびき出して殺すこと」のみで(『漢語大詞典』に拠ると「漢王允《論衡・紀妖》」が初出)，後者は「『名』降伏・帰順をさそうこと。また，教えの道などに導くこと」の意で，「後漢書-馮衍伝上」の漢籍典拠に対して用例の「安土往還記(1968)〈辻邦生〉三」は歴史が浅い。『広辞苑』には【誘殺】(=「誘いよせて殺すこと」)しか無く用例も付かないが，「腥風血雨」に満ちた中国では動物・人間を問わず破局へ導く「誘殺」「誘捕」は絶えない。20世紀の政界で最も有名な誘殺は張学良が1929年1月10日に敢行した事で，彼は東北軍「若総帥」の權威を固める為に傲慢不遜な先輩實力者の徹底排除を決意し，その楊宇霆・常蔭槐を公邸に誘い込んで処刑した(歿年43・52)。「誘捕」の好例には所謂「害人虫」([比喩的] 人に害を及ぼす者)の「4人組」中の王洪文・張春橋・姚文元逮捕が有り，会議出席の要請に応じた者の身柄を拘束する手法は孫政才にも適用された。

『現代漢語詞典』の【誘】の最後の【誘致】は，「勸導致；招致(不好的結果)。(勸引き起す。[良くない結果]を招来する)である。『日本国語大辞典』の「『名』[]さそい寄せること。招

き寄せること。また、企業などに働きかけてその土地へ来るようにしむけること。②結果としてある事態をひき起こすこと」は、①の1・2点目の用例「*日本外史(1827)一・源氏前記“我兵踵上大戦、佯卻上レ舟、以誘ニ致義経ニ、幾獲而逸レ之” *吾輩は猫である(1905-06)〈夏目漱石〉八“蜂の陣立て如何と見てとると、四つ目垣の外側に形ちづくった一隊がある。是は主人を戦闘線内に誘致する職務を帯びた者と見える”」は、漢籍典拠「漢書-武帝紀“誘ニ致単于ニ、欲ニ襲ニ撃之-”」と同じ敵対の悪意を帯び、和製語義②の用例「日本風景論(1894)〈志賀重昂〉三“其の浸蝕は即ち岩石の霉敗を誘致し”」も中国語と同様に悪い結果を表す。①の最後(3点目)の用例「日本拜見-八幡(1955)〈浦松佐美太郎〉“工場誘致に浮身をやつしている地方都市が”」は、『広辞苑』の「さそい寄せること。招き寄せること。“工場-”」の由来と考えられる。日清戦争(1894.7.25~95.4.17)勃発の年の「霉敗を誘致し」と日露戦争(1904.2.8~05.9.5)中の「戦闘線内に誘致する」は其々、中国との密接な「語縁」(言語の親縁性を表す造語)が明治まで強く保っていた事や、清軍撃破に続いて欧・亜に跨る老大国に挑む時の「好戦系」(造語)表現の急増を映し出す。『広辞苑』に残る唯一の和製語義の初出とされる文献は同辞書の初版刊行年に発表されたが、昭和30年の節目に現れた「工場誘致」の使い方は平和国家の建設専念の証と思える(初版の項は「さそい寄せること。おびきよせること。さそい出すこと。招き寄せること」で、「工場-」の用例は第2版で追加されたのである)。1938年の「国家総動員法」公布(4.1)と40年の大政翼賛会・大日本産業報国会成立(10.12, 11.23)に由って、戦争遂行の為に統制される「40年(戦時)体制」が発足し対外拡張の暴走を速めたが、対露戦勝50周年と対連合軍敗戦10周年に「自由・民主体制」(造語)が立ち上がった。同年を名に冠した歴史的な出来事は『広辞苑』の【五五年体制】で、「一九五五年、左右日本社会党の統一と自由民主党の結成とによって出現した保守・革新の二大政党制。現実には自民党の単独政権が続き、政権交代はおこらなかった。九三年自民党の分裂と総選挙での敗北により、非自民党連合内閣が成立し崩壊」と紹介してある。同時代の両国の相互参照で対応するのは中共政権の「57年体制」(造語)であり、同年の「反右派闘争」(6.8発動)で党と自分の独裁を強化した毛沢東は、翌年に準戦時体制の全国民総動員で「大躍進」の冒険を強行し経済の破綻を招いた。自民党成立57周年の日(2012.11.15)に総書記に当選した習近平は再選後、60年前の「57年体制」の専制・冒進を再演するか否かに重大な関心^{いん}が寄せられている。

「虚・偽」の邪気と「誠・真」の正気の綱引き

工場・企業等や広域競技大会・国際会議等の行事に対する誘致・招致は、中国語では対象の性質によって言い方が違うが全て「誘」を使わない。特殊な「申請主辦オリンピック運動会/世界博覧会」(オリンピック競技大会/万国博覧会の主催を申請する。略は「申奥/申博」)は別と

して、一般的に「招引」（『現代漢語詞典』の②「招入；引進」[招き入れる。取り入れる]の意）と言う。「～人材 | 外資～」(「人材を誘致する」「外資を誘致する」)の用例が有るこの語義は、「**働**①用動作、声響或色、香、味等特点吸引：～顧客」(**働**①動作・音声或いは色・香り・味等の特徴で惹き付ける。「顧客を引き付ける」)と通じて「誘」の要素を含む。日本語に無い「招商」(＝「**働**用広告、展覧等方式吸引商家 [投資、経営]：～引资。」「**働**広告・展覧等の方式で商家 [の投資・経営] を誘致する。「商家を誘致し資金を導入する」)も同じであるが、第5版に新設した【引资】(**働**引進資金 [働資金を導入する])の第1の用例が「招商～」で、「～一千万元發展蔬菜事業」(1千万元の資金を導入して野菜事業を發展させる)は「三農問題」と関る。『日本国語大辞典』の【招引】は「〔名〕招きよせること。招くこと。招待」の意で、「明衡往来 (11C 中か) 上本」等5点の用例の後の漢籍典拠は、次の【招飲】(＝「〔名〕人を招いて酒を飲むこと。また、その宴」+「本朝文粹 (1060 頃) 一・貧女吟〈紀長谷雄〉」等2点の用例)と繋がる様に、「北齊書－韓軌伝 “韓軌〈略〉好酒誕縦，招引賓客，一席之費，動至二万錢-”」と為る。『広辞苑』の語釈(「まねきよせること。招待」)のみは使用頻度の低さを思わせるが、人材・外資を吸い込む招引や投資・経営欲をそそる「招商」は昨今の中国では盛んである。「誘致」ならぬ「招引」を使うのは後者の手偏に中国の特色の手掛りが見えるが、【肉票】【撕票】の語釈中の「擄」(略奪する。人質に取る)の様に日本語に無い手偏の漢字が多く、自らの手で人を虜にする形象の「^{とりこ}俘・虜」の字形は能動性を尊ぶ国民性の例証に為る。「太初有道」と矛盾する様でも言説より行動を重んじる志向性が窺えるし、往々にして悪い事へと導く「誘」に対する心理的な抵抗も一因かも知れない。『日本国語大辞典』の【誘惑】は「〔名〕さそって心をまどわすこと。よくないことにさそい込むこと」の1義で、「西国立志編 (1870-71) 〈中村正直訳〉一〇・五」等3点の用例に次ぐ漢籍典拠は、否定的な用法の「淮南子－要略訓 “使下人不妄没於勢利，不中誘惑上”」である。『広辞苑』の従来の「人を迷わせて、悪い道にさそい込むこと。“一に負ける”」は、新版で用例の前に「相手の心を引きつけて、自分の思いどおりにすること」と追加されたが、『現代漢語詞典』でも「**働**①使用手段，使人認識模糊而作惡事：不為金錢和女色所～。」(**働**①手段を使って，人の認識をあやふやにして悪い事をさせる)の他、「**働**②吸引；招引：窓外的景色很～人。」(**働**②惹き付ける。招き誘う。「窓外の景色はとても人を魅せる」)も有る。中国思想の陰・陽、善・悪、是・非等の相互内包・対立統合に相応しい両義であるが、【引誘】①と同様に多く良からぬ事を指し②の金錢を媒介とする例とも重なる。

『現代漢語詞典』の【誘致】の語釈と為る近義語の「導致」「招致」は、其々の項の「**働**引起：由一些小的矛盾～双方關係破裂。」(**働**引き起す。「若干の小さな対立が双方の關係の決裂を導いた」)，「**働**①招取；搜羅 (人材)。**働**②引起 (後果)：～意外的損失。」(**働**①募集・採用する。〔人材を〕寄せ集める。②〔多くは悪い〕結果)を引き起す。「意外な損失を招いた」)の用例が

示す様に、良い語義を兼ねる単語でも中性的な語義でも否定的な使い方が一般的である。「招引」「誘致・導致・招致」の合成の様な「引致」（語積＝「勳引起；導致」も、用例は決り型の通り「事故～多人傷亡」（事故は多くの死傷者を出した）である。【招致】の語積中の「後果」は「**囹**最後の結果（多用於壞的方面）」（**囹**最後の結果 [多く悪い方に用いる]）の意で、用例の「～堪慮 | 検査制度不嚴，会造成很壞的～。」（「結末は憂慮すべきだ」「検査の制度が嚴格でなければ，大変悪い結果を齎すはずだ」は俱に好ましくない事態である。中の「造成」も「**勳**引起；形成（多指不好的結果）」（**勳**引き起す。形成する [多く良くない結果を指す]）で、用例の「地震～嚴重損失 | 乱收費～的影響很壞」（「地震は深刻な損害を齎した」「**濫**りな費用徴収が与えた影響は大変悪い」）は、例に由って良い意味の使い方を提示していない。一連の単語の中で日本語には「導致」「後果」は無く、「招致」は『広辞苑』の「招きよせること。“オリンピックを一する”」、『日本国語大辞典』の「〔名〕まねきよせること。まねいてこさせること」+「日本外史（1827）二・源氏正記」等4点の用例+漢籍典拠「史記-呂不韋伝“以-秦之彊-羞レ不知，亦招-致士-，厚遇之-”」の様子に、『現代漢語詞典』の【招智】（知識型人材を導入する）と同じく礼を尽す行為である（第6版で【招致】の前に追加された同音 [zhāozhì] の同項目は、「**勳**從外部引進知識型的人才」「**勳**外部から知識型の人材を導入する」の意で、用例の「加大～扶貧的力度」[知識型人材の導入と貧困扶助に一層力を入れる]は又「三農問題」の課題である。『広辞苑』の【引致】は「①ひっぱって行くこと。つれて行くこと。②逮捕状・勾引状などにより，被疑者・被告人などを強制的に官公署などに出頭させること」で、『日本国語大辞典』では「〔名〕①引き寄せること。②召し連れること。召し寄せること。③被疑者，被告人，現行犯人を，強制的に裁判所，検察庁，警察署に連行すること」の多義を持ち，其々「晉書-宣帝紀」と「吳志-張温伝」の漢籍典籍，「刑事訴訟法（明治二三年）（1890）五八条」等3点の用例が有るが，中国語由来の意味は定着せず国内のみに通用する和製語義が主と為っている。

『日本国語大辞典』の【造成】は「〔名〕①つくりあげること。②土地など，すぐ利用できるように人が手を加えること」の両義で，①は「本草綱目-木部・女貞・集解“時珍曰，半月其虫化出，延-縁枝上-，造-成白蠟-，民間大獲-其利-”」の漢籍典拠が付き（用例＝「布令字弁（1868-72）〈知足蹄原子〉二“造成 ザウセイ シアゲル”」等3点），②は「農地法（1952）六一條“公有水面埋立法により農林大臣が造成した埋立地」が用例2点の初出と為る和製語義である。『広辞苑』の「（人工を加えて）作り上げること。“宅地一”“一地”」の用例が示す様に，戦後復興期の国土開発で生れた形而下の建設的な意味が一般化している。『漢語大詞典』の語積は「猶造就。」（造就に同じ）で、用例の「《詩・大雅・思齊》：“肆成人有徳，小子有造”漢鄭玄箋：“子弟皆有所造成。”」は、医薬学者李時珍（1518～93）著本草書（薬用に為る植・動・鉱物の産地・効用等を述べる書物，52巻，78年成立，96年刊）より14世紀も早い。多くの経書・緯書に注した後漢の経学者鄭玄（127～200）の字康成と山東高密の出身は、川端康成

の名作に感銘を受けて自らの土壌を深耕した高密度人莫言の「造就」を連想させる。「造就」は『現代漢語詞典』で「①圃培養使有成就：～人才。②圉造詣；成就（多指青年人的）：在技術上很有～。」（①圃成果が出る様に養成する。「人材を作り上げる」②圉造詣。成果「多く若い人のものを指す」。「技術に於いて可^{かなり}成造詣が有る」）と説明・例示されており、『漢語大辞典』で其々「元劉壘《隱居通議・礼楽》」等3点と現代の「蕭乾《鵬程》三」等3点の出处が有る。『日本国語大辞典』の語釈は「〔名〕つくりあげること。養成すること」, 用例は「徂徠集(1735-40) 一九・訳文筌蹄題言十側」等4点と為るが、『漢語大辞典』の「制作成；制造成」(～に作り上げる。～に造り上げる)の3点中の初出「《元典章・工部一・緞疋》」が語源と思われるこの言葉は、中国語の多義・多用と反比例して『広辞苑』には入っていない。『広辞苑』の「じょうげん【鄭玄】(テイゲンとも)」に、「馬融に学び訓詁の大家となり、門人数千。古文学者として今文^{かぶん}学をも融合し、体系的学説を樹立。その注解した書は『周易』『尚書』『毛詩』『儀礼』『周礼』『礼記』『論語』『孝経』などほとんどの経書に及ぶほか、緯書にも注する」と有るが、「造就」の初出と為る注解の対象は孔子の編と言われる中国最古の詩集で、同じ五経の内『尚書』(『書経』)と並んで「詩書」と称される。『現代漢語詞典』の【詩書】は「圉①指我国古代典籍《詩経》和《尚書》。②泛指儒家經典或書籍(圉①我が国の古代典籍『詩経』と『尚書』を指す。②広く儒家の經典或いは書籍を指す)の両義で、②の用例「～伝家 | 満腹～」(「代々に詩書を善くする家柄」「腹に満ちる[豊富な]学識」)から儒教の伝統・地位の固さが窺える。その『詩経』から派生した「造成」の積極的・生産的な「造就」の要素は時代と共に薄れ、『本草綱目』に見える「獲利」(利益獲得)と違って不利益の場合に多く使う様に為ったので、言葉の点検を手掛りに変化の原因と意味を掘り下げる必要が有ろう。

『広辞苑』の【詩経】は「①詩経と書経」の他に、和製語義の「②詩を作ることと、字を書くこと。③詩の本。詩集」も有る。『日本国語大辞典』ではその①の漢籍典籍に「春秋左伝一僖公二七年」を挙げているが、詩を作る事と字を書く事から転じて表す文学の分野で『現代漢語詞典』の②の古代の用例を拾うなら、杜甫の七絶「聞官軍取河南河北」(官軍の河南河北を収むるを聞く)の領聯(第3・4句)「却看妻子愁何在, 漫卷詩書喜欲狂。」(妻子を却り見て愁い何にか在る, 漫りに詩書を巻き喜んで狂せんと欲す)が思い当たる。「詩書」で書籍全般を指す転義は思想・文化の中核を為した儒家の經典の重要性の証で、代名詞の『詩経』『書経』は詩+史, 文学+政治の組み合わせで中国社会の奥深さを思わせる。『詩経』の331篇(内6篇は題名だけ伝わる)は風(各国の民謡, 160篇)・雅(周の朝廷で奏せられた饗宴や儀式の歌, 105篇)・頌(宗廟の祭祀に用いられた歌, 40篇)から成り、安定期を反映する抒情詩と混乱期が投影する叙事詩から民情や時代精神が読み取れる。『書経』は堯(名は放勳, 古代の伝説上の聖王)・舜(古代説話に有る5帝の1人)～秦^{ほく}の穆公(名は任好, ?～前621, 前659～前621在位)の政治史・教戒を記した中国最古の經典(20巻・58篇)で、改革・開放元年の

2600年前までの歴史の記録は「初めに政治有りき」の国柄を現している。「詩・書」両経の編者と言われる孔子の『詩経』評として、『論語』「為政」に「子曰：“『詩』三百，一言以蔽之，曰‘思無邪’。”（子曰く、『詩』三百，一言以て之蔽う，曰く「思^{よこしま}い邪無し」）と有る。「一言以蔽之」（『現代漢語詞典』の項＝「用一句話來概括。」[一言で総括する]）は、『広辞苑』の「いち-げん【一言】」の成句項【一言以てこれを蔽^{おほ}う】（＝「〔論語為政〕一言で全部の意味を言い尽くす」）の様に日本語にも入った。『日本国語大辞典』の呉音を用いる主項目【一言】の【いちごん以（もつ）て之（これ）を蔽（おお）う】は、語釈も「全部」は「全体」に作る以外に一緒であるが、孔子語録の全文引用と呼応する用例の「童子問（1707）上・三九“曰，仁之為^レ徳大矣，然一言以蔽^レ之。曰，愛而已矣”」は、『孔子家語』「三恕」に見える孔門十傑中の子貢〔端木氏，名は賜，前520～?〕の言や『孟子』「婁離章句下」の「仁者愛人」（仁たる者は人を愛す）と重なる。『書経』と共に孔門学団の思想・情操教育の教典を為した『詩経』に対する師の概括は、「魯頌・駉」篇の句を用いて全体の純粹無垢を称えるものである。その名著中の「造」を敷衍した「造成」が多く悪い結果の形成を表す様に変質したのは、聖人が3文字で包み込んで薦めた「無邪」の精神が後世で衰微した所為かも知れない。

『現代漢語詞典』に無い「思無邪」は『広辞苑』の【思^{よこしま}い邪なし】で、「〔詩経魯頌，駉・論語為政〕心情をありのままに吐露していつわり飾ることがない」と説明されるが、『日本国語大辞典』の【思】の成句項【おもい邪（よこしま）無（な）し】の講釈は、「〔詩経－魯頌・駉〕に見え、『詩経』の詩全体の性格を最もよく表わす一語として、孔子が『論語－為政』で言った“詩三百，一言以蔽之，曰，思無^レ邪”から）私心なく、公平である。思うことをそのまま言い表わして偽ったり飾ったりしない」と、「偽・飾」に対する「真・直」だけでなく「邪」に対する「正」への宣揚を顕している。和語の鍵詞の『広辞苑』の項「よこ-しま【邪・横しま】」は、「（ヨコサマの転か）①横の方向であること。また、そのさま。景紀行“一に山より射る”②正しくないこと。邪悪。邪曲。横道。“一な恋”）と為るが、『日本国語大辞典』の語釈は「〔名〕（形動）①横の方向であること。また、そのさま。よこむき。②正しくないこと。道にはずれていること。横暴なこと。また、そのさま。邪悪。非道。よこさま」で、「書紀（720）仁徳一年四月〈前田本訓〉」等2点の用例が有る①に対して、②は3点中の初出「正法眼蔵（1231-53）弁道話」の様に仏教所縁の語義である。『現代漢語詞典』の【邪（*衰）】は「①邪不正當。②邪不正常。③中医指引起疾病的環境因素。④迷信的人指鬼神給予的災禍」（①邪不正當。②邪不正常。③中国医学で病気を引き起す環境的要因を指す。④迷信の人が鬼神の与える災禍を指す）の多義で、17の子見出し中【邪道】【邪悪】【邪教】【邪魔】【邪念】【邪氣】【邪説】【邪心】【邪行】は『広辞苑』でも立項してある。【邪路】（＝「囿邪道」）は『日本国語大辞典』に有り（『名』邪悪，淫蕩〔いんとう〕に満ちた，よくない道。まちがった方向。また，そのような世界。邪道）の意，用例＝「榎尾明恵上人遺訓（1238）」等5点，漢籍典拠＝「王建－寄崔列

中丞詩「貪泉誓不_レ飲，邪路誓不_レ奔」，【邪崇】(=「_囗指邪惡而作崇的事物：驅除～| 戰勝～。」
 [_囗邪惡で崇る物事を指す。「邪惡な崇るものを驅除する」「邪惡な崇るものに打ち勝つ」)も採録されている(語釈「『名』邪惡なものたたり。よこしまたたり」+用例「隨筆・西遊記(新日本古典文学大系所収)(1795)三」等3点)が，共に由緒有る用例を持ち後者は和製と規定されるにも関わらず戦後の日本語には消えた。『漢語大詞典』の「_囗指作崇害人的鬼怪。」(旧くは崇って人を害する幽靈・妖怪を指した)の意に，和文初出の5世紀前の「_元関漢卿《調風月》第二折」等3点の出処が有り，『現代漢語詞典』の立項及び2点の用例と合せて中国に於ける「邪崇」の頑強さを思わせる。『広辞苑』の【邪・横しま】①の語釈中の【邪曲】(=「よこしま。不正。非道」)は，『日本国語大辞典』の語釈「『名』心がねじけていること。また，そのさま。不正。邪惡。じゃこく」，用例「地藏菩薩靈驗記(16C後)五・一七」等5点の後に，漢籍典拠の「史記-屈原伝「邪曲之害_レ公也，方正之不_レ容_レ也」」も有るのに，両国の漢単語の取捨・興亡の不一致を現す様に『現代漢語詞典』の圏外に置かれる。但し共通の価値観として「邪」は肯定的な意味も有る「貪」と違って絶対的な悪であり，「邪曲」の「曲」は「邪=横」の発想が無い中国の「邪=歪」の認識と異曲同工である。

『現代漢語詞典』の【邪道】は「_囗不正当的門路、道路：歪門～| 教育青少年千万不能走～。」(_囗正当でない^{つて}伝・道。「^{わるだく}悪巧みや邪な方法」「青少年に対して，絶対に邪道を行ってはならないよう教育する」)は，旧版の「_囗不正当的生活道路：不要走～。」(_囗正しくない生活の道。「邪道を行ってはいけない」)を改訂し，四字熟語を入れ青少年教育の急務に対応する様にした。対して『広辞苑』では「①よこしまな道。正当でないやり方。“一に陥る”②邪教に同じ」とし，『日本国語大辞典』は「『名』(形動)道理に合わない仕方，方法。また，邪惡なおしえ。邪教や邪説。また，本来あるべきでないさま。不正なさま」の意に，「日本往生極楽集(983-987頃)無空」等7点の用例と「礼記疏-王制」「金剛經」の漢籍・仏典の出処が占してある。対義語の「正道」(語釈=「『名』正しい道。正当な道理。また，正しい行為。公道。しょうどう」，用例=「菅原文草(900頃)九・請令議者反復檢稅使可否状」等4点)は，「礼記-燕義“上必明_二正道_一，以道_レ民」」を漢籍典拠にしている。『広辞苑』の「正しい道。正当な道理。公道。“一に就く”“一を踏み外す”」は用例が2点付くが，『現代漢語詞典』の「_囗①正路。②正確の道理。」(_囗①正路。②正しい道理)は語釈のみで，【邪道】の用例付き・追加に見る悪への警戒の強さを浮彫にしている。日本語に無い「邪道」の近義語「歪道」は，「_囗①不正当の途径：邪道：年紀輕輕的，可_レ不能走～。②壞主意：這家伙想的_レ是是～。也說歪道道兒。」(_囗①正当でない^{ルート}経路。邪道。「若いんだから，邪道を行ってはいけないよ」②悪知恵。「此奴は悪知恵ばかり考えている」。「歪道道兒」とも言う)の両義を持つ。「歪道」と「邪曲」は「歪曲」を構成する2字の類義で繋がるが，【邪門歪道】(=「見1342頁『歪門邪道』」[1342頁の『歪門邪道』を見よ])の主項目は，「不正当の途径；壞点子。也說邪門歪道」(「壞点子」=「壞主意」)

である。「邪」の「横道」に対して「歪」は字形が「不正」の語義を可視的に表し、「上梁不正下梁歪」（上の梁が正しくないと下の梁も曲がる）は「不正→歪」を言い得て妙である。この熟語は「比喻上面の人行為不正, 下面の人も就跟着学壞。」（上の人の行為が正しくなければ、下の人も倣って悪くなるということの比喻）であるが、腐敗等の「不正之風」（不正の氣風）は上層部に根源が在るという法則の解説に為る。

【邪氣】の「**㊦**①不正當的風氣或作風。**②**中医指人生病的致病因素。」（**㊦**①不正な氣風或いは仕方。**②**中国医学で人が病気に罹る要因を指す）の両義中、**①**の用例は「氣・風」を含む「歪風～|正氣上昇, ~下降」（「不正な氣風と邪氣」「正氣は上昇し, 邪氣は下降する」）である。『広辞苑』の「**①**病氣などを起こす悪い氣。悪氣。太平記二三“俄かに一に侵され, 身心惱乱して”。“一を払う”**②**悪意。“一のない人”**③**もののけ。著聞一“はじめ歩みきたりつるものは一なり”**④**風邪。感冒」（「著聞」=『古今著聞集』）は、**①**だけは中国語に由来し他は全て和製語義である（『日本国語大辞典』の「**〔名〕**①病氣などを起こす悪い氣。悪氣。②物の怪[け]。ざけ。③かぜ。風邪。感冒。④ねじけた氣風。悪意」の中で、**①**にだけ「礼記-楽記」の漢籍典拠が有り、其々2・4・2・4点有る用例の初出の年代順は**②**→**③**→**①**→**④**）。不正な氣風や社会の病に使う中国語の意は「邪・歪」の近義と「邪・正」の対義に基づき、対と為る【歪風】は「**㊦**不正派的作風；不好的風氣：～邪氣|制住鋪張浪費的～。」（**㊦**真^ま当^{とう}でない仕方。好くない氣風。「不健康で邪な氣風」「派手好みの浪費の不良氣風を制止する」）、反対の【正氣】は「**㊦**①光明正大的作風或風氣：～上昇, 邪氣下降。**②**剛正的氣節：～凜然。**③**中医指人的抗病能力。」（**①**光明正大の仕方或いは氣風。「正氣は上昇し, 邪氣は下降する」**②**剛正な氣骨。「凜然とする正氣」**③**中国医学で人の病氣に対する抵抗力を指す）である。『広辞苑』の「**①**天地にみなぎっているとかがえられている, 至公・至大・至正な天地の氣。**②**正しい氣風」と、『日本国語大辞典』の「**〔名〕**①中国思想でいうところの, 広く天地人の間に存在するという, 正しくて大きな根本の力。天地の元氣。**②**正しい氣風。正しい意氣。正しい心」は、共に中国思想の理念を踏まえる半面中国医学の概念を取り入れていない。後者の【造成】の漢籍典拠は儒教経書由来の古い初出でなく本草書から採っただけに不思議であるが、毛沢東が世界に対する中国の文化面の三大貢献の1つに挙げた中国医学は、「己身中心主義」・「活命哲学」（「命有つての物種」の考えに基づく、生存の為に最大限の努力をする志向）が発達する国柄から中国思想と密接な関係を持つ。**①**の漢籍典拠「*春秋演孔**㊦**“正氣為_レ帝, 間氣為_レ臣, 秀氣為_レ人” *文天祥-正氣歌“天地有_二正氣_一-雜然賦_二流形_一”」、**②**の用例「*公議所日誌一一七・明治二年（1869）五月“神州の正氣此器に存す” *近世紀聞（1875-81）〈染崎延房〉三・一“己が身命を顧ず只管国家の為に尽力致し候者共にて寔に神州の正氣（セイキ）と申べき有難き人々なり”」と漢籍典拠「鶴林玉露-卷一四“欧公文非_レ特事事合_レ体, 且是平和深厚, 得_二文章正氣_一”」から、漢字文化・儒教文化が深く根付いた近世日本に於ける中国の言語・理念の影響

が実感できる。

「大本営発表」に浴びせた世論の「国罵」

「造成」等の和文初出と同時期の用例中の「正気」の修飾語は【神州・神洲】の項で、「〔名〕 (“しんじゅう”とも) ①神国。とくに、日本で、自国を誇っている。②中国で、自国の美称。③神仙のいる所。仙洞」の多義である。漢籍典拠「史記－孟軻伝 “中国名曰＝赤県神州＝，赤県神州内自有＝九州＝，禹之序＝九州是也＝”」のみ有る②が一番古く、同じく「河図括地象 “崑崙東南地方五千里，名曰＝神州＝，其中有＝五山＝，帝王居之”」しか無い③がそれに次ぎ、和製語義の1は用例6点の初出「浮世草子・諸道聴耳世間猿 (1766) 四・一 “神州” (シンジウ) 五畿七道にわかれてより都鄙の文言 (ものいひ) に其土地そなはりて」は、前漢の歴史家司馬遷 (前145頃～前86頃) 撰『史記』(二十四史の1つ、本紀12巻・世家30巻・列伝70巻・表10巻・書8巻、前91年頃完成) より18世紀も遅い。表記が異なる4点目の「文明論之概略 (1875) 〈福沢諭吉〉三・六 “我は我邦を以て至尊の神洲と思ひしに”」に続いて、【正気】②の2点目が「只管 (ひたすら)」「寔 (まこと)」「神州 (シンシウ)」の読み仮名を添えて出るが、最後の「停戦の詔書－昭和二〇年 (1945) 八月一四日 “宜しく拳国一家子孫祖伝へ確く神州の不滅を信じ”」は、無条件降伏後の天皇神格化の廃止に伴って国威宣揚の公式使用の末期的な用例と為った。『広辞苑』の【神州】の「①神国。日本・中国で自国の美称として用いた。 “一男児”。②神仙の住む所」は、発祥国の自賛美称をも過去形で表現する処に誤認が有った。『現代漢語詞典』の「〔図〕戦国時人驪衍称中国為 “赤県神州” (見於《史記・孟子荀卿列伝》)、後来用 “神州” 作為中国的代称。」(〔図〕戦国時代の驪衍は中国を「赤県神州」と称した [『史記・孟子荀卿列伝』に見える]。後に「神州」を以て中国の代名詞と為している) は、過去・現在・未来に亘って使い続けて行く不滅の見通しに立つ。毛沢東は七律2首「送瘟神」(瘟神を送る。1958.6.30) の「其二」で、「六億神州尽舜堯」(六億の神州 尽 舜と堯) で「大躍進」の「全民運動」を讃えた。中国初の宇宙船も同音の「神州」(Shénzhōu) に因んだ「神舟」と命名され、『広辞苑』新版で【神州】の次に『現代漢語詞典』でも未採録の【神舟】が追加された (=「中華人民共和国の宇宙船。二〇〇三年、神舟五号がソ連・アメリカに次いで独力で有人宇宙飛行に成功」)。無人実験段階の「神舟1号」(1999.11.20 打ち上げ) に次ぐ「2号」(同2001.1.10)、初の有人軌道飛行に成功した「5号」(03.10.15) の後の無人の「8号」(11.11.1) は、「1.11」「11.1」「11.11」が新兵器実験等の吉日に能く使われる伝説の例に算えられる。

日垣隆 (1958～，作家) 著『松代大本営』の真実』(講談社，94) 序章「遭遇——遺志を継ぐ」の第1節「第一号発破」は、44年11月11日11時に1発目の爆破音が信州松代の山中に鳴り響いた場面で始まる。「午後三時二〇分、松代工事の本部に集まった軍人たちはラジオ

放送に歓声をあげている。/ “大本営発表、在支米航空部隊の B29 八〇機内外をもって本一月一日一時、九州西部および済州島に襲撃、雲上より盲爆のち遁走せり”。だが実際には、中国から飛びたった B29 によって北九州海軍航空基地のレーダーが爆破され、しかも第二六師団の輸送船五隻がすべて、マッカーサーの軍隊によって沈没させられていた。土曜日、仏滅であった。/ 日時の選定は単なる偶然ではない。戦争続行を賭けた大本営その他の地下壕移転には、記念すべき、つまり忘れえぬ日時が選ばれたのである。計画および指揮にあたった人々の証言によれば、漢数字の十一は吉を思い起こさせ、予定地の一つ^{みなかみやま}皆神山の名称も神秘的と感じられ、信州は神州に通ずるとさえ強弁された。/ 神聖なるこの大工事は、戦艦武蔵や大和の建造と並ぶ最高軍事機密だった。武蔵と大和が米軍に撃沈されていたことも国民には敗戦まで秘匿されたのだが、松代を中心とする地下壕への移転計画は、日本の敗戦を前程として進められた点に特異さが際立っていた。武蔵の沈没（四四年一〇月二四日）が、松代の掘削工事開始とはほぼ同時であり、大和の沈没（四五年四月七日）が、松代での天皇関連工事の開始と前後しているのも、単なる偶然ではない。日本帝国の陸海両軍は、そこまで追いつめられていたのである。/ だが^{とどろ}一十一月一日に轟いた爆音は、古参軍人にとっては当時、実に感無量の祝砲と聞こえた。これより二六年前の一八一八年一十一月一日、第一次世界大戦が日本を含む連合国を勝者として終結していたからである。つまりその日は“戦勝記念日”だったのだ。『広辞苑』で隣り合う「信州」（＝「信濃^{とどろ}国の別称」と）と「神州」の語呂合せは、中国語では「信」（xìn）と「神」の発音の違いに由って成立しないが、同音或いは読み方が似通った言葉で縁起を担ぐ慣習は両国共有の伝統である。石川九楊（1945～、書家・書道史家）は『二重言語国家・日本』（日本放送出版協会、99）第3章「日本語は二重言語である」の「(三) 二重複線言語の文化」第1節「落語」の中で、日本語の漢語+和語の二重言語の性質と同音異義語の多さの上に立つ洒落の根深さを説き、洒落の起原は『古事記』『万葉集』の時代、即ち日本語の起原に遡り、「日本語は洒落と駄洒落を構造的に内に秘めた言語であり、日本は“駄洒落”によって生れた国と言っているほどなのだ」と言い切る。日本の受験・勝負事や御節^{おせち}での「カツ丼→勝つ」や「昆布→喜ぶ」と通じて、中国人は「年年有余」（年々余裕が有る）の祈願を込めて、最も大事な旧暦大晦日の晩餐の料理に「余」と同音の魚（yú）を入れる。不注意で硝子^{ガラス}製品を割ってうと即座に「歳歳平安」と言って取り繕う流儀も有るが、「碎碎」（粉々）と「歳歳」の同音（suìsuì）に引っ掛けたこの当意即妙の成句転用は、「破財免災」（財物の破損で災難を免れる）の発想に合い責任逃れの効用も持つ。

『「松代大本営」の真実』の記述中「11.11.11」の日時に由る大真面目な縁起担ぎと共に、大本営発表の同時刻の戦況朗報の真っ赤な嘘や仏滅に当る不吉が目を引く。『広辞苑』の【大本営】の「戦時または事変の際に設置された、天皇に直属する最高の統帥機関。一八九三年（明治二六）に制定。第二次大戦後廃止。島崎，春“その月の十三日には最早^は一は広島にあつた”」に

対して、『日本国語大辞典』では「〔名〕戦時または事変の時に設置された天皇直属の統帥部。幕僚および各機関の高等部を置き、参謀総長および軍令部総長は長として帷幕の職務に奉仕し、作戦に参画して終局の目的を考え、陸海両軍の策応・協同をはかった。明治二六年（一八九三）制定。第二次大戦後廃止」と詳解され、詩人・作家島崎藤村（本名春樹、1872～1943）の長篇小説『春』（緑蔭叢書、08）を含まぬ4点の用例は、制定前の「官報-明治二三年（1890）三月六日」が初出で、最後の「古川ロッパ日記-昭和二年（1937）一月一日」は、奇しくも日中戦争勃発の年の「極上吉日」（造語）である。一方、『広辞苑』の【大本営発表】（＝「①大本営が発表する戦争に関する情報。②権力を持つ側が一方に流す、自らに都合の良い情報」）は、両義とも歴史と現実を語る際に可く使われるのに『日本国語大辞典』では欠落している。定義が国内限定と為る和製漢語「大本営」は『現代漢語大辞典』で、「㊦①指戦時軍隊の最高統帥部。②泛指某種活動的策源地或根拠地。」（㊦①戦時の軍隊の最高統帥部を指す。②広くある活動の策源地或いは根拠地を指す）の両義である。中国でも孫文主導の中華民国陸海軍大元帥大本営（1923.3.2～25.7.1、広州）が有り、日本から輸入したこの単語の本拠地を譬える転義は今でも中国の言説に使われる。「大本営発表」は早年に日本の軍事学校で訓練を受けた蒋介石も導入しなかったが、抗日戦争後の対中共内戦での戦況報道は敗勢が濃いほど粉飾・捏造の傾向が強い。中共政権下の「大本営発表」の最も荒唐無稽な例は「大躍進」中の『人民日報』に多数有り、稲の1畝（約6.67^{ムー}a [667平方^{メートル}ル]）13万斤（6.5万^{キロ}kg）産出云々の白日夢的な「戦果」も紙面を飾った。中央電視台の毎晩「黄金時間」の「新聞聯播」（全国共同報道放送）でも数十年に亘って、最初の25分間は国内の「形勢大好」（素晴らしい情勢）を謳い、最後の5分間は海外「水深火熱」（深刻な受難）を印象付ける、という「大本営発表」的な輿論操作に対する視聴者の酷評を浴びて来た。

『日本国語大辞典』の不採録で「大本営発表」の比喩的な意味の由来は未詳の儘であるが、士気鼓舞の為に国民を愚弄する政府の恒常的な虚偽発表をせぬ平和国家の姿に相応しい。2011年の「3.11」東日本大震災で福島第1原子力発電所事故が発生したが、田原総一郎（1934～、^{ジャーナリスト}報道人・評論家）は国内の報道機関の姿勢を批判し、東京電力や政府の公式発信を頼る傾向を「大本営発表に頼りすぎている」と斬った。³⁹⁾ 海外の報道は最初から原子炉の炉心溶融という最悪の事態を前提としたが、衝撃的な情報を抑える日本の報道の徒に危機感を煽らぬ配慮は穏和な国柄らしい。同年「7.23」の温州高速鉄道衝突・脱線事故で鉄道部の粗末な運営・対応は義憤を買い、特に救援の「72時間の黄金時間」の常識に拘らず5時間後に打ち切りを宣言し、運行再開を急ぐよう無惨な車体を高架橋から押し落して埋める措置が許容の限度を超えた。証拠隠滅の疑いが払拭できぬ暴挙の進行中に、特別警察隊長（一説に親族）が命令に背いて残存の車輛に入り、事故発生21時間10分後に2歳半の女兒（両親は遭難死亡）を救い出した。更に5時間後に鉄道部新聞發言人（^{スゴークスマン}報道官）王勇平（1955～）が地元で新聞発

布会（記者会見）を行い、死者数を打ち切り宣言の時点と同じ35人と言いつつ、車体を埋めるのは「搶險（緊急救援）の為」という現場担当者の強弁を持ち出して、「至於你信不信，反正我信了。」（貴方〔たち〕は信じようが信じませんが、^と ^{かく} 兎に角私は信じて了うのです）、と不謹慎にも笑みを浮かべながら頭を振って放言した。探査の末「生命特徵」（生命反応）が無いと発表後の女童存命に就いては「奇跡」として言い逃し、拙速な打ち切りの誤りを追究されると返答に窮して、「我只能說，它就是發生了。」（それは〔経緯はどうであれ〕実際に起きたのだ、としか私は言えません）と開き直った。見戯じみた「官方」^{オフィシャル}発表は100人超の記者団の激怒に由って30分で打ち切ったが、その妄言・迷言は当局の人命・民意軽視と共に「網民」^{ネット・シチズン}や報道人に厳しく指弾・擲揄された。26日の香港『蘋果日報』の第1版に「只要通車，不要救人，他媽的！」（列車通行のみ追い，人命救援は要らぬ——糞垂れ！）と大きな見出しで民衆の痛罵を代弁した。31日の広州『南方都市報』でも「他媽的“奇跡”!!!」（糞垂れの「奇跡」!!!）を記事の題にし、「面對如此慘烈的事情以及鐵道部的糟糕處理，我們只想用三個字表示看法——他媽的！」（これほど惨烈な出来事及び鐵道部の拙い処理に対して，我々は只3文字で自分の考えを表したい——糞垂れ！）と怒声を上げた。「国罵」（国の代表的な罵倒語）が真面目な新聞の意見表明に使われるのは前代未聞の事で，良識・勇気有る報道人の激越な反応は大本営発表への不信と大本営への不満を現している。

『現代漢語詞典』に当然無い「国罵」は中国の罵倒語の豊富・常用を感じさせるが，この類の言葉を言う「粗口」は「粗話；臟話」の意で，【粗話】は「粗俗的話」（粗野・卑俗な言葉），【臟話】は「粗下流的話」（粗下品・汚穢な言葉）の意味である。【下流】の「①粗下游：長江～|黄河～。②粗指卑下的地位：～社会。③粗卑鄙齷齪：～話|～無恥。」（①粗川下。「長江の下流」「黄河の下流」②粗下等の地位を指す。「下流社会」③粗卑劣で汚い。「卑猥語」「卑劣で恥知らず」）の③の様に，「粗口」は内容・表現の両面で最悪・最低の要素が強い故，【臟話】の用例は「不説～」（卑猥な言葉を使わない）と為る。「粗口」の用例「爆～」（罵倒語を吐く）は「爆」の字・義の様に暴言の爆発を思わせるが，凡そ教養人の「爆粗口」は余程の不平不満が昂じて理性の堤防が決壊した結果と言える。NHK衛星放送プレミアム報道特集『家族と側近が語る周恩来』（4回，2011.8.1～4）にも出た秘書紀東（1943～）の回想に拠ると，歴代指導者中随一の「聖人君子」の形象が強い周も珍しく「国罵」を口走った事が有る。彼は林彪事件後に極左路線の批判を進め「文革」の弊害を是正しようとした処，1972年12月6・17日に毛沢東は林を「右」「極右」とし逆に「文革」推進を命じた。⁴⁰ 堪りかねた周は執務室で関連の書類を床に投げ散らかして，「他媽的，明明是極左，怎麼是極右？」（畜生，明らかに極左なのに，どうして極右かよ）と呟いた。『現代漢語詞典』には毛が愛用した「粗口」の「狗屁」「狗屎堆」の項が有り，其々「粗話毫無可取的話或文章等（罵人的話）：～不通|～文章|還新產品呢，～！」（粗些かも取り柄の無い話或いは文章等〔人を罵る言葉〕。「話にならん。てん

で駄目だ」「下手糞な文章」「何が新製品だよ、屁にならない!」,「**囧**比喻令人深惡痛絶の人(罵人的話)。(囧人にこの上無く憎悪させる人を喩えて言う。「人を罵る言葉」と為る。他にも語釈に「(罵人的話)」が付く単語・成句は数多く採録されているが、同類の中で最も使用頻度が高く威力が低い「他媽的」は代表格でありながら入らない。海外の中国語学習者には字面通り「彼の母の」と誤解させたり、^{ネット}電腦網上の文章等で発音の tāmāde の略と書く隠語表記も『現代漢語詞典』巻末の「^{アルファベット}西文字母開頭の詞語(欧文字母で始まる語)の中の【TMD】(=「**美国**战区導彈防禦系統。[英 theater missile defense 的縮写]」[**米**国の戦域誘導導彈防禦系統。英語 theater missile defense の略])を連想させたりする(『広辞苑』『日本国語大辞典』に無い「TMD」の採録と「米国の」の限定は、**中共政權の軍事重視・米**国重視の現れか)等、言語・文化の理解を促す意味では少し不備・不親切の感じもしなくはないが、英語の卑猥語の筆頭と為る4字(『広辞苑』の「**ファック**【fuck】=「性交の意の俗語」)の様に、**間投詞**や**語気助詞**の如く気軽に使われているから**意外と扱い難い**、という技術的な理由も考えられよう。

儒教の**本家**よりも**和**を**責**び**礼**を**重**んじる日本では**侮辱語**は少なく「**国罵**」の概念も無いが、『新明解国語辞典』初版(編集主幹=山田忠雄,三省堂,1972)の【**ばか**】では、「**雅語形容詞**“はかなし”の語根の強調形)㊦①-な㊦記憶力・理解力の鈍さが常識を越える様子。また、そういう人。“一者④・薄一・人を一にする [=ばか者のように扱う]・一にならない [=軽く見過ごせない]・一に出来ない [=無視できない]”(④は声調記号)の後に、「[人をののしる時に一番普通に使う語。公の席では刺激が強過ぎるので使わない方がいい。] ↔利口」と付言してある。実質的に1人で編み上げた彼の国語学者・辞書編纂家(1916~96)の独断によって、語釈・用例は**捉破れの創意・個性に溢れ大衆の歓迎と識者の疑問**を受けた。例えば「はまぐり②【**蛤**】(《は当用漢字表外の字を表す記号)の「[**浜栗**の意]遠浅の海にすむ二枚貝の一種。食べる貝として、最も普通で、おいしい。からはなめらか。[ハマグリ科]」に就いて、作家・前衛美術家赤瀬川原平(本名克彦,筆名尾辻克彦,1937~2014)は、『新解さんの謎』(文藝春秋,96)第3章「見えてきた新解像」で、「最も普通?あさがりで普通で、ちょっと下がしじみ、上がはまぐり」という編集者「SM君」(夏石鈴子[1963~ ,後に作家])の私見に共鳴し、「そう、値段もその通りで、ということは新解さんは上流である」と断じ、「しかし漢字で浜栗とははじめて知った。何だか縄文時代の海辺の砂浜が一気に目の前に浮かんだ」と感心もした。彼は「**石投**」「**赤魚鯛**」「**赤貝**」「**臄**」「**鱈場蟹**」「**鼈**」「**蛤**」の語釈中の「うまい」「美味」「おいしい」に対し、言葉の意味の多数決の選挙結果を待たずに自分の投票をどんどん公表してう個性を揶揄したが、この7語中「赤魚鯛」の他に『広辞苑』又は『日本国語大辞典』でも味の良い評判が出る。常識人の一面を持つ「新解さん」の「**ばか**=一番普通」の依拠・同調の欠落が気に懸るが、**理解力・記憶力の極端な欠如**を**貶**すこの**言葉**を**筆頭**に**挙げた**のも「**上流**」**感覚の証**か。同版の【**糞垂れ**】の「くそだれ④【**糞**《垂(れ)》(《は当用漢字表に有っても音訓

表に無い読みを表す記号)の「〔大便を垂れ流す者の意〕“最低だ”という意で、人をののしって言う言葉。〔口語形は“くそつたれ⑤”〕は、『広辞苑』の【糞垂れ】の「人をののしって言う語。くそつたれ」より詳細・明快である。ところがfuckの和訳に可く当てられる「畜生」の項は、「①〔仏教で〕前生における悪行のため人間以外に生まれたもの。動物。②けだもの(同様に、道を知らない、卑しむべき人間)」と、同じ「最低」級の侮蔑を示しながら罵倒語の性質を記していない。対して『広辞苑』の「①(人に畜^レされて生きているものの意)禽獣・虫魚の総称。今昔一五“慈悲深くして人を導き一を哀ぶことかぎりなし”②〔仏〕畜生道に生まれた者。③人をののしって言う語。また、憎しみうらやんでいう語。“こん一め”」(『今昔』=『今昔物語集』)は、『現代漢語詞典』の「〔畜〕泛指禽獣(常用作罵人的話)。也作畜牲。」(〔畜〕広く禽獣を指す[人を罵る言葉として常用する]。“畜牲”にも作る)と共通する。

『日本国語大辞典』の「〔名〕(梵 *tiryāṇe* の訳語) ①(人に飼養されて生きているものの意から)禽獣・虫魚などの総称。畜趣。ちきしょう。②“ちくしょうどう”(畜生道)①の略。③他人をののしって言う語。人でなし。強く憎んだりうらやんだりした時にいう語。感動詞的にも用いる。ちきしょう。こんちくしょう。やつ)の中で、①は「靈異記(810-824)上・七“畜生すら猶恩を忘れずして恩返報す。何(いか)に況(いは)むや義人にして恩を忘れむや」等3点の用例と、漢籍典拠「韓非子-解老“民産絶則畜生少、兵数起則士卒尽、畜生少則戎馬乏、士卒尽則軍危殆”」が有り、②は「百座法談(1110)閏七月八日“三途八難の遠き道と申は地獄餓鬼畜生にこそ候なれ」等3点の用例と、仏典出処「法華経-譬喩品“又以_レ貪著追求_レ故現受_レ衆苦_レ、後受_レ地獄畜生餓鬼之苦_レ」」が付き、③は「虎明本狂言・河原太郎(室町末-近世初)“其やうな事が有ものか、あのちくしょうが”」等4点の用例と、漢籍典拠「隋書-后妃伝・宣華夫人陳氏“上恙曰、畜生何足_レ付_レ大事_レ」」が示される。③の最後の用例「浮雲(1887-89)〈二葉亭四迷〉二・一二“畜生…馬鹿…口なんぞ聞いて呉れなくったって些(ちっ)とも困りゃしないぞ”」の様に、『新明解国語辞典』で一番普通に使う罵り言葉とされた「馬鹿」と同列に為る。中国の侮蔑語「不是人」に当る「人でなし」の人間失格の意味は相当きつく、「畜生すら猶恩を忘れず」と照らせば思知らずや恥知らずの非難も含まれる。中国の正史や日本の近代文学の先駆作に見える罵り言葉を素通りした「新解さん」の謎は、言葉の捉え方の基を為す実生活に於ける紳士的な態度が解の1つかと考えられる。佐々木健一(1977~ , NHKエデュケーション番組担当責任者)著『辞書になった男 ケンボー先生と山田先生』(文藝春秋, 2014)の「第二幕 “水”と“油”」第3節「【鱈】論争——学生のひねたような人・山田忠雄」に、『明解国語辞典』改訂(第2)版(金田一京助監修, 三省堂, 52)の編集会議で、「【鱈】はうまい、美味。そう書けばいい」と山田が唱えた時の摩擦が活写されている。他の出席者が無言で視線を交した後、「一番の年長者である金田一春彦が山田を諭す。/ “いやいや、そりゃないでしょうよ、山田君。他の魚に『美味』なんて書いてないのに、いくらなんでも【鱈】

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (2) (夏)

に『美味』はおかしいだろ、君” / “いや、私が住んでいた富山県では、【鱈】が一番おいしんです” / 語気を強め、真剣な表情で語る山田。 / 一瞬の間があり、山田以外の三人から思わず笑いがこぼれた。金田一春彦が、必死に笑いをこらえながら返す。 / “わかった、わかった。それじゃあ『富山県では』、と書こうか？” / そのことばが発せられた刹那、山田の表情が強張った。そして、思わず拳をテーブルに叩きつける。 / “ドンッ！” / 笑い声がこだましていた場が一瞬で凍り付く。 / “私は真剣に言ってるんだ！何なんだ、その言い方は！” 【鱈】に美味の評価を書く国語辞書は遂に無いので彼の愛鱈家（造語）はやはり可笑しいが、鬼の形相で温厚な先輩に食って掛るかかる彼の怒声も、馬鹿にされると感じた時に多い「巫山戯るな」の様な荒い言葉を使っていない。『新明解国語辞典』では別の意味の「なんなん①③【<喃喃>】」の上に「* なんとか①【何とか】」（副）に、「⊖これこれとはっきり・言えない（言わない）事柄を表わす」の最後（4番目）の用例として、「— [= “ばか” と言うのをはばかった言い方] とはさみは使しよう」と有るが、左様の忌憚りが常識と為る「君子の国」では真面な新聞は罵り言葉で悪声を放つまい。

傾城国色の千載怨念・無期長恨

『日本国語大辞典』の【畜生】②の語釈と為る【畜生道】〔名〕①は、「仏語。六道の一つ。悪業の報いによって導かれた畜生の世界、またはその生存の状態。畜生。畜生界。畜趣」の意で、「往生要集（984-985）大文一」等5点の用例が有る。②道義上許しがたい色情の世界。すなわち、肉親の間での性関係。また、男色を売る境涯」も、「浄瑠璃・津国女夫池（1721）三」等2点の用例が付く和製漢語である。『広辞苑』では「①〔仏〕三悪趣さんあくしゆ・六道・十界の一つ。生前に悪業をなした者が趣おもく世界。地獄道・餓鬼道より上だが、禽獣の姿に生まれて苦しむ。②人倫上許し難い間柄での色情」の両義で、『新明解国語辞典』では「〔仏教で〕悪行の結果、死後繰り返す、畜生としての境遇。“一墮おちちる〔父子・（母子）や兄弟などの近親の間柄で相姦あひこが行われる〕”と説明・例示されているが、現世至上主義の強い中国では転生てんじやうを信じる人が少ないのでこの概念は定着し得ない。和製漢語「近親相姦」（『日本国語大辞典』の語釈は「〔名〕血縁の近い男女が性交を行なうこと」、用例2点の初出は「仏和法律字彙 [1886] 〈藤林忠良・加太邦憲〉。『広辞苑』の項は「通常禁忌として禁じられた近親者との性的関係。禁じられた範囲は時代・社会によって異なる。近親姦。インセスト）」に当る「乱倫」は、『現代漢語詞典』で「〔動〕指在法律或風俗習慣不允許的情況下近親屬之間發生性行為。」（〔動〕法律或いは風俗・習慣が許容しない状況で近親者との間で性行為が行われる事を指す）と定義される。『日本国語大辞典』の【乱倫・濫倫】は漢籍典故「世説新語－方正“玩雖三不才レ、義不レ為三乱倫之始”」に由来し、用例3点中の初出は比較的早い「東寺百合文書－へ・応永七年（1400）九月日・僧超珍東寺籠

衆職請文（大日本古文書三・一〇四）」だが、その表記は中国語で「乱」（luàn）と違う「濫」（làn）で、語義も『広辞苑』の「人倫をみだすこと。人倫の道にそむくこと。特に、男女の間についていう」と通じて、「『名』（形動）人倫を乱すこと。人の道に背くこと。また、そのさま。近代では特に男女関係の無秩序についていう」と為る。他に和製漢語「乱交」が中国語で「濫交」に作るの類の微妙な違いはともかく、『広辞苑』の【近親相姦】の禁止用件の時代・社会に対して、『現代漢語詞典』の【乱倫】の許容範囲の法律と風俗・習慣は民族問題を浮彫にする。性の乱脈に厳しい大陸で香港・台湾の乱倫罪が無いのは55の少数民族も一因かも知れず、昔も異民族の習俗を尊重して漢族で準乱倫と見做す道を歩んだ王昭君が居る。

『日本国語大辞典』の【王昭君】は「(古くは“おうじょうくん”とも) ㊦中国の前漢の元帝の宮女。名は嬀(しょう)。昭君は字(あざな)。紀元前三三年匈奴(匈奴)との和親のため、呼韓邪单于(こかんやぜんう)に嫁し、その地で没した。後世多くの文学作品などに哀話として潤色された。生没年未詳。㊧雅楽。㊨の故事にちなみ曲」の両義で、後者の用例「拾芥抄(13-14C)上・音楽部」は事績の日本に於ける知名度を思わせる。『広辞苑』の「前漢の元帝の宮女。名を嬀しょう、字を昭君という(一説に名を昭君、字を嬀とも)。元帝の命で前三三年匈奴きよとの呼韓邪单于こかんやに嫁し、夫の死後その子の妻となったという。中国王朝の政策の犠牲となった女性の代表として文学・絵画の題材となった。元曲『漢宮秋』はその代表」は、亡夫の本妻の息子と再婚させられたという悲劇の極致の所在を示している。北方の遊牧民族の雄である匈奴の風習はこの点でも漢族の倫理と氷炭相容れず、漢族では縦令血縁関係が無くても父の妻妾と結ばれるのは乱倫に近いとされる。杜甫は彼女の薄幸を題材にした七律「詠懷古跡五首・其三」の尾聯(最後の2句)で、「千載琵琶作胡語、分明怨恨曲中論。」(千載琵琶胡語なを作し、分明に怨恨曲中に論ず)と嘆く。⁴¹⁾ 頸聯(第5・6句)の「画図省識春風面、環佩空歸月夜魂。」(画図しゅうしき省識春風かんばいの面、環佩空しく還げつやる月夜の魂)は、この若い美人と面識を持たず画像に由ってしか知らなかった帝の後悔に触れる。頷聯で描いた昭君の「一去紫台連朔漠、独留青塚向黄昏。」(一たび紫台を去って朔漠さくに連なり、独り青塚ちやうとどを留めて黄昏に向う)よりも、中国では漢元帝(劉奭せき、前75~前33、前49即位)が画工に騙された話の方が有名である。元帝は多数の宮女から「上物」を選ぶ際に面接でなく画像に頼ったので、宮女たちは画工に賄賂を贈って美しく描いてもらったが、容姿に自信が有る昭君だけは不正を働かなかった為、醜く描かれ君主に召される幸運が巡って来なかった。漢に帰順した呼韓邪が漢の婚に為って北辺の守備を請け負うと申し出た時、元帝は最も印象の悪い彼女を選んだ(『後漢書』「南匈奴伝」に拠れば冷遇に耐えぬ彼女が自ら志願した)が、暇乞いとまごいに来た彼女の想像を絶する美貌に息を呑んで手放すのを惜しんだ。約束を破棄できず送り出した後に数年来の不明を追及して画工の収賄を突き止め、処刑された画工毛延寿(歿年不詳)は皮肉にも昭君物語の脇役として名を留めて来た。史実・虚像混在の伝説は不運の制度的な根源を提示する点で今日的な意義が有り、帝の美

女より国益を優先する価値観や周囲の情報操作に由る誤認の宿命も浮び上がる。

超絶の美貌を形容する中国の四字熟語を『現代漢語詞典』から4つ拾えば、掲載順で「閉月羞花」「沈魚落雁」「傾城傾国」「天姿国色」が先ず思い浮かぶ。其々の語釈は「使月亮躲藏，使花朵害羞，形容女子容貌非常美麗。也說羞花閉月。」(月に隠れさせ、花に恥らわせる。女性の容貌が非常に美しいことの形容。「羞花閉月」とも言う)，「《莊子・齊物論》：“毛嬙、麗妃，人之所美也；魚見之深入，鳥見之高飛，麋鹿見之決驟，四者孰知天下之正色哉？” 後來用“沈魚落雁”形容女子容貌極美。」(『莊子・齊物論』「毛嬙・麗妃は、人が之を美しとする所也。魚は之を見れば深く入り，鳥は之を見れば高く飛び，麋鹿は之を見れば決して驟る。四者の孰れか天下の正しき色を知らん哉？」)後に「沈魚落雁」を用いて女性の容貌が極めて美しいことを形容する)，「形容女子容貌很美。(語本《漢書・外戚伝》：“一顧傾人城，再顧傾人国。”)」(女性の容貌がとても美しいの形容。[語源は『漢書・外戚伝』の「一顧すれば人の城を傾け，再顧すれば人の国を傾く」])，「形容女子容貌非常美麗，也指容貌非常美麗的女子。」(女性の容貌が非常に美しいことの形容。又容貌が非常に美しい女性を指す)と為り，1475頁に【羞花閉月】の項(=「見71頁【閉月羞花】」[71頁の【閉月羞花】を見よ])も有る。4点の内に原形の儘で日本語に入ったのは前の2つであり，『広辞苑』では【羞花閉月】は「美貌にうたれて，花ははじらい月はかくれるの意で，女性の容貌のきわめて美しいことのたとえ。羞月閉花。閉月羞花。→沈魚落雁」，【沈魚落雁】は「(『莊子』に，人間が見て美しいと思う人でも魚や鳥はこれを見て恐れて逃げるとあるのを，後世，魚や鳥も恥じらってかくれる意に転用して)美人の容貌のすぐれてあでやかなこと。→羞花閉月しゅうか」と説明されている。『日本国語大辞典』の【羞花閉月】は「『名』(その美貌に対しては，花もはじらい，月も隠れるの意)美しい女性をたどえていう語。羞月閉花。閉月羞花」に，「奇想凡想(1920)〈宮武外骨〉絵画無落款論」の用例しか無いが，『現代漢語詞典』には「明湯顯祖《牡丹帝・驚夢》」等2点の典拠が有る。【閉月羞花】は「『名』その美しさに，月に顔をかくし，花もはじらいに満ちた様子を見せるということ。美人の形容にいう。→沈魚落雁閉月羞花(ちんぎょらくがんへいげつしゅうか)」に，「雪中梅(1886)〈末広鉄腸〉下・六」の用例のみ有り漢籍典籍が無い。【羞月閉花】の「『名』(その美貌に対しては，月もはじらい，花も閉じる意)美しい女性をたどえていう語。羞花閉月。閉月羞花」の用例は，より早い初出の「読本・昔話稲妻表紙(1806)一・一」等2点が付くが，楊果(1195～1269)著元曲『採蓮女』(蓮を採る女)の「羞花閉月，沈魚落雁」は引かれぬ。【沈魚落雁】は語釈の「『名』(『莊子-齊物論』の“毛嬙麗妃，人之所美也，鳥見之深入，鳥見之高飛”による語で，人間の目には美人に見えるもので，魚や鳥はこれを見て恐れて逃げるの意で，後世転用して)魚や雁も恥じらって姿をかくすほどの美人。すぐれてあでやかな美人の形容。沈魚落雁閉月羞花，羞花閉月。羞月閉花」でも，「洒落本・里鶴風語(1772-81頃)」の用例の後の漢籍「通俗編-禽魚・沈魚落雁」でも原典が示してある。次の【沈魚落雁閉花羞

月』は「『名』（“閉月羞花”は、月が雲の間に隠れ、花がはじらってしぼむの意）“ちんぎょらくがん（沈魚落雁）”と同じと、「滑稽本－浮世床（1813－23）二・上」等2点の用例が示す様に、『採蓮女』で並列された四字熟語をくっ付けた擬似和製合成語である。

『現代漢語詞典』の【傾城傾国】の直前の【傾城】は、「①[名]全城；満城：～出動。②[動]使全城傾倒，形容女子容貌很美：～之貌 | 姿色～。参看 1064 頁『傾城傾国』。」（①[名]都市 [城下] 全体。町中。「町中総動員する」②[動]都市全体（町中）の人々に傾倒させる。女性の容貌がとても美しいことの形容。「傾城の貌」「姿色傾城」。1064 頁の「傾城傾国」を参照せよ）である。『広辞苑』の「けいせい【傾城・契情】」の「[漢書外戚伝上，孝武李夫人“一顧すれば人の城を傾け，再顧すれば人の国を傾く”]（美人が色香で城や国を傾け滅ぼす意。“契情”は音意共にうつつた当て字）①美人。平家——“ただし大將軍矢おもてに進んで—を御覧せば”②遊女。近世では，特に太夫を指す。女郎。傾国」（「平家」＝『平家物語』）は，両義とも和製で中国語の発音が異なる2語（qīngchéng と qīqíng）の混合も独自性が有る。『日本国語大辞典』の「『名』（『漢書－光武李夫人』の“北方有—佳人—，絶世而独立，一顧傾—人城—，再顧傾—人国—”から出た語）①美人の色香におぼれて，城や国を傾け滅ぼすこと。②美しい女性。美人。美女。傾国。③遊女。女郎。近世には特に太夫，天神など上位の遊女をさすことがある。傾婦」は，其々「とばすがたり（14C 前）一」等2点，「平家（13C 前）四・競」等2点，「宇治拾遺（1221 頃）一二・二四」等6点の用例が有り，「契情」の表記は③の最後の「人情本・春色辰巳園（1833－35）三・六条」に出る。『現代漢語詞典』で立項されていない【傾国】は，『広辞苑』では「[漢書外戚伝上，孝武李夫人“一顧すれば人の城を傾け，再顧すれば人の国を傾く”]（美人が色香で城や国を傾け滅ぼす意）①美人の称。特に，遊女。傾城②遊里。遊郭」の両義と為り，『日本国語大辞典』では「『名』①国家の存立をあやうくこと。②『漢書－外戚伝上・光武李夫人』の“一顧傾—人城—，再顧傾—人国—”から]美人。美女。傾城（けいせい）。③遊女。傾城（けいせい）。④遊里。遊郭」の多義を持つ。和製語義の③は「評判記・名女情比（1681）五」等4点，同じ④は「浮世草子・御前義経記（1700）四・三」等2点の用例が付く。①は「宝生院文書－永延二年（988）十一月八日・尾張国郡司百姓等解（平安遺文二・三三九）」等3点の用例と，漢籍典拠「史記－項羽本紀“此天下弁士，所居傾レ国”」が有る。②の用例2点の初出「太平記（14C 後）一・立后事“詩人採て后妃の徳とす。奈何かせん。傾城（けいせい）傾国（ケイコク）の乱今に有ぬと覚て，浅増（あさまし）かりし事共也」は，「奈何～事共也」が【傾城・契情】①の2点目の用例と重なるが，「傾城傾国」の成語に発展できず「乱」と結び付いたのは亡国の歴史に染まった事か。現に漢籍典拠「白居易－長恨歌“漢皇重レ色思レ傾国—，御宇多年求不レ得”」は，絶世の美女の意の典型である半面「妖精」の魔力で国運が傾いた故事の一部を為す。

②の2点目の用例「随筆・胆大小心録（1808）一五四“牡丹の香，是れも臭し，楊貴妃の腋

臭(わきが)ありしといふには、名花・傾国両(ふたつ)ながら相臭といはん”は、王昭君と共に古代中国「四大美女」に入る『長恨歌』の主人公の光と影を映し出す。この120句の七言古詩の前出の書き出しの次に、「楊家有女初長成，養在深閨人未識。天生麗質難自棄，一朝選在君王側。回眸一笑百媚生，六宮の粉黛無顔色。」(楊家に女有り初めて長成す，養われて深^{けい}閨^{いま}に在り人未だ識らず。天生の麗質自ずから棄て難し，一朝選ばれて君王の側^{かたから}に在り^{ひとみ}。眸を回^{めぐら}して一笑すれば百媚生ず，六宮粉黛無顔色)と続く。『現代漢語詞典』の【麗質】(=「^囗婦女」美好的品貌」[^囗〈女性の〉美しい容貌])の用例が「天生～」で、『広辞苑』の「容姿の美しい生れつき。“天成の一”」と共に白居易の名句の影響を思わせる。『日本国語大辞典』の語釈「〔名〕髪・皮膚・顔だちなどの美しい生まれつき。美人の体質」と為り、「本朝文粹(1060頃)一四・為二品長公主四十九日御願文〈大江朝綱〉」等4点の用例と、漢籍典拠の「白居易-長恨歌“天生麗質難自棄-，一朝選在君王側-”」が示されている。【天生】の項でも語釈「〔名〕自然に生ずること。天然。また，生まれつき。生まれついで宿命」，用例「経国集(827)一・棗賦〈藤原宇合〉」等5点の後に，語順の違いが有りつつ「白居易-長恨歌“天生麗質自難自棄，一朝選在君王側-”」が引いてある。『広辞苑』の「①天然に生ずること。②うまれつき。天賦」に対して，『現代漢語詞典』の「^囗属性詞。天然生成的」(^囗属性詞。天然と生れ付いている)に用例が3点付き，1番目は他ならぬ「～麗質」である。「傾城傾国」と字・義が重なる「天姿国色」の前半の2字は，「^囗天然の姿態・姿容，特指天生的美麗姿容(多用於女子)：～秀出|絶色～。」(^囗天然の姿態・容姿，特に天生の美しい容姿[多く女性に用いる]。「天姿秀出」|「絶色天姿」)と説明・例示されている。『日本国語大辞典』(語釈=「〔名〕天与の容姿。生まれつきの姿」，用例=「菅家文章(900頃)一一・為温明殿女御奉賀尚侍殿下六十算修功德願文」等3点)の漢籍典拠は，「～秀出」の由来の「魏志-明帝叡伝・裴注“明帝天姿秀出，立髮垂^レ地”」である。「秀出」は『日本国語大辞典』に拠れば「管子-小匡“有^レ拳勇股肱之力，秀^レ出於衆^レ者^レ”」が漢籍典拠(語釈は「〔名〕他より一段とすぐれること。ぬきんでること。ひいでること。傑出。抜群」，用例は「中華若木詩抄[1520頃]中」等2点)で，『広辞苑』でも採録されている(=「他にぬきんでて，ひいでること。傑出」)。『現代漢語詞典』ではこの言葉の項は無いものの【天姿】でこれを含む四字成語を2つ出し，『広辞苑』の「天稟の容姿。生れつきの姿」の用例無しと照らせば熟語化・常用度の高さが分る。

『現代漢語詞典』の【国色】(語釈=「〈書〉^囗指一国内容貌最美女子」[〈書〉^囗①国内の容貌が最も美しい女性を指す])の用例は「天姿～」で，次の【国色天香】は「原是賛美牡丹的話，後常用来称赞美女。也説天香国色。」(元は牡丹を賛美する言葉で，後に往々にして美女を称赞するのに用いる。「天香国色」とも言う)，【天香国色】は参照指示の「見498頁【国色天香】」のみ有る。「国色」は『広辞苑』で「①一国の中で随一の容色。絶世の美人。②牡丹^{ばな}の異称」の両義と為り，『日本国語大辞典』の「〔名〕①国内第一の容色。絶世の美人。②植物

“ぼたん（牡丹）”の異名」は、其々「三体詩素隠抄（1622）一・二」等4点の用例と漢籍典拠「春秋公羊伝－僖公一〇年“驪姫者国色也，献公愛之甚”」，「南郭先生文集－三編（1745）四・画牡丹」等2点の用例と漢籍典拠「劉禹錫－賞牡丹詩“唯有牡丹真国色，花開時節動京城”」が有る。『現代漢語詞典』にも『広辞苑』にも無い【天香】は、「《名》①天上界の香。また、よい香りのたとえ。②皇帝のまわりに漂う香り。③植物“ぼたん（牡丹）”の異名」の多義で、①は「正法眼蔵（1231-53）如来全身」等3点の用例、②は「皮日休－送令狐補闕歸朝」の漢籍典拠、③は「譬喻尽（1788）五」等2点の用例が付く。「国色」も有り「天香」も入ったのに組合せが日本語にも多い四字熟語と為らないのは、「天・国」「香・色」の2対を含む「対＋対」を好み且つ求める習性の差に要因が有ろう。19世紀初めの「傾国」の用例に出た「名花～」や「牡丹の香」と「楊貴妃の腋臭^{わきが}」の対は、近世日本の文人の高い漢学素養は知識・発想の両面に深く涉った所産である事を示す。『広辞苑』の【牡丹】①の「ボタン科の落葉低木。中国原産。中国で花王と称する」に対して、『現代漢語詞典』の㊦①（属性＝「落葉灌木」）の称賛は「著名的観賞植物」（「的」＝な）に止まる。『日本国語大辞典』の《名》①の語釈と「菅家文草（900頃）四・法花寺白牡丹」等3点の用例は概ね客観的であるが、漢籍典拠「白居易－惜牡丹詩“惆悵階前紅牡丹，晚來唯有兩枝殘”」は感傷を隠さない。文字と無惨さから「長恨歌」の「落葉滿階紅不掃」（落葉階^{きざし}に満ち紅掃^{こうはら}わず）を連想するが、一代の名花・傾国に捧げた「詩傑」（造語）の讚歌・挽歌の中・日両国語への貢献は絶大である。【麗質】の第2の用例「太平記（14C）三五・北野通夜物語事“楊貴妃〈略〉天の生せる麗質（レイシツ）なれば」の様に、彼の貴妃物語は「国色天香」の絢爛豪華や栄枯盛衰の代名詞と化した観が有る。「長恨歌」を結ぶ「天長地久有時盡，此恨綿綿無絶期。」（天長地久時有って尽くるも、此の恨は綿綿として絶ゆる期無し）は、王昭君の「千載琵琶作胡語，分明怨恨曲中論。」よりも直接的・永久的の感じが強いが、共通の宮廷・権力絡みの悲劇は「文革」中や改革・開放後の権貴勢力の有り形を想起させる。

注

- 29) 「世界の現状と正反対，中国農村女性の自殺率が高い理由——英メディア」（翻訳・編集/中原），Record China（日本最大の中国情報サイト），2011年10月4日。
- 30) 本稿中の毛沢東の詩・詞の訳は竹内実（武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』，文藝春秋新社，1965）に拠るが，個別の表記等を変える処が有る。
- 31) 日付は『芥川龍之介全集』第24巻（岩波書店，1998）「年譜」（宮本覺）に拠る。自宅訪問の様子は『上海遊記』（『大阪毎日新聞』21.8.17～9.21 断続連載，『支那遊記』[改造社，25]所収）「十八 李人傑氏」で詳記されている。
- 32) 蘇曉康・羅時叙・陳政著『烏托邦祭：一九五九年廬山之夏』の日本語版（辻康吾監修，佐藤美穂子・渋谷裕子・館野雅子・永田小絵・望月暢子・横川澄枝訳『廬山會議 中国の運命を定めた日』，毎日

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (2) (夏)

新聞社, 92) 第2部「八卦陣」の「II 憤激」では、「諸君はあんなに話したのだから、私に一時間ぐらいはしゃべらせてもよいだろう。そうでないと三度、睡眠薬を飲んでも、寝つけない！」と訳されているが、後半部分は直訳の方が常識外れの実情を反映できる様に思える。

- 33) 『毛沢東伝 (1949—1976)』第39章『一九七二年内政和外交』に詳述が有る。
- 34) 高文謙『晩年周恩来』([米国・紐育] 明鏡出版社, 2003) 第8章「中美和解与“周恩来外交”風波」第7節「政治局批周會議」に詳述が有る。
- 35) 郭金栄『走進毛沢東の最後歲月』(中共党史出版社, 2009) 第13章「最後一個国慶節」に詳述が有る。
- 36) 「在中国共產党第七次全国代表大会上の口頭政治報告」(1945.4.24), 「機関槍和迫撃砲の來歴及其他」(59.8.16)。
- 37) コスイギン(ソ連首相)と会談する際の発言(1965.2.12), 宋永毅「從另立中心到輸出革命——讀『機密檔案中的毛沢東』」(2018.6.6, 明鏡網[明鏡出版社]7.14~15)より。
- 38) 『毛沢東伝 (1949—1976)』第31章『中蘇論戰』に詳述が有る。
- 39) 田原総一郎「原發報道は“大本營発表”に頼りすぎている」, 日経ビジネスオンライン(日経BP), 2011年3月30日版。
- 40) 『毛沢東伝 (1949—1976)』第40章「十大前後」に詳述が有る。
- 41) 本稿中の唐詩は多く蘅衡退士編『唐詩三百首』(1763)から取り、特に注を付ける場合を除いて、訳は目加田誠訳注『唐詩三百首』(全3巻, 平凡社, 1973・75)に拠り、個別に表記等を変える処も有る。

附記

本研究は本学の2017年度研究専念制度を利用して始めた物で、期間中に書き進めた本稿は修正・加筆の上で順次発表して行く。筆者は30年来の中国政治や日中比較(社会・文化等)の研究を踏まえて、習近平の党首誕生・集権専制を中共・中国史上の特異な大事件として論考する。日本と照らし合わせる視点や国語辞書を手掛りにする方法の様に、**尖锐な対立が渦巻く「高危」領域と距離を置きながら、政治文化の深層を試掘し学者としての発見・論評を試みたい。**

去る7月4日に上海で湖南出身の女性董瑤瓊(29)が習の写真に墨汁を掛け、独裁反対の叫びと共に自撮り動画に収め世界に発信した。24日に清華大学法学院教授許章潤(55)が所属の民間研究調査組織のHPに習批判の提言を発表し、「**澆墨事件**」を皮切りとした今夏の破天荒な異変は自然界の狂乱と共に昂進した。一連の「**黑白鳥**」的な事象も本研究の材料に為るが、筆者及び本研究の独自の立場を示す意味も兼ねて、その直前に書いた小文を本著の後書として前倒しに此处に載せて置く(後掲)。

『国際関係学部 Newsletter』(学部研究・学会委員会編集・発行)第49号(18.7.10)に、本稿の動機・志向・背景等を語る研究筆記「**悲劇と笑劇 悲願と“笑願”**」を発表した。6月30日完成、7月2日校了と明記した通り、「**政治風波**」の前夜の対岸の眩きに他ならないが、毛沢東の「**文革**」中期の個人崇拜「**降温**」(温度下げ)に鑑みた目下の「**劇場統治**」に関する所感は、予想外の早さで7月12日に始まった中央電視台・『**人民日報**』の急減速に由つて的中した。

他方、習の異様に長い「**神隱**」(8.1~18)の後の礼賛再開は**長期執政の霸氣**を漲らせ、前出の随想で夢見た彼の99歳時の党大会出席の可能性を改めて思わせた。筆者は囲碁の人工智能制覇時代に関する研究で「**新1強**」は天使か悪魔かという難問にぶつかったが、習の戦いは何処まで既成の常識や朝野の許容の

限度を超えて行くか、毛沢東に比肩し米国に打ち勝とうとする壮大な実験は吉に出るか凶に出るか、予測不能の「只有天知道」（天のみぞ知る）の領域に突入した故に興味・探求が尽きない。

2018.9.27, 中共政権の存続期間（25 199 日）が
到頭故ソ連（1922.12.30～91.12.25）を抜けた日

悲劇と笑劇 悲願と「笑願」

夏 剛

2017年度に丸1年の研究専念期間を戴き、誠に感激に絶えない。終了時から定年まで3年未満（2年）で劣後扱いなのに、応募者僅少の珍しい事態で貴重な機会に恵まれた。「運も実力の内」と自惚れるわけにも行かず、只々同僚諸賢に深謝したい。お蔭で長年の中国政治研究の新展開として、『毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」』の執筆が順調に進んでいる。

習の治下の「^{ブラック・スワン}黒白鳥」的な激変には、名状し難い驚愕・感嘆を禁じ得ない。1歳年長の彼と同じ「文化大革命」の被害者だけに、あの暗愚な失政の二の舞いは最早無いと信じていたが、昨今の個人崇拜・超絶集権の再演を見て、「建国の父」の影響の強さを改めて痛感した。「^ペ中国大陸には幻影が出没している。それは毛沢東の亡霊だ」と言う可きであろうか。

この眩きが擬えた『共産党宣言』の書き出しは、最初の中国語全訳版（1920）で「一個怪物、在欧洲徘徊着、這怪物就是共產主義。」（1つの怪物が^{ヨーロッパ}欧州を徘徊している。その怪物は他ならぬ共產主義だ）と為り、95年の中共中央編訳局の定訳で「一個幽霊、共產主義的幽霊、在欧洲游蕩。」（1つの幽霊、——共產主義的幽霊が、^{さまよ}欧州を彷徨っている）に変わった。

言語学者・教育家の陳望道は社会主義研究社（上海）で訳本を出した翌年、中共の創設^{メンバー}（1921）成員に為り、23年に党首の独裁への反撥で脱党した。復旦大学学長在任中の57年に復籍した彼はその時、大学に於ける党委員会の撤廃を唱えたが、同大学国際政治学部教授出身の王滬寧を最高指導部に据えた習は、60年前の毛の歩みと同様に党の指導を強化した。

王は関西のK大学から訪問学者として招聘された時、書類に小学の卒業日の記入まで求める煩雑さを可笑しく感じ辞退した。代りに米国の大学の客員研究員に為り、習の外交智囊の担当能力の基礎の一部を固めた。日本は「^{カルチャー・ギャップ}文化溝」の所為で相性の悪い彼と縁を結べなかったが、中共創設大会の代表と欠席の創設者の15人中6人が日本留学経験者である。

初代総書記の陳独秀と創設者の李大釗（俱に^{しょうとも}北京大学教授）・3人指導部中の李達（後に武漢大学学長）と同じ「留日」組の陳望道は、英語・日本語版を底本とし、堺利彦・幸徳秋水訳（『平民新聞』、1904）の「一個の怪物^{はいかい}欧州を徘徊す」の影響を受けたが、この文脈では

「徘徊」は字形に2人の存在(部首の中国語名=「双人旁」と非への回帰を思わせる。

ドイツの革命家・思想家マルクス＝エンゲルスが共著した共産主義運動の綱領の発表の101年後、1949年に共産党の主導で中華人民共和国が成立した。以来の長期1党独裁は指導思想とするマルクス主義の生命力を証明したが、習近平生誕(1953)の101年前のマルクス著『ルイ・ボナパルトのブリュメールの霧月18日』でも、人口に膾炙する命題の名文が冒頭に出ている。

「ヘーゲルは何処かで、全ての世界史的大事件・大人物は、言わば2度現れると述べている。彼はこう付け加えることを忘れた。1回目は(偉大な)悲劇として、2回目は(惨めな)笑劇として、と。」括弧内の形容詞が17年後の第2版で削除された事によって、歴史の様々な繰り返しに一層幅広く対応できるが、「笑劇」も「茶番劇」の訳より汎用性が高い。

中国語の定訳の「黒格爾在某個地方說過：一切偉大的世界歴史事變和人物，可以說都出現兩次。他忘記補充一点：第一次是作為悲劇出現，第二次是作為笑劇出現。」でも、散見される「鬧劇」(どたばた喜劇)は採用されていない。前の段落中の論説対象の「漫画」(和訳=「戯画」)的な感じにも似合うが、笑劇は嘲笑・失笑・苦笑・冷笑・爆笑を招く代物である。

清の康熙帝の命に由る勅撰『全唐詩』の4.9万首弱を集計した「ビッグ・データ」に拠ると、感情表現の字の上位は「悲」(77.43%)・「思」(17.22%)・「憂」(1.46%)・「喜」(0.86%)・「懼」(0.52%)・「怒」(0.45%)・「楽」(0.06%)である。2200人余りの作者の悲情の比率が端的に高い事は多難の国柄を現し、色を表す字の中で緑系に次ぐ白系も悲の要素が濃い。

唐の「詩聖」李白の「白髮三千丈」は日本で中国流の誇張の典型とされるが、下の句の「緑愁似箇長」(愁に縁りて箇の似く長し)は別の国情・国民性を示唆する。「笑一笑、十年少。愁一愁、白了頭。」(1回笑えば、10歳若くなる。1度愁うと、髪が白くなってう)という熟語に、白髪を憂慮の所産と捉え笑いを若返りの即効薬に使う中国人の考えが窺える。

石川恭三は『一読、十笑、百吸、千字、万歩——医者流儀』(河出書房新社、2016)で、1日に1度は纏まった文章を読み、10回くらいは笑い、百回くらいは深呼吸し、千字くらいは書き、1万歩を目指して歩く事を勧めた。私は1日平均1万歩ほど歩き、千字以上の論文(完成原稿)を書く事を20年続けて来たが、毎日10回笑うのは意外と難しいと感じる。

北朝鮮と中国はソ連の1党独裁の世界最長記録への更新に向っているが、両国の初代領袖は晩年に精神の重圧や病苦を癒す手段を笑いに求めた。金日成は定期的に喜劇俳優に小噺等を披露させ、1日5回以上笑える場合は褒美を与えたと言われる。毛沢東は娯楽作品の放送を全面禁止する「文革」中、漫才の巨匠侯宝林に自分専用の録画を作らせて観賞した。

侯は動乱終結後「文化大革命」を「大革文化命」(文化の命を大いに革める)と諷刺したが、人間の特権と為る笑いの為に独裁者の特権を濫用する事は毛らしい。門外不出の録画の極秘制作の際に、数十人の警備兵等が効果音の笑いを入れる任務に当たった。漫才の面白さが解ら

ぬ儘に担当者の旗の指示でその都度哄笑する、という漫画的な^{ひとこま}1 齣は滑稽的である。

人民大会堂（国会議事堂）の給仕係の長年の採用基準に、大・大都市の者、高・中級幹部の子弟、高学歴（短大以上）者、政治に関心が強い者は除くと有った。毛沢東時代の中央警備団（聯隊）でも忠誠心を重んじる故に無学の農村出身者が多く、知的な諧謔も北京っ子の洒落も解し様が無なかったから、悲劇的な時代の中の笑えぬ笑劇が演じられたわけである。

和製洋語 sales point は近年の中国語に直訳の「売点」で入ったが、笑いの要点を言う和製漢語「笑点」は、『日本国語大辞典』第2版（小学館、2000～02）でも採録されていない。三浦綾子の長篇小説『氷点』（朝日新聞社、1965）の題を振った日本テレビの演芸娯楽番組「笑点」は、「文革」勃発（66.5.16）の前日に発足した長寿名物として象徴的な意味を持つ。

1日10回以上笑う為の健康法として、「笑点」「エンタの神様」（日本テレビ）や「東大王」（TBS テレビ）等を見ている。試問遊戯「東大王」の場合は「知力の壁」を偶に自分が破った時の満足感と共に、出演者の珍答・迷答で捧腹絶倒するのも心身に有益であるが、「笑点」は中国の波乱と対照的に日本の平和を実感させてくれ、やはり格別な憩いの楽園である。

2012年4月10日、中共中央政治局會議は薄熙來の政治局委員・中央委員の職務停止を決定し、胡錦濤体制は「文革」色彩の強い要人の追放で毛沢東時代への逆戻りを拒否したが、6年後の同日に国家広播電影電視（放送・映画・テレビ）総局が「文革」的な手法で、「低俗」云々を理由に冗句共有アプリ「内涵段子」（意味深の小噺）の永久閉鎖を命じた。

登録者数2千万人の「段友」（小噺同好者）から直ちに不満の声が上がり、多くの人が広電総局の前に自家用車の警笛を鳴らして抗議する動きも出来た。「癒し系」に対する「否、死刑」（自製駄洒落）の封殺は大眾を敵に回したが、些細な楽しみを奪われた被害者に車を所有する層が含まれる事は、「文革」の蛮行の再来を許さぬ中国社会の進歩の証と思える。

羅貫中著『三国志通俗演義』の冒頭の詞に曰く、「古今多少事，都付笑談中。」（古今多少の事，都て付す笑談の中。）歴史の再演は「笑点」流に考えれば、「1回目は衝撃的，2回目は笑劇的」という冗談風の論断が思い泛ぶ。又ヘーゲルに対するマルクスの補足を付け加えるなら、悲劇の結末は笑劇の要素を帯び、笑劇は初期から悲劇の危険を孕む、と言いたい。

中国哲学の陰陽・善悪等の相互内包・対立統合の原理は、「物極必反」（物事は極まれば必ず反転する）と辨証法的に考える。権勢の最大化を図る「文革」初期「造神」（神格化）を懲 懲した毛沢東も、4年後「降温」（温度下げる。熱を冷ます）を始め、私利の為に尽力した林彪等を斬ったので、新しい個人崇拜の「劇場統治」（造語）の行方は興味津々である。

中曽根康弘は『自省録——歴史法廷の被告として』（新潮社、2004）の中で、80歳までの人生の中で一番苦しかった事は何ですか、と質問した時の鄧小平の答えを書き留めている。「文革のときでした。（中略）あの時はもう終りかとも思った。しかし、私は元來が楽観主義者ですから、こんなバカなことがいつまでも続くはずがないと考え直して、確信した。」

「2度と行きたくない〇〇とは？笑点流に答えて頂きたい」に擬えて言えば、2度と「文革」の地獄に落ちたくないのは国民共通の気持である。歴史は繰り返すとしても「文革」は笑劇でも茶番劇でもなく、無数の人を死なせた惨劇と極悪非道の「醜劇」(不様な芝居。醜悪な事態)なので、自らの犠牲に甘んじて暴挙を許す「羊たちの沈黙」は勿論有り得ない。

1980年4月と誤記された会談は84年3月25日の事で、80年代中期は両国関係の史上最良の時期に当る。第3章「人物月旦(続) 海外の偉大な指導者たち」の「鄧小平——偉大なる楽観主義者」の次に、「胡耀邦——あたかも『三国志演義』の登場人物」と題した回想が出るが、千載一遇の晴れ間は胡一中曾根の信頼・「互動」(相互作用)の賜物である。

共和国の最良の年として、1956年の次に84年を挙げたい。56年には史上最も民主的・透明な党大会(第8回)が開かれ、鄧の仕切る党規約改正で毛沢東思想が指導理念から消され、個人崇拜防止の為に集団指導体制が確立した。84年には建国35周年式典で現れた通り、鄧中央軍事委員会主席・胡総書記・趙紫陽総理の「三駕馬車」が上手く連携していた。

鄧は第2の「文革」を封じる為に、82年の第12回党大会で規約を改正させ、「党は如何なる形式の個人崇拜を禁じる」という鉄則を入れた。更に集団指導の重要性を強調し、党・国家が1人か2人の声望に頼る事は不健全で危険だと警鐘を鳴らした。若し自分の遺志と党の総意が貫徹されなくなる展開を知れば、天国に居る彼はどんな心境に為るであろう。

鄧は「改革・開放の総設計師」の偉業の半面、「資産階級自由化」許容等の罪状で胡を更迭し、胡の急逝で触発された民主化運動に同情的な後任をも失脚させ(趙は事変後15年も軟禁され死に至った)、終いには人民の子弟兵が人民に発砲する武力鎮圧に踏み切り、「道德底線」(道德上の許されぬ一線)を破った行為で、歴史の歯車を狂わせ中国の発展を歪めた。

私の研究者としての最大の転換点は、『文学』(岩波書店)89年3月号に論文「“文革”後の中国文学と日本の戦後文学——相互参照の試み」を発表した後、「6.4」天安門事件で文学の無力さを自覚させられた事である。以来、両国の言語・文化・社会・政治等の比較に軸足を移したが、80年代の日中交流の現場に居合せ、中共党首に接した体験が土台に有る。

私は84年に中国社会科学院(國務院直属の国家学士院・「智庫」)外国文学研究所の助理研究員(講師)と為り、最初の大仕事として小説家山崎豊子の『大地の子』の取材通訳を務めた。胡耀邦との会見(84.11.29, 85.12.7, 86.10.23)を単独(通常は双方各1名)で通訳したが、党首や趙紫陽等の要人を直に観察する稀有の体験は後の研究の手掛りと為った。

中曾根が「類稀な政治家」と表現した胡は純真な故に職位を保てず、彼の「非典型」性と対極的に習近平は毛沢東以来最も党首の素質・能力を備えている。毛・習の「独才」(両言語とも同音の「独裁」)に因み、独特の才能を指す造語)の解明も、経緯の点検や是非の判断と共に今回の研究の重点であるが、其処で見えて来る特質は中共の有り形とも重なる。

17年9月23日、NHK ^{スペシャル}報道特集「^{のこ}総書記 遺された声～日中国交 45年目の秘史」が放送され、胡・山崎の3回の会見が録音・写真付きで紹介された。15年9月27日の同特番「作家山崎豊子～戦争と人間を見つめて」に次いで、構想段階から様々な形で関り協力者として名が明記されたが、30年余り前の情景には感無量で、又「^{ショック}老いる衝撃」に襲われた。

制作者に対する数回の説明・^{レクチャー}助言の他に、同じ数時間を費やした協力作業として、17年5月31日に来洛中の胡耀邦の三男徳華氏に一連の往事を披露・論評した。10月6日放送のNHK「かんさい熱視線」の「そして名作は生まれた 山崎豊子『大地の子』誕生秘話」で、自分の語りの映像が流れたが、^{スピード}速度の異様な遅さに昔との巨大な落差を見せ付けられた。

改革派の発信基地『炎黄春秋』月刊が前年に当局に乗っ取られた事も有って、元副社長の胡氏に迷惑を掛けまいと慎重に言葉を選んだ所為も有るが、適切な表現を出す思考・言語力の低下は63歳頃から顕著に為りつつある。毎年の健康診断の分析報告は「健康年齢は実年齢より若い」と最上の評価をするが、^{カッタ}気力充実・意欲満々の若い頃とは同日に論じ得ない。

山崎の他の^{インタビュー}面会取材も含めて通訳の声は除外され字幕で表示されたが、胡・山崎の話中に同時通訳（中国語＝「同声伝訳」）が入る処も有った。湖南訛りの強い胡と大阪弁で機関銃の様に喋る山崎の遣り取りを空かさず対応した当時の姿を見て、年齢が倍増し^{オールド}初老に差し掛かった身の焦燥と悲哀から、『論語』「子罕」に見える孔子の滋味深い人生観を思い起す。

「子在川上曰：“逝者如斯夫。不舍昼夜。”」（^{ホトリ}子川の上に在りて曰く、「^{のたま}逝く者は斯くの如きか、^{オールド}昼夜を舍めず。」）古代希臘の哲学者ヘラクレイトス（紀元前540頃～前480頃）は万物^{カッタ}流転の喩えに、「人間は同じ川に2度入れない」と説いたが、同時代（前551～前479）の儒教の祖師である思想家・教育家の金言は、「^{ハイツ}光陰似箭」（光陰矢の如し）の感傷が強い。

『全唐詩』では「之・乎・者・也」等の文法的な機能等を持ち単独で文と為らぬ「虚詞」を除いて、人間本位の思考・志向が強い伝統を映して「人」が一番多く出る。英国の^{オックスフォード}牛津大学出版部の調査（06）で浮上した現代英語の使用頻度1位の名詞は、人が時間に束縛される当世の実態を物語るtimeであるが、人は他の動物や自然に勝てても時間には勝てない。

若き毛沢東の詩に、「自信人生二百年、会当水撃三千里。」（自ら人生二百年と信じ、^{まさ}会に水を撃つこと三千里^{なるべし}当）と有る。水泳好きの彼は62歳時の56年6月に武漢－漢口間の長江を横断し、^{うた}詞（長短不揃いの定型詩）「游泳」に「子在川上曰：“逝者如斯夫！”」と詠んだが、^{べん}中共唯一の文筆・雄辯力を誇る彼は同年から長文も論理的な講演も遺していない。

中国の厄年は生れ年と同じ^{えと}干支の12年毎の「本命年」の他、孔子・孟子（前372～前289）の享年（数え歳）に^{かん}因んだ大厄年の「坎」（難関。鬼門）が有る。毛は晩年に「七十三、八十四、閻王不召自己去」（73歳、84歳になると、閻魔に呼ばれなくても自分で^ゆ逝く）という俗諺を何度も口にし、実際にも「^{いわる}虚歳」（数え歳）83で所謂「マルクスに会いに行った」。

彼はニクソン米大統領と会う9日前(72.2.12)危篤に陥り、急報を聞いた周恩来総理は極度の恐懼で失禁した。鄧小平はこれを念頭に全権独占の領袖が倒れた時の危害を警告したが、超人的な心・技・体を持つ周も77歳で亡くなり(1898~1976)、鄧は92歳まで生きた(～香港帰還直前の97.2.19)が、晩年の帕金森病に由り健康寿命が享年以下であった。

毛は第2の大厄年を越える100歳まで行けるとの俗説を外賓に語った事が有り、「還有希望嗎?」(まだ望みが有るのか)という最後の言葉も長生への執着を示した。毛沢東時代の武漢・済南軍区司令官の曾思玉は、生誕100周年(2011.3.2)の前後に口述した回想録『我的前百年』(我が前[半生]の百年)で、100歳の大台の次は200歳とする意識を発露した。

曾は12年12月31日に世を去り、その遺著(大連出版社、2巻、13.2)を見る事が出来なかったが、人生200年の自信を法螺吹きと笑う向きが無い。「行百里者半九十」(百里を行く者は九十を半ばとす)の警句とも関連するが、「長命百歳」の祈願・努力・環境が揃ってこそ90歳超が可能に成り、彼の3桁達成も折り返し地点と見る気概に負う処が有ろう。

朝日新聞中国総局著『核心の中国——習近平はいかに権力掌握を進めたか』(朝日新聞出版、2018)第4章「進む一強支配 二〇一七年一〇月」の第3部分「党大会開幕」第1節「異例の演説」に、1期目にして「核心」の地位にまで上り詰めた実績がそうさせるのか、習は初めての舞台上で自信を漲らせて語り続けた、という冷徹な観察・克明な描写が有る。

習は、水を飲む間さえ惜しむかのように話し続けた。トイレを我慢できないのだろうか、壇上でも中座する党代表の姿がちらほらと現れ始めた。議長団の最高齢で一〇〇歳になる元政治局常務委員の宋平は、杖をついて壇上から降り、二〇分ほど中座した。

結局、習の政治報告は原稿にして三万二千字、実に三時間二三分を費やす前例のない長大なものになった。

中国では満場一体の傾聴を印象付ける為に代表の中座が報じられない為、紙「尿布」(御襠褌)で我慢する人も居たのではと憶測されたが、この報道は首領主催の会議での居眠りが高官の処刑を招いた北朝鮮との違いを感じさせる。華国鋒主席の「11大」報告の4時間等有るから空前の長さとは事実誤認であるが、100歳の元老の登壇こそ前例が無い。

宋は党中央組織部部長・政治局常委経験者で胡錦濤を党首候補に推薦した人物とされ、同じ1917年4月生れの元中組部副部長李銳も特別招待代表に有ったらしい。彼は毛の秘書を在任中の59年に失脚し以来自由・民主派の立場を貫いており、個人崇拜の風潮への抵抗から出席を辞退したと報じられるが、若し参加したなら100歳老人が複数に為っていた。

「特邀」(特別招待)代表の出席の制度化は、鄧小平が開幕日の司会を務めた「13大」(1987.10.25~11.1)に始まる。代表(1936名)+特別招待代表(61名)の構成は、彼の引

退後の「14大」(92.10.12~18)で踏襲された。1927年以前に入党し党の要職を経験した46名は正式代表と同等の権利が持たれ、「長老治国」時代の遺風は代々継承されて来た。

毛沢東時代の諸悪の根源は個人崇拜であり、鄧小平時代の失政は先ず長老院政に帰せる。「12大」(82.9.1~11)で古参要人引退後の受け皿として中央顧問委員会が創設されたが、過渡期の補佐・助言機構は党規約の決りで実質的に党中央と同格に為り、「喧賓奪主」(喧しい客人の大声が主人の声を圧倒する。庇を貸して母屋を取られる)の主客顛倒を招いた。

初代主任の鄧は军委主席として政治局常委格で、副主任の薄一波は政治局定例会議に参加でき、常委も必要の時に政治局会議への出席が認められた。薄は「党内生活会」(批判・自己批判を行う会合)で胡耀邦への吊し上げを主導し、胡は数日続く苛烈な査問の末に辞任させられたが、党大会で党規約と人事が決った時から次期の軌道が敷かれるわけである。

「庇を貸して母屋を取られる」の「自分の所有物の一部を貸した結果その全部を奪われる」、「庇護してやった相手から恩を仇で返される」の両義は、胡の御蔭で「文革」後に名誉回復を得た薄の僭乱と「恩將仇報」に当て嵌る。薄情の彼は胡の追悼会への出席を遺族の遺恨で拒絶されたが、「16大」(02.11.8~14)まで特待代表として壇上に居座り続けた。

薄は99歳の誕生日(07.2.17)を迎える直前の1月15日に死去し、後ろ盾の喪失で次男熙来の最高指導部入りの野望は次第に絶望へと転じた。後の無期懲役(13.10.25確定)の罪名に職権濫用が有るとは因果報応を感じさせたが、罪深い父親が「17大」(07.10.15~21)で登壇できたとしても「虚歳」100なので、宋平の大台達成の記録は新時代に相応しい。

「14大」代表は13期中央第8回総会(91.11.25~29)で2千人と決り、後に開催年に合せるのか1992人になり、3人の死で天安門事件の年と同じ数に為った。天の悪戯か2人が保守派の重鎮で、83歳に為る2日前(6.21)逝った李先念国家主席は武力鎮圧を支持し、毛の政治秘書・政治局委員を務めた胡喬木(9.28歿、享年80)は反胡耀邦の急先鋒である。

あの忌々しい惨禍の23周年(12.6.4)に、上海証券交易所総合指数の始値2346.98点に23と逆様の形の「89.64」が含まれ、取引終了時の下落幅も64.89点と為った事で、電腦網上で「上証指数」までが検索不可の禁句にされた。今年と同じ頃64元(1元≒17円)の電子決済に対する規制も一部出たが、この類の悲しい笑劇は何時まで持続・増幅するだろうか。

日経平均株価と同様その取引指標の数値は其処まで精密に操作し得ないから、出来過ぎた「巧合」(偶然の一致)は記憶の風化を許すまい天意かと見られた。3年後の同月には左様な「敏感」数値が無かった代りに、習近平の62歳の誕生日に当る15日の5361.5点への到達を期待する怪気炎に満ち、個人崇拜に基づく盲信の異次元の異様さが一時漂っていた。

12年12月4日の建国年と同じ1949点で大底を打った株価は上昇へ転じた後、15年前半に党中央機関紙『人民日報』の提灯上げも有る官製相場場で暴騰し、6月12日(金曜)の終

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (2) (夏)

値 5166.35 点は 7 年 5 ヶ月ぶりの高値を付けた。国泰君安証券の「6.15」上場も御祝儀買いを見込んだ事であろうが、衆愚を嘲笑う様に国君の目出度い日から大暴落が始まった。

3 千点辺りに張り付いて来た市場の崩壊は金融動乱の結果に他ならないが、毛以降の党首の誕生日が個人崇拜防止の為に非公開だったのに対して、習の誕生日が可く知られている事は隔世の感が有る。鄧が司会した「13 大」初日の出席者数の 1953 は奇しくも習の生年であるが、スターリン死去・朝鮮戦争休戦・高崗「反党集団」肅清の年に彼の原点が有る。

日本経済新聞編集委員兼論説委員の中澤克二は『習近平帝国の暗号 2035』（日本経済新聞社、2018）で、党首再選の 17 年 10 月 25 日は 100 年前の露西亜 10 月革命のユリウス暦の日（西歴 11.7）に因んだのかと直観する。中国はソ連を反面教師と見る方が多く、10 月革命 100 周年記念座談会に政治局常委の出席も無かったので、些か迂遠過ぎる嫌いが有る。

前中国総局長の慧眼が光る好著は類書中の白眉であるが、毛の呪縛と習の闘争に関する拙論では様々な暗号・暗合を読み解く。「10.25」の連環には 4 年前の薄熙来刑期確定や 30 年前の「13 大」開幕も有るが、「13 大」代表・特待代表数の 1936+61 は「15 大」（97.9.12～18）の年と同じで、習の中央委員候補の末席からの躍進・登頂は「15 大」が起点である。

江沢民は完全引退（05.3.13）の直前の元日に、米国の投資銀行家クーン著 *The Man Who Changed China: The Life and Legacy of Jiang Zemin*（中国を変えた男——江沢民の人生と名残）と中国語版（談鋒・于海江訳『他改变了中国：江沢民伝』、上海訳文出版社）の刊行を以て、名を残す精神的な遺産（legacy）を置いたが、別の名残の仕掛けも用意した。

江時代の初の党大会は彼を総書記に推薦した李先念等の死で代表数が就任年と同じに為ったが、特待代表 46 人との合計 2035 人は習の中期計画の節目の年と重なる。同格の特待代表 60 名の中で初日に 90 歳と為った彭真が主席（議長）団（198 名）常委会（31 名）に入ったが、後の元老参政の肥大化の結果「19 大」主席団常委 42 人中 15 人が退役者である。

特待代表優遇制度発足 20 年後の「17 大」では、「15 大」以来の長老混在の主席団常委の「主席台」（議長席）着席の上に、前党首の江沢民が序列 2～9 位の政治局常委を凌いで胡錦濤総書記に次ぐ席に就いた。史上初の平党員の特上席は「18 大」（12.11.8～14）の踏襲で固定化し、引退（89.11.9）後の党大会参加を自粛した鄧小平も及ばぬ名誉欲を顕にした。

習総書記時代の「19 大」（17.10.18～24）の開幕式の公式報道では、議長席の前列に居た 41 人は政治局常委・委員・長老群・他の高官党の順と為るが、序列 25・26 位の江沢民・胡錦濤は習の左・右側の 2・3 位に坐った。現党首に次ぐ前・元党首の超特等優遇は報道陣を騒めかせたが、慣例化して行く「新常态」は習の深遠な「名残作戦」の布石かも知れない。

中国人の処世術の交易法則に、「与人方便，自己方便」（人に便宜を与える事は、自分の便宜に為る）と有る。道家の教祖老子や『戦国策』「魏策一」等の逆説に由来した「将欲取之，

必先与之」(之を取らんと将欲すれば、必ず先ず之を与えよ)は、戦争や駆け引き等の技法だけでなく、敬意・優遇の先払いに由る互惠 (give and take, 持ちつ^{もた}かれつ)にも適する。

日本では現職者の前任と更に前の経験者は「前〇〇」と「元〇〇」と称されるが、中国語の「前/原〇〇」は直近か否かの違いが余り無い。「近/遠過去」(造語)に関らず「現任〇〇」の対置概念と為る過去の要人は、職務を全うすれば存命中に党大会の議長席に上れる特典が持たれる、という「習近平新時代」の仕来り^{しきた}りは半永久的に実施されて行く勢いである。

08年北京五輪で開会宣言を行う胡錦涛の隣に前国家主席の江沢民が坐っており、党大会と同じ敬老礼法で行くと中国主催の蹴球^{サッカー}ワールドカップ等でも似た光景が現れよう。伝統は継承される為に有り記録は破られる為に有るが、「19大」の引退時期・年齢に拘らぬ長老特待が定着すれば、宋平の100歳6ヵ月を超える超高齢登壇は近い将来に見られる可能性が高い。

今年5月27日に100歳を迎えた中曽根康弘は、首相在任通算期間(1806日)が歴代第7位の長期執政を遂げ、就任半年後の主要7国首脳会議^{サミット}の集合撮影で慣例を破って議長のレーガン米大統領と在任歴が3年半長いサッチャー英首相の間に割り込む等、大統領型志向と顕示欲の強さで知られるが、長寿にも繋がる強欲・自信は中国の要人には珍しくない。

2015年7月15日に元全国人民代表大会常委会委員長(国会議長)の万里が98歳で病没し、2月20日と8月21日に逝った元中央宣伝部長の鄧力群と元党副主席の汪東興は享年99と為った。中国的な現世至上主義と中共要人の生活・医療面を含む特権に由る長命実績を見ても、江・胡・習が其々99歳時の党大会(2027・42・52)に出る事は白日夢ではない。

温家宝総理は10年3月14日の記者会見で「行百里者半九十」を引いて、今後数年の道程は依然として平坦ではなく慢心を戒めればならぬと語った。通訳官は『戦国策』『秦策』の古訓を“Half of the people who have embarked on a one hundred mile journey may fall by the way side.”と訳したが、直ちに「網^{ネット}民^{シナズン}」から「理解が浅い」「誤訳」と糾された。

日本にも入ったこの成句は物事の仕上げの重要性を説き、9分通りの処で未だ半分に過ぎない心算^{つもり}で気を引き締め直せと言う。創元社編集部編『新版日英比較ことわざ事典』(同社、07)に拠ると、類義の英熟語は“Many a slip twixt the cup and the lip.”(杯を唇に移って行く間にも多くの失策が有る)だから、百里の旅で半分の人が途中で諦めるとは確かに違う。

最後の1割が半分に当るなら90~100間の99も肝要の節目と為るが、99歳である世に行った上記の例は「長命百歳」の至難を思わせる。他方、99は中国語で同音(jiǔ)の「久久」(長久)の寓意も有り(故に香港の英国への租借は自尊心と譲歩を示すよう3桁未満の最長の99年にした)、中国の公式享年等は数え歳が普通で「百齡老」の誉れが得られる。

党大会の政治報告は毛沢東の「7大」(45.4.23~6.11)で行ったのが最初で、「19大」報告の3.2万字はそれより1万字少ないので長時間は異例ではない。毛は「8大」で秘書代筆の2千字余りの開幕の辞を述べ、「9大」(69.4.1~24)の開幕の辞は会場の「万歳！」等の叫

びで途切れ途切れになり、個人崇拜の有難迷惑で20分の間649字しか発せなかった。

「10大」(73.8.24~28)初日の毛は林彪事変(71.9.13)後の急速な老衰の所為で、開始・終了の宣言と議事進行の他に殆ど喋らなかつた。政治報告と党規約改正に関する報告は合せて1時間弱に収まったが、散会時に自力で立ち上がれず、代表を退出させた後に椅子毎に外へ運ばれた。彼は閉会式と翌々日の中央総会に欠席し、人民大会堂に再び行かなかつた。

異変で死を意識した彼は「終活」を始め、暮れの政治局拡大会議で連日に周恩来の「対米屈服」を批判し、80歳の誕生日(12.26)の前に8大(広域)軍区司令官を相互入れ替えて異動させた。当時語った「党政軍民学、東西南北中、党は全てを指導する」は「19大」で党規約に追加され、「病夫治国」の遺産は長年の刷り込みに由って隔世遺伝の形で現れた。

「6.4」の5ヵ月後に元老院政8人衆の頭鄧小平は引退し、中顧委も92年「14大」で10年の歴史を終えた。上村幸治(後の毎日新聞中国総局長)著『中国権力核心』(文藝春秋、2000)の「13大」初日の件に、「8老」No.2の陳雲が手を貸そうとする人を払い除け5分刻みで歩いて席へ向う必死の形相が有るが、毛の死去時と同じ82歳の彼の執念は凄まじい。

宋平は杖を使って降り暫し離席した以外3時間も端坐し、病弱ながら90歳の手前まで生きた陳を大幅に上回る。元党首の100歳超の出席が実現すれば奇観に為るが、享年73・85の胡耀邦・趙紫陽の憤死を際立たせる。趙に先行して蒋介石に無期軟禁された張学良は91年に54年ぶり自由の身と為り、100歳の誕生日(01.6.3)の4ヵ月後に天寿を全うした。

習近平は「中国夢」(中華民族の偉大な復興を実現する「夢想」[夢])を唱え、「兩個一百年」(建党100周年の2021年まで「小康」[一応の余裕が有る]社会を全面的に築き上げ、建国100周年の49年頃に富強・民主・文明・和諧の現代化した社会主義強国を築き上げる)の目標を立てたが、彼は前者を成し遂げる責務と共に後者を見届けたい願望も有ろう。

「自信人生二百年」を好んで引く習は毛と同じ理想主義の一面を持つが、中国語の「夢想」は理想と幻想の両面が有り、妄想も夢想を現実と化す働きを秘める。「19大」で両元党首に与えた礼遇を建国100年後の初の党大会で自ら享受するのが彼の悲願だとすれば、私も98歳まで生きてそれを見ようという「笑願」(微笑ましい願望に言う造語)を抱く様に為る。

「人事有代謝，往来成古今。江山留勝跡，我輩復登臨。」(人事代謝有り，往来古今を成す。江山勝跡を留め，我が輩復登臨す。)唐の詩人孟浩然のこの感慨と重なる様に、「文革」勃発の50年後に習「核心」の誕生や囲碁人工知能の人類征服等，世界史的な大事件・大人物の激変との遭遇で研究の意欲が猛烈に湧き，今もこの時代に生きる幸せを満喫している。

2018.6.30(来日31周年の日)

7.2(「笑点」の顔・桂歌丸師逝去[享年81]の日)校了

(夏 剛，立命館大学国際関係学部教授)

毛泽东的“魔幻缚”与习近平的“超限战” ——古今“盛衰兴亡周期律”及中国之去向（2）

本部分以世界上属例外的中国自杀率男低女高、城低乡高为切入点，将1982~86年中共中央1号文件的相同主题作为“三农问题”严重之体现。联系“一年之计在于春，一日之计在于晨，一生之计在于勤”的传统理念，指出改革、开放的现代化加速恢复了勤劳的民族美德。

对比“光阴似箭”、“寸阴寸金”和毛泽东的“一万年太久，只争朝夕”，指出毛晚年背离首先解决为民谋生的初衷而顽固地以阶级斗争为纲。同时看到1987年胡耀邦总书记被逼下台后“只争”（一味争斗）型执政死灰复燃，挽回的时光和发展势头一再出现得而复失的迹象。

毛泽东时代的领袖神话中有通宵达旦的夙夜在公，而苦于失眠的实情可谓病夫治国的例证。对照战后日本享受和平、专注发展的高枕无忧和中共政权高度紧张、竭力维稳的枕戈待旦，揭示两国各自的“1955年自由、民主体制”和“57年专制、冒进体系”之截然相反。

基于否定“文革”、批判毛泽东错误的“81年体系”数年后解体，由此而致改革、开放部分滑入歪路，也体现出邪气盛、恶果多的国情。由扶助“三农”脱贫致富、取缔“三陪”净化风气之难，再观温州高铁惨祸中“大本营发表”惹怒公众，深感社会矛盾愈趋激化的“危势”。

（夏刚，立命馆大学国际关系学院教授）